

番号	調査次-区	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石材	特徴
S186	17-5	石皿	11.35	10.75	1.65	371.5	流紋岩	両面が全体に摩滅し、平滑。
S187	22-2	石皿	10.20	9.00	2.70	301.5	流紋岩質凝灰岩	表面が全体的に摩滅。
S188	17-1	石錘	8.15	6.90	1.50	122.5	細粒砂岩	扁平な角礫の上下端に打ち欠き。
S189	17-1	石錘	5.80	4.50	1.20	54.2	流紋岩質凝灰岩	隅丸方形の円礫の上下端に打ち欠き。
S190	22-1	石錘	6.62	3.10	1.40	35.7	流紋岩	細長い円礫の上下端に打ち欠き。
S191	17-6	石錘	6.00	6.60	1.50	84.2	流紋岩	円礫の上下端を大きく打ち欠く。
S192	17-7	石錘	6.15	3.90	1.30	45.7	石英安山岩質凝灰岩	円礫の上下端に打ち欠き。
S193	17-5・6	石錘	6.00	4.10	1.25	36.3	細粒砂岩	円礫の上下端に打ち欠き。
S194	22-3	石錘	7.40	5.00	1.75	90.8	流紋岩	円礫の上下端、右側縁に打ち欠き。
S195	17-1	石錘	5.10	4.50	1.64	65.4	流紋岩	小型品。円礫の上下端に打ち欠き。
S196	17-3	石錘	4.40	4.60	1.32	40.9	流紋岩質凝灰岩	小型品。円礫の上下端に打ち欠き。
S197	17-7	石錘	6.90	5.70	1.60	80.1	泥岩	円礫の上下端に擦切りによる溝。下端は2ヶ所の溝。
S198	17-4	石錘	5.90	4.50	1.14	42.0	流紋岩	円礫の上下端に打ち欠き。
S199	17-6	石錘	4.80	4.25	1.28	39.7	流紋岩	小型品。円礫の上下端をわずかに打ち欠き。

図129 13・14層出土石器3 (縮尺2/5)

石皿 2点出土した (S186・187)。S186は流紋岩製で円盤状の礫を素材としている。両面が全体的に摩滅し平滑であり緩やかに凹む。またかすかに線状痕も確認できる。裏面下端には敲打痕が確認できるが、整形時のものかもしれない。S187は流紋岩質凝灰岩製である。表面は平滑ではないが全体的に摩滅している。

石錘 12点出土した (S188~199)。円礫の長軸両端の両側を打ち欠いたものが主であるが、側縁も打ち欠くもの、研磨による溝をもうけたものなどもある。S189は隅丸形状の流紋岩質凝灰岩の礫を素材とし、その両端を打ち欠く。S194は左側縁も打ち欠いている。S197は泥岩製で、円礫の上下端に研磨によって溝をもうけている。下端には2ヶ所の溝がある。

⑤13層出土石器 (図130~133 図版22~26・28)

石鏃 12点出土し、すべてサヌカイト製である。内訳は、凹基式5点 (S200・201・204・208・209)、平基式5点 (S202・203・205・206・210)、未成品1点 (S207)、欠損品1点 (S211) となる。凹基式は基部の挟りの形態や脚部端の仕上げ方 (尖るもの、幅広のもの) などで差異がみられ、形態が多様である。S200は基部に明瞭な挟り部をもち、周縁に両面から細かい調整を施す。脚部端は幅広で長幅比は小さい。一方、S201は基部の挟り部が広く、周縁に両面から剥離を施し形状を整えている。脚部端は尖り長幅比は大きい。平基式は概して大型品が多いが、S210のような小型品も確認できる。S203・205は周縁からの剥離によって形状を整えており、厚さも一定である。一方、S202は周縁両面に細かい調整を施しているものの、下半部に厚みを持つ。S207は未成品で、裏面に素材面を大きく残し、細かい調整も認められない。

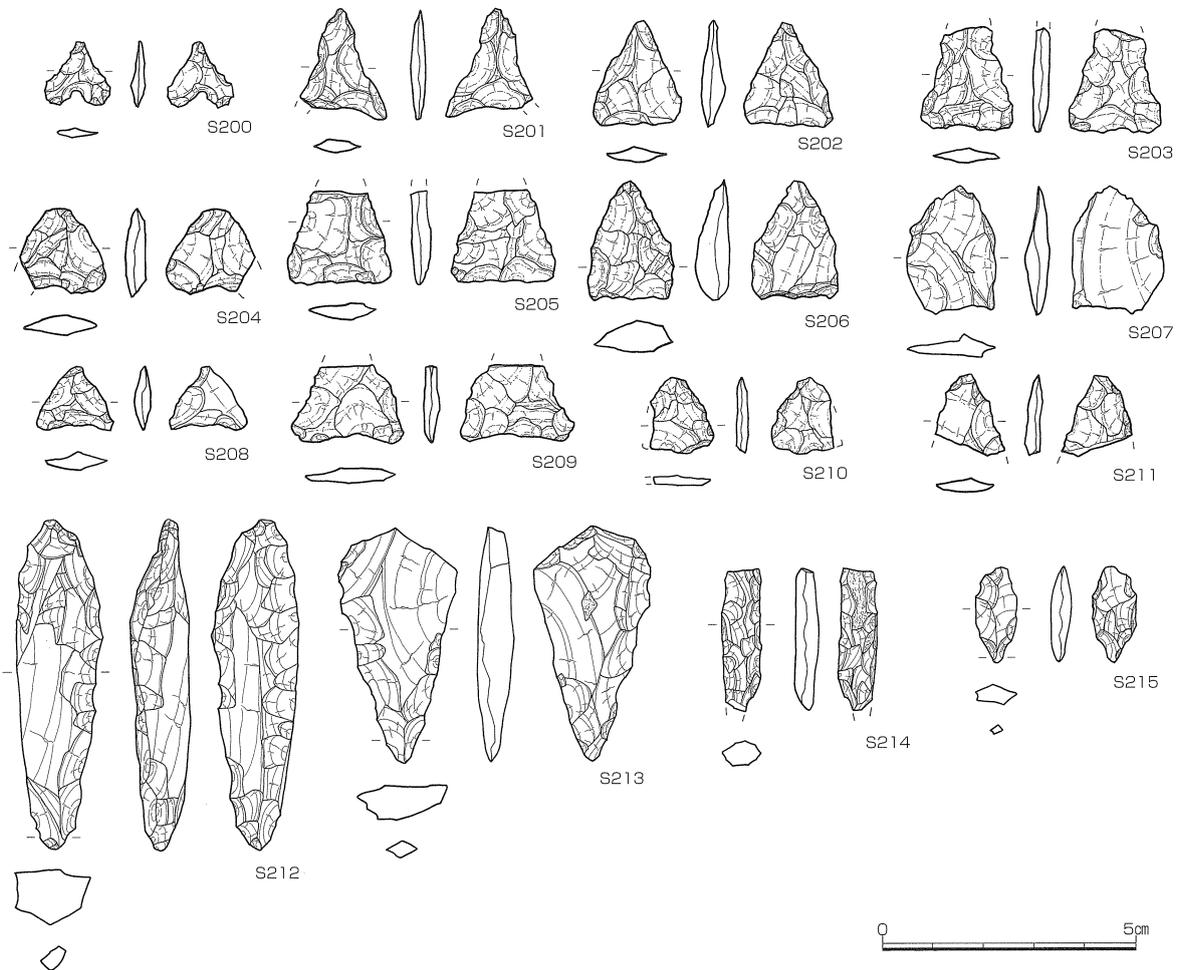
石錐 4点出土し、すべてサヌカイト製である (S212~215)。S212は厚みのある横長剥片の周縁に両面から調整を施し形状を整え、錐部分をつくり出す。握り部分は肉厚である。S213は幅広の横長剥片を素材とし、調整を加えることで、上半部が幅広で錐部分に向かって両側縁が収束する形状をつくり出す。握り部分は扁平である。S214・215は錐部分のみ残存したものであるが、S214が全体的に細かい調整を施し、細長で角柱状の錐部分をつくり出しているのに対し、S215は扁平で先端部のみ尖る錐部分をつくり出す。

スクレイパー 4点出土し、すべてサヌカイト製である (S216~219)。S216・217は素材の下縁部に両面から浅い角度で調整を行い、刃部をつくりだす。S216は弧状の刃部、S217は直刃である。いずれも原礫面の残る横長剥片を素材としており、石理に沿って剥離した厚みが一定の剥片を選択していたことがうかがえる。また、S217の右側面には折れ面が残る。S218も原礫面の残る縦長剥片を素材とし、下縁部に若干の片面調整を加えている。S219は小型品で周縁全体に細かい調整を施す。

加工痕のある剥片 1点出土した (S222)。サヌカイト製で、剥片の下縁部を中心に不規則に調整をほどこすが、断面形状から判断して、刃部をつくり出そうと意図した調整と考えられる。

石核 4点出土した。大きく板状のもの (S220・221) と立方体状の原形であったと思われるもの (S223・224) に区別可能である。S220は薄い小剥片を剥離し、下面と右側面にそれぞれ剪断面が確認でき、下縁部には細かい片面調整が施されている。剥片剥離後に石核分割し、その1つをスクレイパーや楔形石器に転用しようとした可能性もある。S223は原礫面を残す厚みのある石核で、打面を数回転位しつつ5 cmほどの不定形な剥片を取っている。剥離面が曲面を呈す箇所もあり、石鏃や楔形石器などに用いられる剥片を取ったと考えられる。S224も打面を数回転位しつつ不定形な剥片を取っており、原礫面が全く確認されない程に利用されている。

楔形石器 13点出土した (S225~237)。すべてサヌカイト製である。上下縁がほぼ併行し上下方向の相対する剥離や剪断面が認められるもの、平面が不定形で上下方向の相対する剥離が認められるものなどがある。S229は右側面に剪断面をもち、上下端に相対する階段状のつぶれた剥離痕が認められる。S233・234は自然面を残すが、上下縁がほぼ併行し、下端部に階段状のつぶれた剥離痕が認められる。S237は大型品で自然面を残すが、上下端部に階段状の剥離が認められる。ただ、左側縁に細かい片面調整が認められることや、右側面の折れ面などから、スクレイパーや石鏃からの転用である可能性もある。



番号	調査次-区	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石材	特徴
S200	17-4	石鏃	1.34	1.32	0.25	0.3	サヌカイト	凹基式。基部の挟りが明瞭。
S201	17-2	石鏃	(2.20)	(1.58)	0.28	(0.7)	サヌカイト	凹基式。基部の挟りの幅が広く、脚部先端が尖る。
S202	17-2	石鏃	2.10	1.70	0.50	1.1	サヌカイト	平基式。
S203	17-6	石鏃	(2.05)	1.80	0.30	(1.1)	サヌカイト	平基式。
S204	17-6	石鏃	1.70	(1.70)	0.40	(1.3)	サヌカイト	幅広な脚部。長幅比が小さい。
S205	17-6	石鏃	(1.85)	2.05	0.40	(1.5)	サヌカイト	先端部欠損。
S206	17-1	石鏃	2.38	1.69	0.67	2.6	サヌカイト	平基式。
S207	17-4	石鏃未成品	2.60	1.70	0.50	1.6	サヌカイト	裏面に素材面を大きく残す。
S208	17-3	石鏃	1.27	1.50	0.31	0.4	サヌカイト	凹基式。小型品。挟りが不明瞭。脚部が尖る。
S209	17-6	石鏃	(1.50)	2.20	0.30	(1.1)	サヌカイト	凹基式。
S210	17-4	石鏃	(1.35)	1.55	0.20	(0.4)	サヌカイト	平基式。
S211	17-4	石鏃	(1.60)	(1.40)	0.30	(0.4)	サヌカイト	先端部のみ残存。
S212	17-4	石錐	7.55	1.70	1.20	14.1	サヌカイト	扁平で幅広の横長剥片に調整。平面は逆三角形状。
S213	17-6	石錐	4.65	2.30	0.71	6.7	サヌカイト	厚身をもち幅狭の横長剥片に調整。握り部分は肉厚。
S214	17-1	石錐	2.80	0.80	0.50	1.3	サヌカイト	周縁に両面から調整し、角柱状の錐部分をつくりだす。
S215	17-4	石錐	1.90	0.80	0.40	0.6	サヌカイト	先端部にのみ調整を施し、扁平な錐部分をつくりだす。

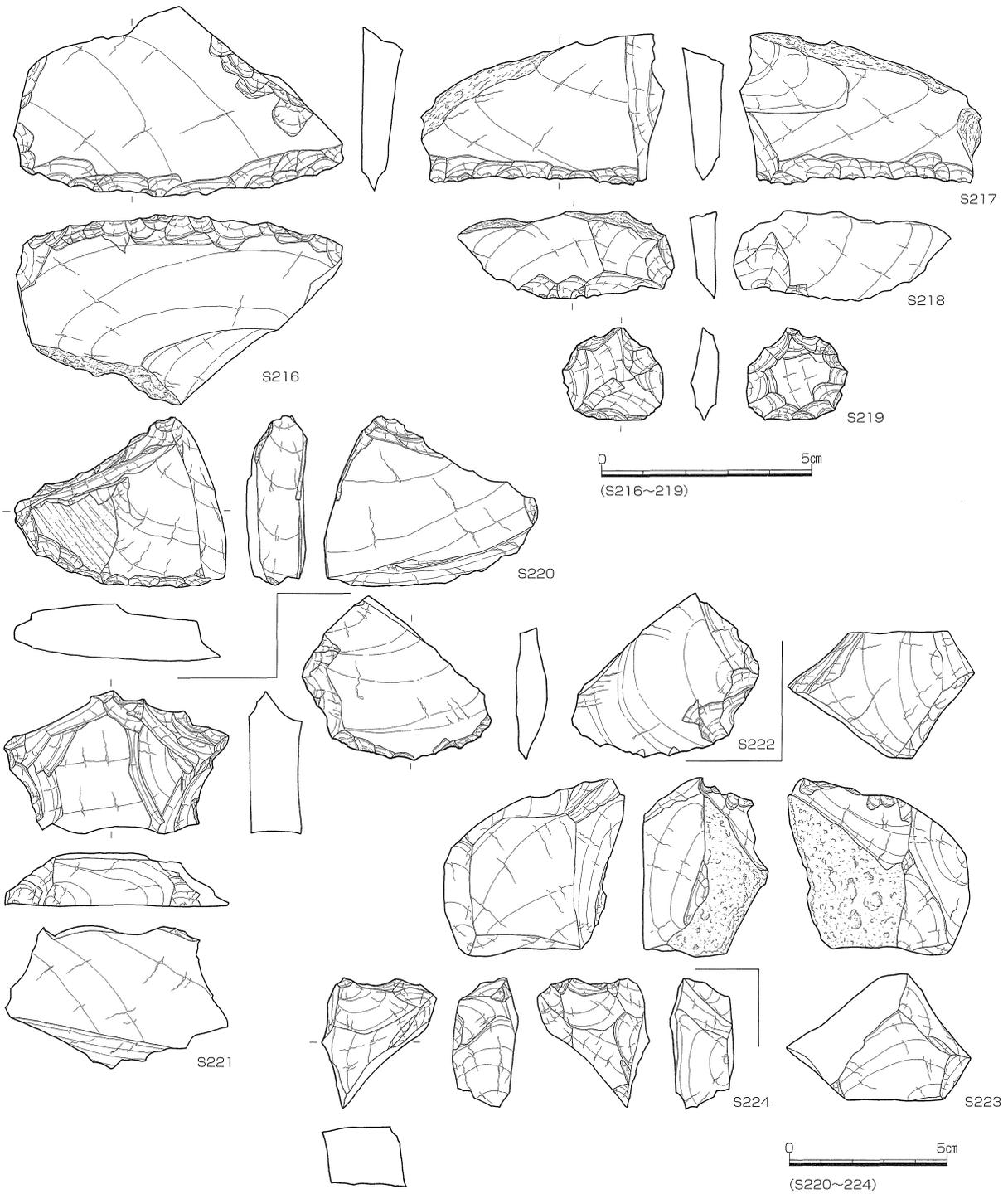
図130 13層出土石器1 (縮尺 2/3)

磨製石斧 2点出土した (S238・239)。S238は細粒砂岩製で、定角式石斧である。石斧主面と両側面との間に緩やかな稜がつくり出している。表面は石理による剥落が著しく、研磨、敲打痕などは確認しにくい、両刃で弧状の刃部を呈する。S239は流紋岩製で、乳棒状石斧の一部のみ残存する。敲打痕が全体的に観察できる。

凹石 1点出土した。S247は流紋岩質凝灰岩製で、礫の両面に明瞭な敲打痕が認められる。

叩石 1点出土した。S248は流紋岩製で、円礫表面の中央に敲打痕が認められる。

石錘 7点出土した (S240~246)。石材は多様で、いずれも円礫の上下端を打ち欠いたものである。S246は安山岩製で円礫の上下端と両側面に打ち欠きが認められる。



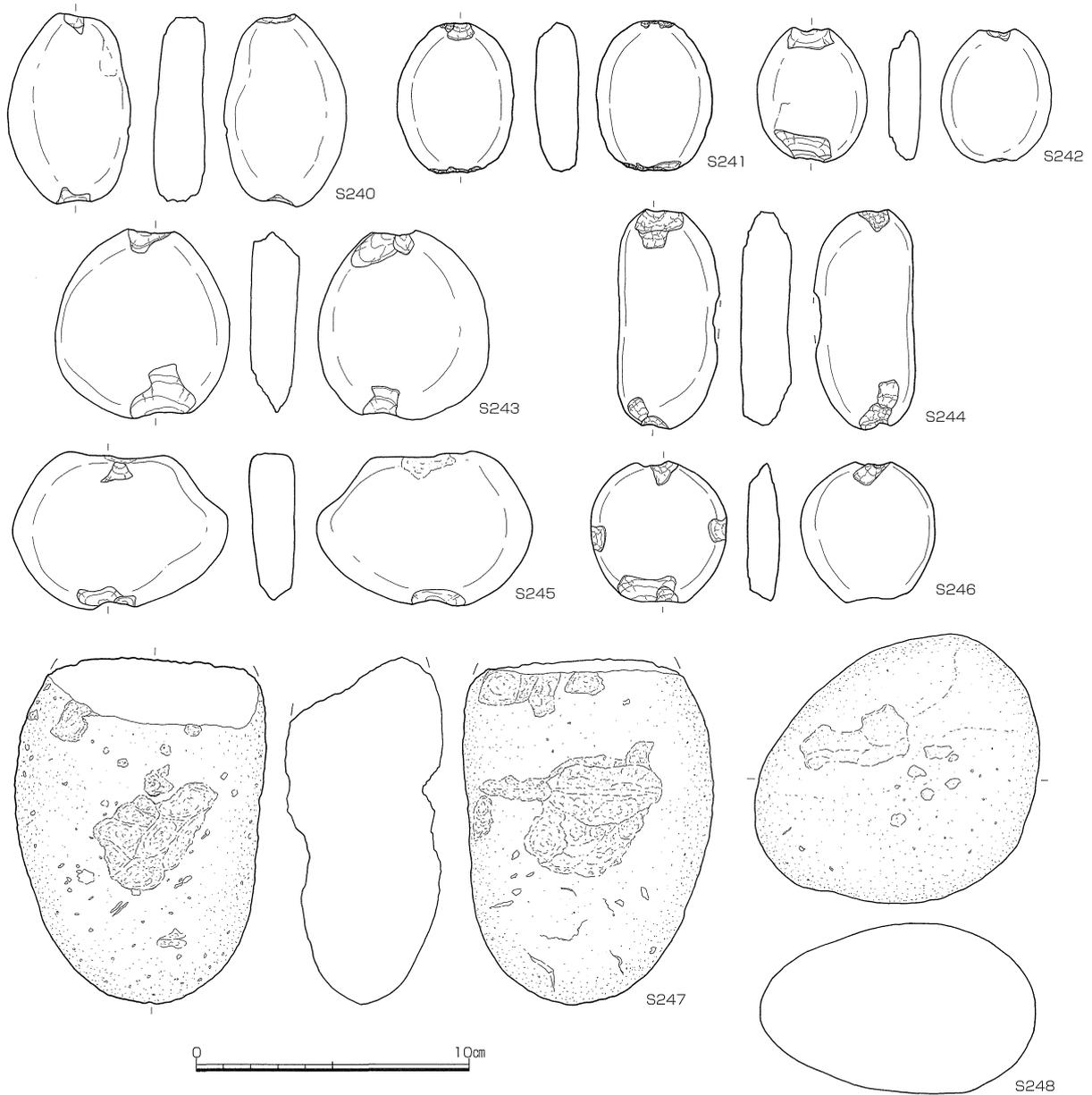
番号	調査次-区	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石材	特徴
S216	17-6	スクレイパー	4.50	7.80	1.10	36.5	サヌカイト	一部に自然面。下端部に両面調整。
S217	17-1	スクレイパー	3.60	(5.75)	1.15	(26.1)	サヌカイト	一部に自然面。下端部に両面調整。
S218	17-6	スクレイパー	2.10	5.10	0.70	8.2	サヌカイト	一部に自然面。下端部に片面調整。
S219	17-2	スクレイパー	2.20	2.40	0.71	4.0	サヌカイト	周縁全体に細かい調整。
S220	17-6	石核	5.45	6.70	1.75	65.8	サヌカイト	下縁に片面調整。右側面と下面に接断面。
S221	17-6	石核	7.00	4.10	1.70	61.6	サヌカイト	打面転位。立方体状の礫を利用。
S222	17-6	加工痕ある剥片	5.20	6.00	1.80	35.6	サヌカイト	下端部に不規則な調整。
S223	17-6	石核	6.70	5.75	4.05	132.6	サヌカイト	立方体状の礫を素材とする。自然面を大きく残す。
S224	17-6	石核	4.10	3.60	1.95	26.1	サヌカイト	上辺に階段状剥離。

図131 13層出土石器2 (縮尺 2/3・1/2)



番号	調査次-区	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石材	特徴
S225	17-1	楔形石器	2.50	2.05	0.79	4.4	サヌカイト	小型品。自然面を残す。下端に階段状の剥離。
S226	17-6	楔形石器	2.30	1.80	0.85	3.1	サヌカイト	小型品。
S227	17-1	楔形石器	1.90	2.00	0.40	1.8	サヌカイト	上端に階段状の剥離。
S228	17-1	楔形石器	2.20	2.30	0.90	3.9	サヌカイト	小型品。下端に階段状のつぶれた剥離。
S229	17-6	楔形石器	3.30	2.90	0.70	7.7	サヌカイト	右側面に剪断面。上下端に階段状の剥離痕。
S230	17-6	楔形石器	2.70	3.05	1.00	8.5	サヌカイト	自然面を残す。下端に階段状の剥離。
S231	17-6	楔形石器	3.60	3.00	1.50	12.5	サヌカイト	平面三角形状。上下端に階段状の剥離。
S232	17-2	楔形石器	2.75	4.10	0.71	10.2	サヌカイト	下端に階段状のつぶれた剥離。
S233	17-6	楔形石器	3.35	4.30	0.95	15.1	サヌカイト	自然面を残す。下端に階段状の剥離。
S234	17-6	楔形石器	(3.40)	(2.60)	1.15	(11.5)	サヌカイト	自然面を残す。下端に階段状の剥離。
S235	17-6	楔形石器	3.00	4.00	1.20	11.1	サヌカイト	上下端に剥離。
S236	17-6	楔形石器	2.70	2.80	0.85	7.1	サヌカイト	上下端に剥離。
S237	17-6	楔形石器	4.40	3.90	1.00	22.7	サヌカイト	大型品。左側縁に片面調整。
S238	17-6	磨製石斧	(9.70)	5.40	(3.00)	(238.9)	細粒砂岩	定角式石斧。表面の剥落が著しい。弧状の両刃。
S239	17-5	磨製石斧	(5.90)	(4.50)	(4.90)	(177.6)	流紋岩	乳棒状石斧。敲打痕が残る。

図132 13層出土石器3 (縮尺 1/2・2/3)



番号	調査次-区	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石材	特徴
S240	17-6	石錘	7.10	4.50	1.90	78.9	石英安山岩	円盤の上下端に打ち欠き。
S241	17-6	石錘	5.55	3.25	1.60	58.3	流紋岩	円盤の上下端に打ち欠き。
S242	17-6	石錘	4.90	4.05	1.13	33.9	流紋岩	円盤の上下端に打ち欠き。
S243	17-2	石錘	7.00	6.30	1.75	79.0	石英安山岩	円盤の上下端に打ち欠き。
S244	17-5	石錘	8.20	3.65	1.90	83.7	石英閃緑岩	円盤の上下端に打ち欠き。
S245	17-6	石錘	7.90	5.80	1.70	110.8	石英安山岩質凝灰岩	円盤短軸上下端に打ち欠き。
S246	17-6	石錘	5.20	4.95	1.24	46.3	安山岩	円盤上下端と両側面に打ち欠き。
S247	17-6	凹石	12.90	9.25	5.90	909.8	流紋岩質凝灰岩	両面に明瞭な敲打痕。
S248	17-7	叩石	10.05	10.50	6.35	835.9	サヌカイト	礫表面の中央に敲打痕。

図133 13層出土石器4 (縮尺 2/5)

第4節 弥生時代の遺構・遺物

弥生時代の遺構は早期の土坑1基、前期の溝2条・畦畔2面、中期の溝1条、前期～後期の溝10条である。

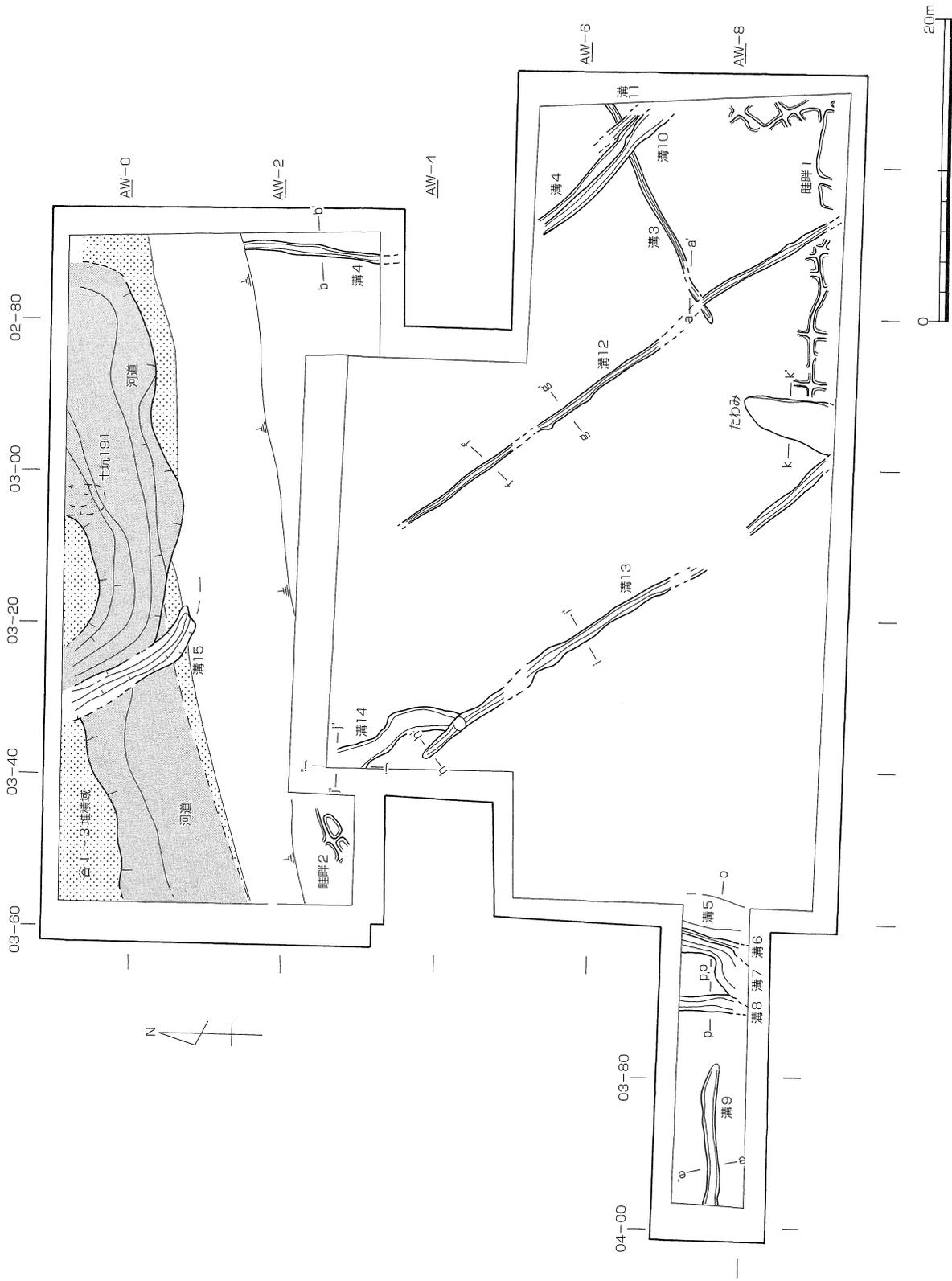


図134 弥生時代遺構全体図 (縮尺1/400)

弥生時代の地形は、前期では縄文時代後期と同様、調査地点の中央、AW-2～6ライン間が最も高く、標高3.2m程の微高地がひろがり、そこから北西方向に下がる谷部へと続く。微高地部と谷部との境は後世の遺構による破壊を受けて分断されている上、両地域では状況が異なっているため、以下、両者を分けて記述する。

微高地部では、弥生時代対応面にあたる標高2.8～3.2mの13層上面で、溝12条・畦畔1面を検出した。13層上には古墳時代層（10層）が堆積し、上面はカットされているが、微高地の北西端はやや傾斜面をなしているため、12層が残っており、12層上面で畦畔1面を検出した。これらの遺構を時期の古いものから整理すると、畦畔は畦畔1、畦畔2の順となり、いずれも前期のものである。溝については断面形状・埋土・所属時期・設置場所によって①断面形が逆台形を呈する溝4、②断面形が皿形～U字形を呈する溝3・5～11、③皿形で小規模な溝12・13、④形状が不定形な溝14、の4群に分類される。溝の位置からもこれらの分類はある程度まとまりをみせており、機能を考える上で参考となろう。溝の機能の特定は困難であるが、①②については水路の可能性が考えられる。一方、③については2条が平行した走行方向を示し、近似した規模・埋土の特徴は他とは異なる。溝群の中では新しい一群である点も区別される。水路とするには小規模である、この溝12・13の2条の溝については、こうした点から畦畔の脇溝であると考え、溝間の距離約13mが水田区画を示す可能性を指摘しておこう。

一方、谷部では土坑1基、溝1条の他に河道を検出した。早期で確認された遺構は土坑1基のみである。弥生～古代の溝等の破壊によって周辺の状況は不明であるが、基盤層及び埋土のいずれも粘性が強いことから、早期にも谷地形を呈していたと考えられる。その谷部は、弥生時代前期～中期に、小規模な河道の出現をはさみつつ、埋没する。その過程をまとめよう。谷地形を埋めていく土層を下層から「谷1層」・「谷2層」・「谷3層」と大別する。「谷1層」と「谷2層」は前期末までに堆積した土層である。谷部の基盤層は最も低いところで標高2.05mであり、「谷1層」上面で標高2.3m、「谷2層」上面で標高2.4mを測る。「谷2層」の堆積後に小規模な河道が流れる時期がある。河道の一部には水路として利用した部分が認められ、その部分に沿った形で溝15が続いて掘削される。河道・溝15とも比較的短期間に埋没し、最終的に「谷3層」が堆積することによって谷地形はほぼ完全に解消される。これが中期後半である。「谷3層」の上面の標高は2.85mである。他の層に比べて、粗砂の割合が大きい砂質である埋土の特徴と、層厚が45cmと厚いことから、短期間に一気に堆積したことが窺える。その結果、後期には微高地部とほぼ揃った平坦化した地形がひろがったものと考えられる。

なお13層について、縄文時代後期遺物を大量に含んで堆積する箇所については、弥生時代前期に「動かされた」土層という認識を既述しているが、谷1層についても、後述する土器構成などから、それに対応する土層と判断され、その形成時期は前期末となる。

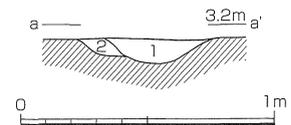
微高地部と谷部との遺構の対応関係は、早期は谷部の土坑のみで不明であるが、前期末には、微高地部で畦畔がつくられている段階に、谷部では河道が流れ、一部水路として利用したことが想定される。こうした状況は中期前半までに埋没する溝15にまで継続している。後期には谷地形は埋没しており、微高地部では溝12・13から想定されるような整然とした畦畔による耕地が営まれていたと考えられる。

(1) 微高地部

a. 溝

溝3 (図134・135)

14層上面、標高3.15mで検出した。幅0.3～0.5m、深さ10cmである。底面のレベルは西端3.05m、東端2.7mである。調査区東壁から南西方向へ向けて浅くなるため、02-80ライン付近以西では検出できない。埋土は黄褐色粘質土で黒褐色粘土ブロックを含む。東端では溝4に切られる。出土遺物はポリ袋1/2袋ほどの小片が認められたが、図化できるものはなかった。埋土の状況から、時期としては弥生時代前期



1. 黄褐色粘質土
(黒褐色粘土ブロック)
2. 暗黄褐色粘質土

図135 溝3 (縮尺 1/30)

と考えている。

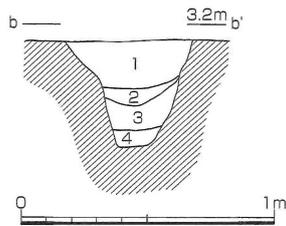
溝4 (図134・136・137)

第17次調査地点内では14層上面で、第22次調査地点内では16層上面で検出した溝である。検出レベルは3.0m～3.15mであり、底面の標高は南端で2.7m、北端で2.55mを測る。全体として南から北へと走行している。幅50～65cm前後で、深さ40cmである。断面の形状は下部(2～4層)は逆台形に近く、1層はU字形に近い。埋土は2～4層は灰褐～暗灰色系の粘質土で、2・4層には黒色土(13層)ブロックを含む。1層は暗褐色土であり、1層と下層土とで平面上でズレが生じている箇所が南半部において確認されることから1度は掘り換えているものと考えられる。

出土遺物は土器の小片がポリ袋2袋ほど出土しているが、図化できるものはなく、遺物から時期決定は困難であった。その他にサヌカイト製石鏃が1点出土した(図137-S249)。素材面を多く残す未成品で、右側縁に片面調整を施す。本溝の時期は埋土に13層を含んでいることから弥生時代前期と考えられる。

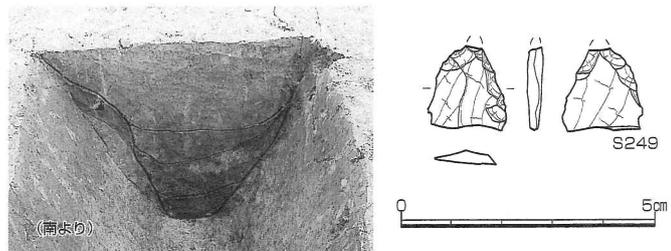
溝5 (図134・138)

13層上面、共同溝部分のAW03-57区で検出した。検出レベルは標高3.05m、底面レベルは2.7mである。わずかに南へ傾斜する。残存幅2.0m、深さ35cmを測る。断面の形状はU字形を呈する。埋土は上層(1～3層)に暗褐色系の粘質土、下層(4～14層)に暗灰褐色～灰黄褐色系の砂質土が堆積する。出土遺物は僅かにポリ袋2



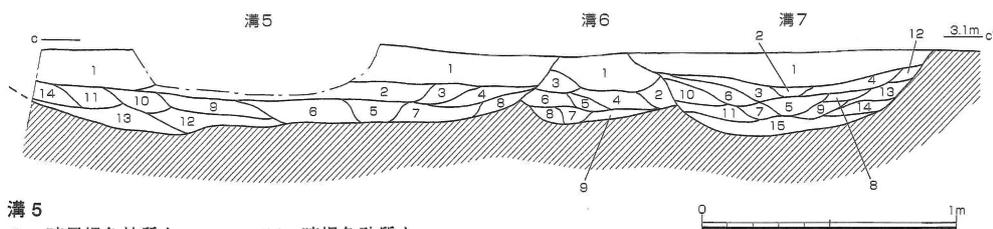
- 1. 暗褐色土
- 2. 暗灰褐色粘質土 (黒褐色土ブロック)
- 3. 灰褐色粘質土 (黄褐色土ブロック)
- 4. 暗灰褐色粘質土 (黒色土ブロック)

図136 溝4 (縮尺1/30)



番号	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石材
S249	石鏃未成品	1.65	1.55	0.29	0.7	サヌカイト
						特徴
						素材面を多く残す。右側縁に片面調整。

図137 溝4出土遺物 (縮尺2/3)



溝5

- 1. 暗黒褐色粘質土
- 2. 暗灰褐色粘質土
- 3. 灰褐色弱粘質土
- 4. 灰黄褐色砂質土
- 5. 暗灰褐色砂質土
- 6. 黄褐色砂質土
- 7. 暗灰黄褐色砂質土
- 8. 暗褐色砂質土
- 9. 暗灰黄褐色弱粘質土
- 10. 暗灰褐色砂質土
- 11. 暗灰褐色砂質土
- 12. 灰黄褐色砂質土
- 13. 暗灰黄褐色砂質土

溝6

- 1. 暗黒褐色弱粘質土
- 2. 暗灰褐色砂質土
- 3. 暗灰褐色砂質土 (黄褐色土ブロック)
- 4. 灰褐色砂質土
- 5. 灰黄褐色砂質土
- 6. 暗灰黄褐色砂質土
- 7. 暗黄褐色砂質土
- 8. 暗灰褐色砂質土
- 9. 暗灰黄褐色砂質土

溝7

- 1. 暗黒褐色弱粘質土
- 2. 暗褐色砂質土
- 3. 暗灰褐色粘質土
- 4. 暗灰褐色粘質土 (炭化物)
- 5. 暗灰黄褐色砂質土
- 6. 灰褐色弱粘質土

- 7. 灰褐色砂質土
- 8. 暗灰褐色砂質土
- 9. 灰褐色砂質土
- 10. 暗灰褐色砂質土
- 11. 暗灰黄褐色砂質土
- 12. 暗褐色砂質土
- 13. 暗黄褐色砂質土
- 14. 灰黄褐色砂質土
- 15. 淡黄褐色砂質土



図138 溝5～7 (縮尺1/30)

袋の土器片が認められたが図化できるものはなかった。本溝の時期は弥生時代前期～後期と考えている。

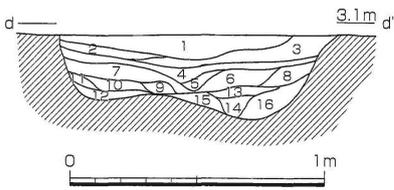
溝 6 (図134・138)

13層上面、AW03-57・67区(共同溝部分)で検出した。検出面のレベルは標高3.05m、底面のレベルは2.8mである。幅0.6m、深さ25cmが残存する。東西両端とも溝5、溝7によって切られているため、本来の規模は不明である。断面の形状はU字形を呈する。埋土は9枚に分けているが、暗褐色～灰褐色系の砂質土が主体で、最上層に暗褐色粘質土が堆積する。出土遺物は僅かに土器片数点が認められたが、図化できるものはなかった。

本溝の時期は遺物からは判断し難く、検出層位を考えあわせて弥生時代前期～後期の範疇で考えている。

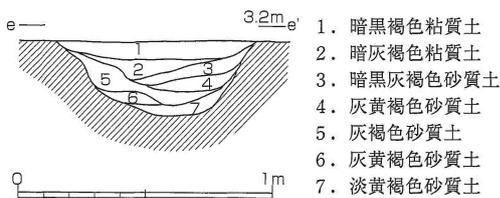
溝 7 (図134・138)

13層上面、AW03-67区(共同溝部分)で検出したが、検出面のレベルは標高3.05m、底面のレベルは2.7mである。わずかに南へ傾斜している。北端では幅0.7m、南端で1.4mと、AW-8ラインあたりから幅がひろがる。深さは35cmを測る。北端では溝6の東側を削平している。断面の形状はU字形を呈している。埋土は15枚に分けられるが主体となるのは灰褐色系の砂質土であり、最上層に黒褐色粘質土が堆積している。出土遺物は20点足らずの土器小片が認められたが、ほとんどは縄文後期のものであり、遺物からは時期決定は困難であるが、検出層位から本溝の時期は弥生時代前期～後期の範疇と考えている。

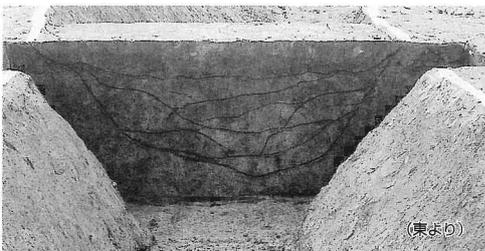


- 1. 暗黒褐色砂質土
- 2. 暗褐色砂質土
- 3. 暗褐色砂質土
- 4. 暗灰褐色砂質土
- 5. 灰黄褐色砂質土
- 6. 灰褐色砂質土
- 7. 明灰褐色砂質土
- 8. 暗灰黄褐色砂質土
- 9. 明黄褐色砂質土
- 10. 淡黄灰褐色砂質土
- 11. 灰黄褐色砂質土
- 12. 淡黄白色砂質土
- 13. 灰黄褐色砂質土
- 14. 暗褐色砂質土
- 15. 黄灰色砂質土
- 16. 黄褐色砂質土

図139 溝 8 (縮尺1/30)



- 1. 暗黒褐色粘質土
- 2. 暗灰褐色粘質土
- 3. 暗黒灰褐色砂質土
- 4. 灰黄褐色砂質土
- 5. 灰褐色砂質土
- 6. 灰黄褐色砂質土
- 7. 淡黄褐色砂質土

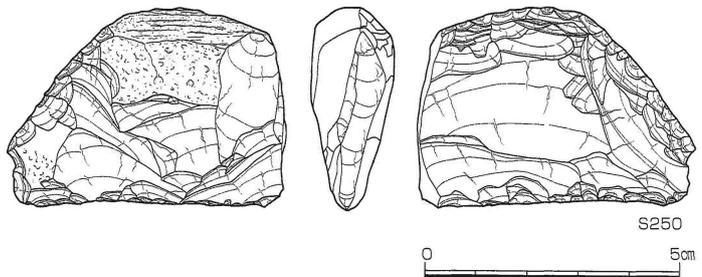


溝 8 (図134・139)

13層上面、AW03-77区(共同溝部分)で検出した。検出面のレベル標高3.05m、底面のレベルは標高2.7mである。わずかに南へ傾斜している。幅1.1m、深さ35cmを測る。断面形状は中央部が若干ふくらむ皿状を呈している。埋土は細かく分けることもできるが、主体となるのは灰黄褐色系の砂質土である。出土遺物は30点ほどの土器片、ポリ袋に1袋が認められたが、ほとんどは縄文後期のものであり、遺物からは時期決定は困難である。本溝の時期としては弥生時代前期～後期の中で考えている。

溝 9 (図134・140 図版27)

13層上面、AW03-87・97区(共同溝部分)で検出した。同時に検出した、前述の溝5～8が南北方向であるのに対し、本溝は東西方向の約4mを確認した。しかし03-80ラインより以東では検出することができず、溝8の西側で収束するものとみられる。検出面のレベルは標高3.05m、底面のレベルは標高2.75mである。幅0.8m、深さ30cmを測る。埋土は7枚に分けられ、主体



番号	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石材	特徴
S250	石核	5.30	7.30	2.20	90.9	サヌカイト	一部自然面を残す。右側に剪断面。

図140 溝 9・出土遺物 (縮尺 1/30・2/3)

となるのは暗灰褐色～灰黄褐色を呈する砂質土である。最上層に暗黒褐色粘質土が堆積する。出土遺物は土器片45点、ポリ袋で2袋分と石器1点が認められたが、土器には図化できるものはなかった。図140-S250はサヌカイト製の石核である。板状の素材から、石鏃などに用いられる薄い小剥片を剥離している。一部に自然面を残し、右側面には剪断面が確認できる。また、下縁と左側縁には、比較的丁寧な両面調整が施されている。剥片剥離後に分割を行い、スクレイパーなどへの転用が図られたのかもしれない。本溝の時期は弥生時代前期～後期の中で考えている。

溝10 (図134・141)

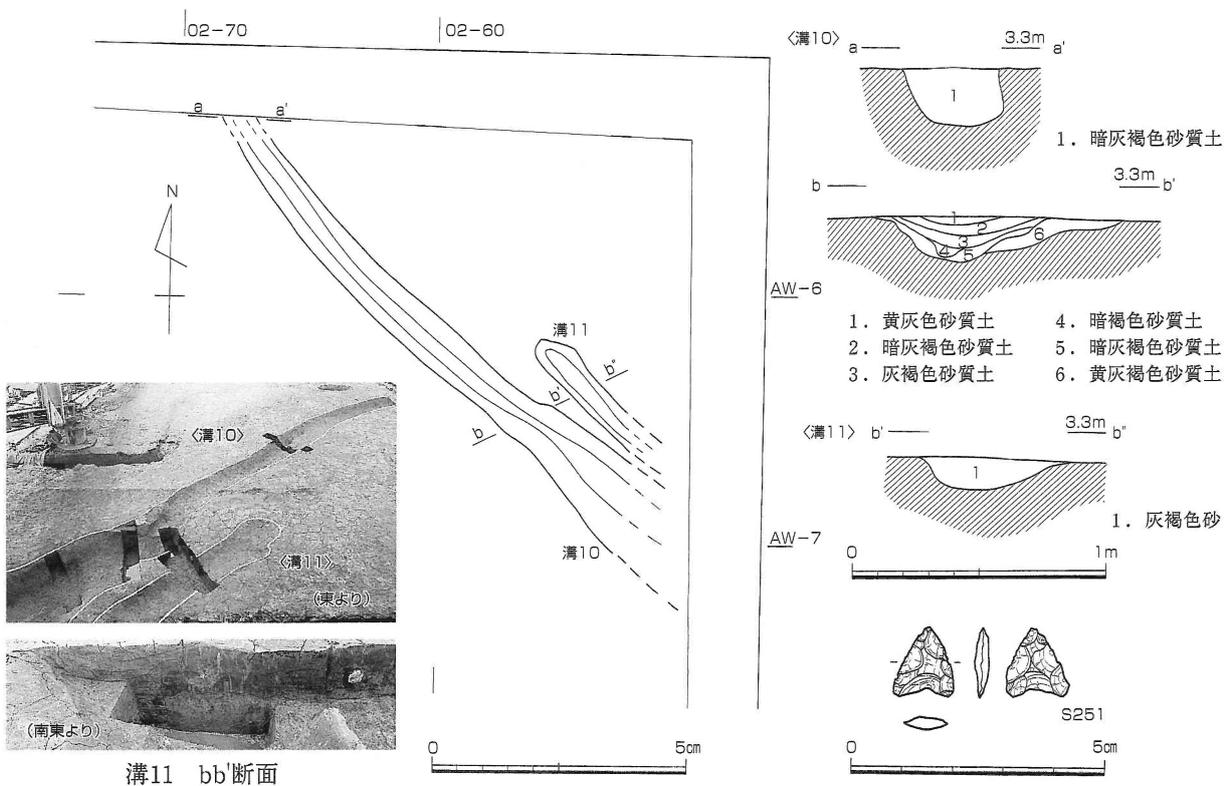
溝10は調査区の南東部を南東～北西へと走行する。検出面の標高3.18～3.20mである。底面の標高は南端で2.97m、北端で2.18mで、深さ17～23cmである。幅は北端で0.4m、南端で1.2mである。この幅の違いはAW-6・7ラインの間において、bb'断面にみられるように上層(1～5層)と下層(6層)の流路がずれていることによる。また本溝は、前期の溝4に一部重複している。埋土は灰褐色～暗褐色系の砂質土を主体としている。

出土遺物は土器片が70点余、ポリ袋で1袋が出土し、図化できるものはなかったが突帯文土器の胴部小片、縄文後期の土器小片が見られる。その他にS251はサヌカイト製で凹基式石鏃である(図141)。挟りは浅く、脚部はやや尖る。側縁に両面から調整を施すが、その単位は比較的粗い。

本溝の時期は弥生時代前期～後期である。

溝11 (図134・141)

13層で検出した。溝10の東側に沿って走行するが、AW-6ライン以南で収束している。検出面のレベルは標高3.18m、底面のレベルは標高3.1mである。幅1.0m、深さ10cm程が残る。また本溝は前期の溝4の東側を切って作られている。埋土は灰褐色砂層である。出土遺物は、土器片20点が認められたが、図化できるものはなかつ



番号	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石材	特徴
S251	石鏃	1.40	1.20	0.25	0.4	サヌカイト	凹基式。挟りは浅く、脚部はやや尖る。

図141 溝10・11・溝10出土遺物 (縮尺1/150・1/30・2/3)

た。縄文後期～弥生時代早期のものが見られるが、本溝の時期は、弥生時代前期～後期と考えている。

溝12 (図134・142)

13層上面で検出した。調査区の中央部を南東から北西へ走行する。検出レベルは標高3.06～3.17mで、幅60cm、深さ10cm程度の浅い溝である。底面のレベルは南端3.06m、北端で3.12mである。調査区の北半、AW-4ライン以北では検出することはできなかった。埋土は灰褐色粘質土である。出土遺物は土器片がわずかに認められたが、図化できるものはなかった。本溝の時期は弥生時代前期～後期の範疇で考えている。

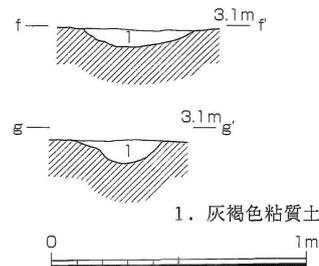


図142 溝12 (縮尺1/30)

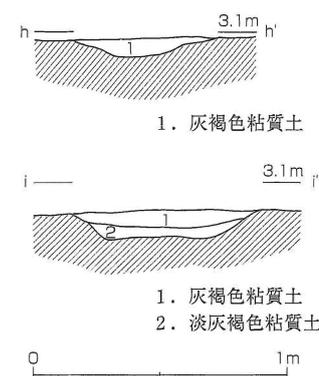
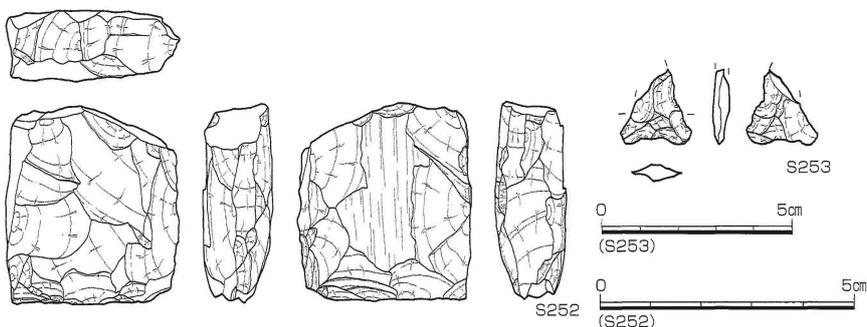


図143 溝13 (縮尺1/30)

溝13 (図134・143・144 図版27)

13層上面で検出した。調査区の西半を南東から北西へ走行する。前述の溝12と平行している。検出レベルは標高3.04～3.08m、底面のレベルは2.96～2.98mである。幅約60cm、深さ10cm程度で、埋土は灰褐～淡灰褐色粘質土である。規模、走行方向、埋土の特徴が溝12と極めて相似している。出土遺物は土器片と石器が見られ、石器2点を掲載した(図144)。S252は石核で上面や両側面を打面として、石鏃などに用いられたであろう薄い小剥片を連続的に剥離している。上面には打面再生のための剥離が確認でき、また左側面に剪断面も確認できる。この剪断の後に、その面を打面として剥離を行っている状況が確認でき、これも打面を再生するための剪断であった可能性が高い。下辺部には階段状のつぶれた剥離がある。S253は凹基式石鏃で、先端部を欠損している。挟りは浅く、脚部端は丸く収束する。ただ、側縁調整の単位が粗く、未成品の可能性もあろう。本溝の所属時期は弥生時代前期～後期の範疇と考えている。



番号	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石材	特徴
S252	石核	5.25	4.65	1.90	63.0	サヌカイト	板状の素材。左側面に剪断面。
S253	石鏃	(1.50)	1.40	0.30	(0.5)	サヌカイト	凹基式。挟りは浅く、脚部は幅広。

図144 溝13出土遺物 (縮尺1/30・2/3・1/2)

溝14 (図134・145)

13層上面で調査区の中央西よりで検出した。南端は溝14に切られ、第17次調査区の北西角へ抜けている。検出面のレベルは標高2.90～2.96m、底面のレベルは標高2.82～2.91mである。僅かに北側が低い。幅は南端で1.2m、最も広いところで1.6mで、深さ18cmである。埋土は北端では2枚に分けられ、上層は暗灰褐色砂質土、下層は暗淡褐色砂質土である。平面の形状がやや歪であり、氾濫した際の流路の痕跡と考えられる。出土遺物は見られ

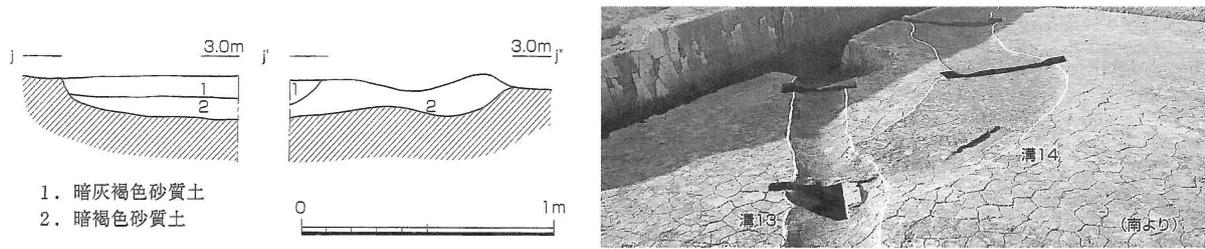


図145 溝14 (縮尺1/30)

なかった。本溝の時期も弥生時代前期～後期の範疇と考えられる。

b. 畦畔

13層上面で1面(畦畔1)、12層上面で1面(畦畔2)を検出した。

畦畔1 (図134・146・147)

13層上面で、調査区の南東部分、AW02-57~59・69・79・89区において、小区画の畦畔を検出した。検出面は標高2.8mであり、全体の地形として南東に向かってわずかに下がっていく部分にあたるため、後世の削平をかうじて免れたものである。畦畔の幅は30~40cm、高さ3~5cmである。13層を削り出してつくられている。調査区南壁に沿うように東西方向の畦畔をおよそ12m程、また調査区の東壁に沿うように南北方向の畦畔を5m検出している。全体として残りが悪く、いびつな形をなす部分があることから不確定なところもある。いずれもごく一部であり、一筆の区画全形がわかるところはない。一辺1~2.5mの小区画であることは伺える。この畦畔に伴う出土遺物としてごくわずかに土器の小片が認められ、その中には突帯文土器の深鉢片が含まれている(図146)。畦畔1の状況は津島岡大遺跡では広範囲に確認されている黒色土上面に形成された畦畔と同様である。このことから本畦畔の所属時期は弥生時代前期と考えられる。

畦畔2 (図134・148)

調査区の北西部AW03-42・43・52・53区で一部を検出した。12層は13層を覆う黄灰色砂質土層であり、調査区の中央付近、AW-4ライン付近からAW-1ライン間でのみ堆積が認められる土層である。



番号	器種	形態・手法ほか	色調(外/内)	胎土
1	深鉢	(外) ローリング顕著、貼り付け突帯上にヘラ状工具による刺突、(内) ローリング顕著	淡茶褐	細砂。粗砂混じる
2	深鉢	(外) ナデ、貼り付け突帯上にD字形刻み、(内) ローリング顕著	褐灰	細砂~粗砂
3	深鉢	(外) ナデ、貼り付け突帯上にD字形刻み、(内) ローリング顕著	黄灰褐/褐	細砂~粗砂

図146 13層出土土器 (縮尺1/3)

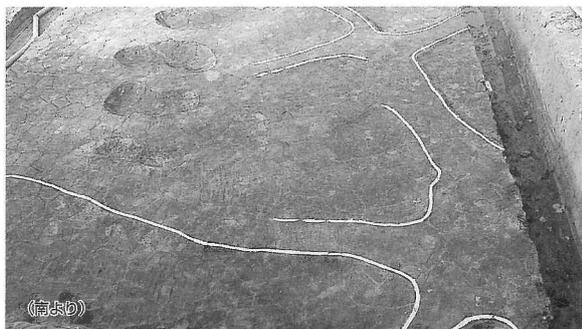


図147 畦畔1

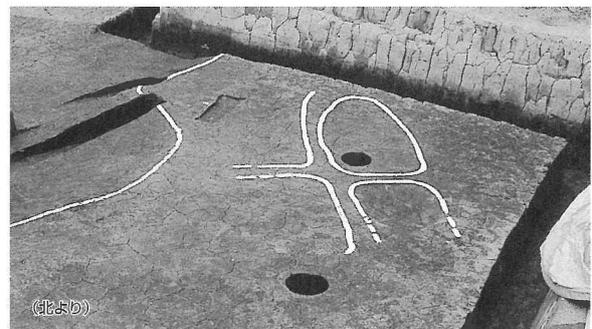


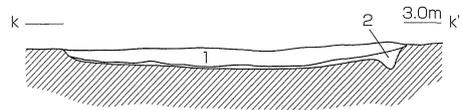
図148 畦畔2

畦畔2は全体として残りが悪く、1m×1.5mで構成される一筆分の区画をかりうじて確認することができ、ここで検出した畦畔も小区画であることが伺える。畦畔の幅は30cm程、高さは5cmで、黄灰褐色砂に覆われていた。この畦畔に伴う出土遺物はない。層位関係と、畦畔の形状・方向が前述の畦畔1に近似することから、本畦畔の所属時期についても前期と考えている。

c. たわみ

たわみ1 (図134・149)

調査区の南端、AW08-98・AW09-99区で検出した。13層上面での検出である。東西1.8m×南北3.0m、深さ15cm程の浅いたわみであり、埋土は灰白色の砂質土層である。出土遺物は認められなかった。断面形は浅い皿状であり、人為的な成因よりは、自然に生じたものと考えられる。



1. 灰白色砂質土
2. 暗灰色砂質土

図149 たわみ1 (縮尺1/30)

(2) 谷部

a. 土坑

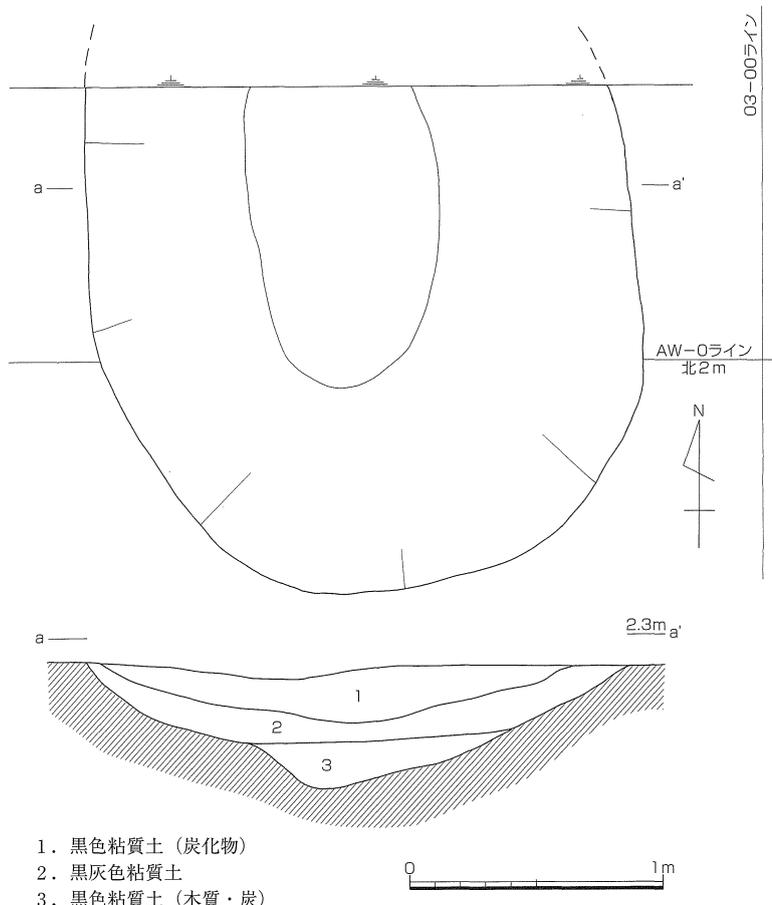
土坑191 (図150・151)

調査区の北端、AV03-09区で検出した。検出レベルは標高2.2mである。16層上面で検出されたものであるが、本土坑の上面は河道によって削平を受けており、本来の掘削面は高いものと考えられる。深さは0.45m、底面の標高は1.77mである。

北半は調査区外に延びるため不明であるが、全体の約2/3程が残存しており、平面形は長楕円形になるものと思われる。残存長は、東西2.15m、南北2.05mである。埋土は基本的には黒色を呈する粘質土であるが、炭化物や木質分の多寡により、3枚に分層される。いずれも湿地性を示す土質である。

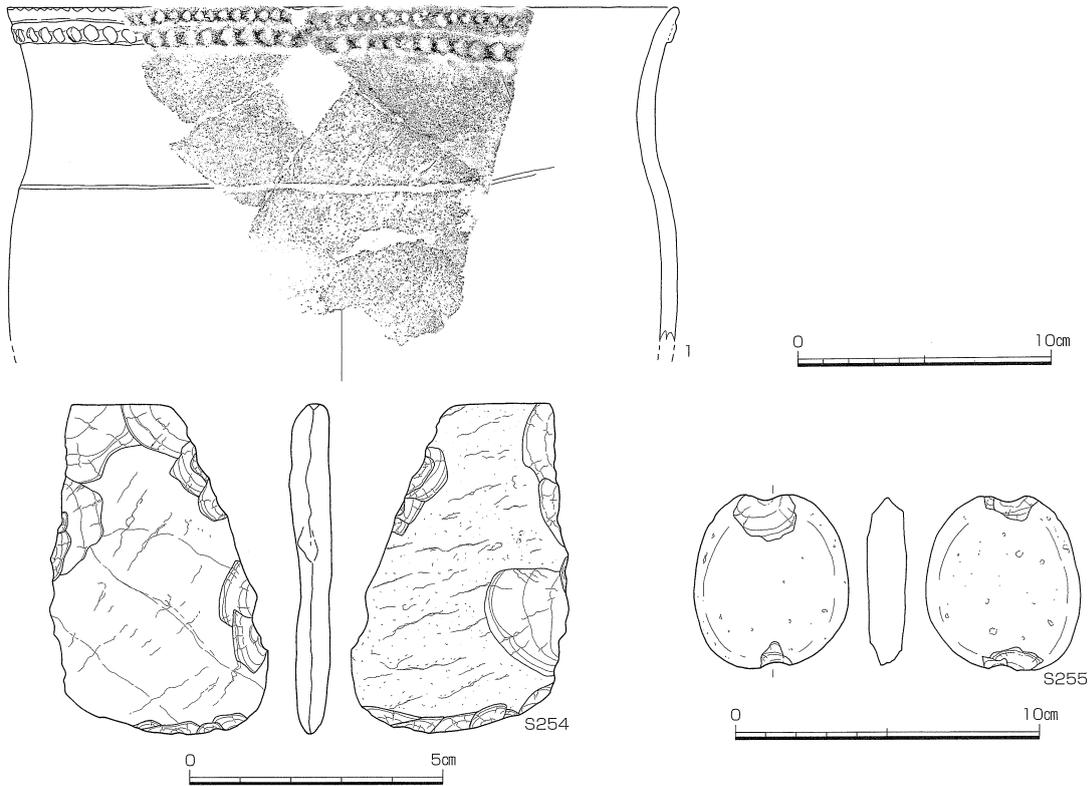
遺物の内容から、本遺構の時期は弥生時代早期と考えられる。

出土遺物には土器片20点・石器2点が認められ、そのうち土器1点・石器2点を掲載した(図151)。土器(1)は刻み目突帯文を有する深鉢である。石鍬(S254)は細粒砂岩製で、扁平で薄い素材の周縁を調整し整形するが、調整の単位は粗い。下縁に浅い角度で両面調整を施し、弧状の刃部をつくり出す。石錘(S255)は石英安山岩の円礫の上下端を打ち欠き利用している。



1. 黒色粘質土 (炭化物)
2. 黒灰色粘質土
3. 黒色粘質土 (木質・炭)

図150 土坑191 (縮尺1/30)



番号	器種	形態・手法の特徴				色調(外/内)	胎土
1	深鉢	(外) ナデ、胴部に横位沈線1条、貼付突帯上にD形刺突、口唇に刺突 (内) ナデ+工具ナデ、復元口径26.4cm				黒褐/暗茶褐	細~微砂
番号	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石材	特徴
S254	石鎌	6.6	4.3	0.82	24.4	細粒砂岩	断面が薄い。素材周縁に両面調整。
S255	石錘	5.8	5.1	1.31	63.1	石英安山岩	扁平な縁の上下端に打ち欠き。

図151 土坑191出土遺物 (縮尺1/3・2/3・2/5)

b. 河道と溝

河道 (図134・152~157)

第22次調査地点の北半、AW-1ライン以北で検出した。検出レベルは標高2.7m、底面のレベルは東半で標高2.0m前後、西半で標高2.2m前後を測る。幅約4m、深さ0.45mが残存するが、bb'断面の状況からは、幅5m、深さ0.8mと復元される。埋土は灰白~暗灰白色を呈する粘質土である。

03-30ライン付近で北に向かって深みが伸びる部分がある。その部分は、北壁で幅約5m、深さ0.5m、底面のレベルは標高2.0mである。この北流する箇所については、河道底面の幅が3.2mから0.9mにまで狭まっており、自然流路に手を加え、水路状とした可能性を考えている。この後に述べる溝15の形状と走行方向が、この北流箇所と近似する点もその理由として挙げられる。

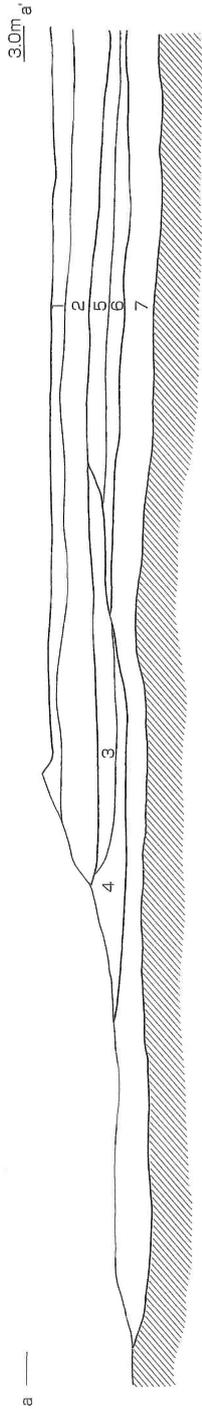
河道からの出土遺物はコンテナ(約28リットル)4箱、点数では土器片3,539点、石器35点と豊富であった。出土遺物には縄文時代後期~弥生時代中期前半のものが含まれる。図153-12・14~16・25は前期の土器である。14・15・21は前期前半、20は前期末に位置づけられる。17の壺は中期前半に位置づけられる。その他に縄文時代後期前葉の土器(1~5)・中葉に位置づけられるもの(6~8)、突帯文土器(10・11)がある。

河道の埋没時期としては、弥生時代中期前半と考えられる。

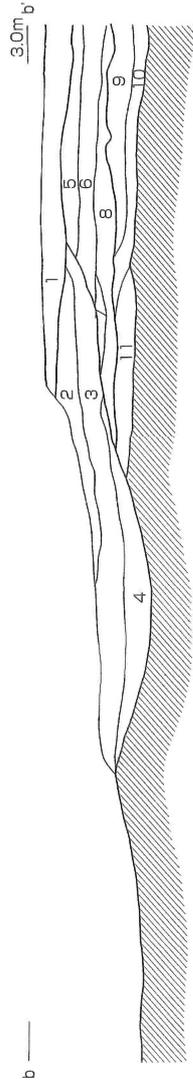
石器は石鎌・石錘・石鎌・石錘など35点が出土した(図154~157 図版22・24・25)。

石鎌は5点出土した(S256~260)。いずれもサヌカイト製で、凹基式4点、平基1点である。凹基式は、長

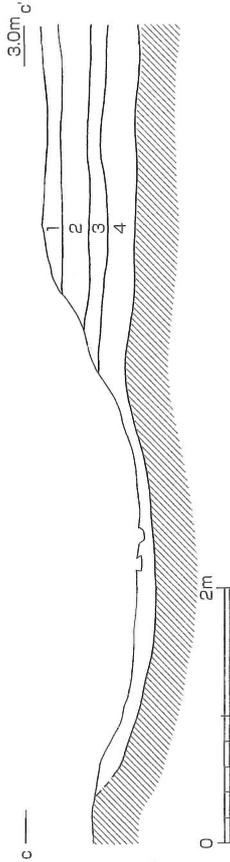
- aa'断面
1. 暗黄褐色砂 (谷3)
 2. 淡黄褐色砂 (谷3)
 3. 淡灰白色粘質土 (河道)
 4. 暗灰白色粘質土 (河道)
 5. 暗緑褐色砂 (谷2)
 6. 暗黄灰色粘質土 (谷2)
 7. 暗黒灰色粘質土 (谷1)



- bb'断面
1. 暗黄褐色砂 (谷3)
 2. 淡緑灰色粘質土 (河道)
 3. 淡灰白色粘質土 (河道)
 4. 暗灰白色粘質土 (河道)
 5. 淡緑褐色砂 (谷2)
 6. 暗緑褐色砂 (谷2)
 7. 暗黄灰色粘質土 (谷2)
 8. 淡黄灰色粘質土 (谷2)
 9. 暗黒灰色粘質土 (谷1)
 10. 淡黒灰色粘質土 (谷1)
 11. 暗黄灰色粘質土 (谷1)



- cc'断面
1. 暗黄灰色粘質土 (谷3)
 2. 暗灰色粘質土 (谷2)
 3. 淡灰色粘質土 (谷2)
 4. 黒褐色粘質土 (谷1)



河道

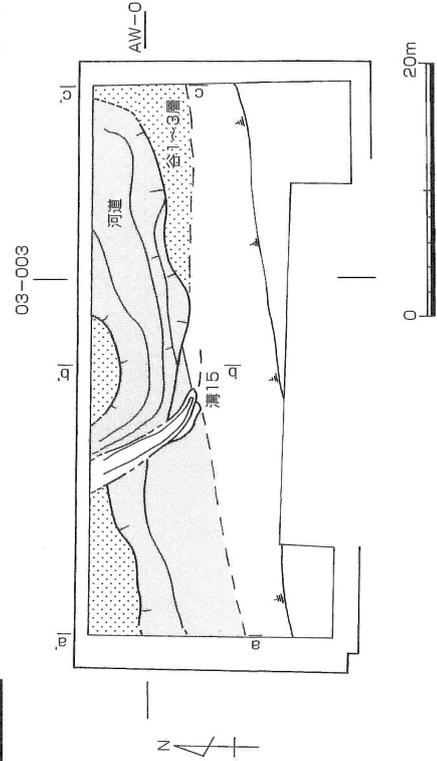
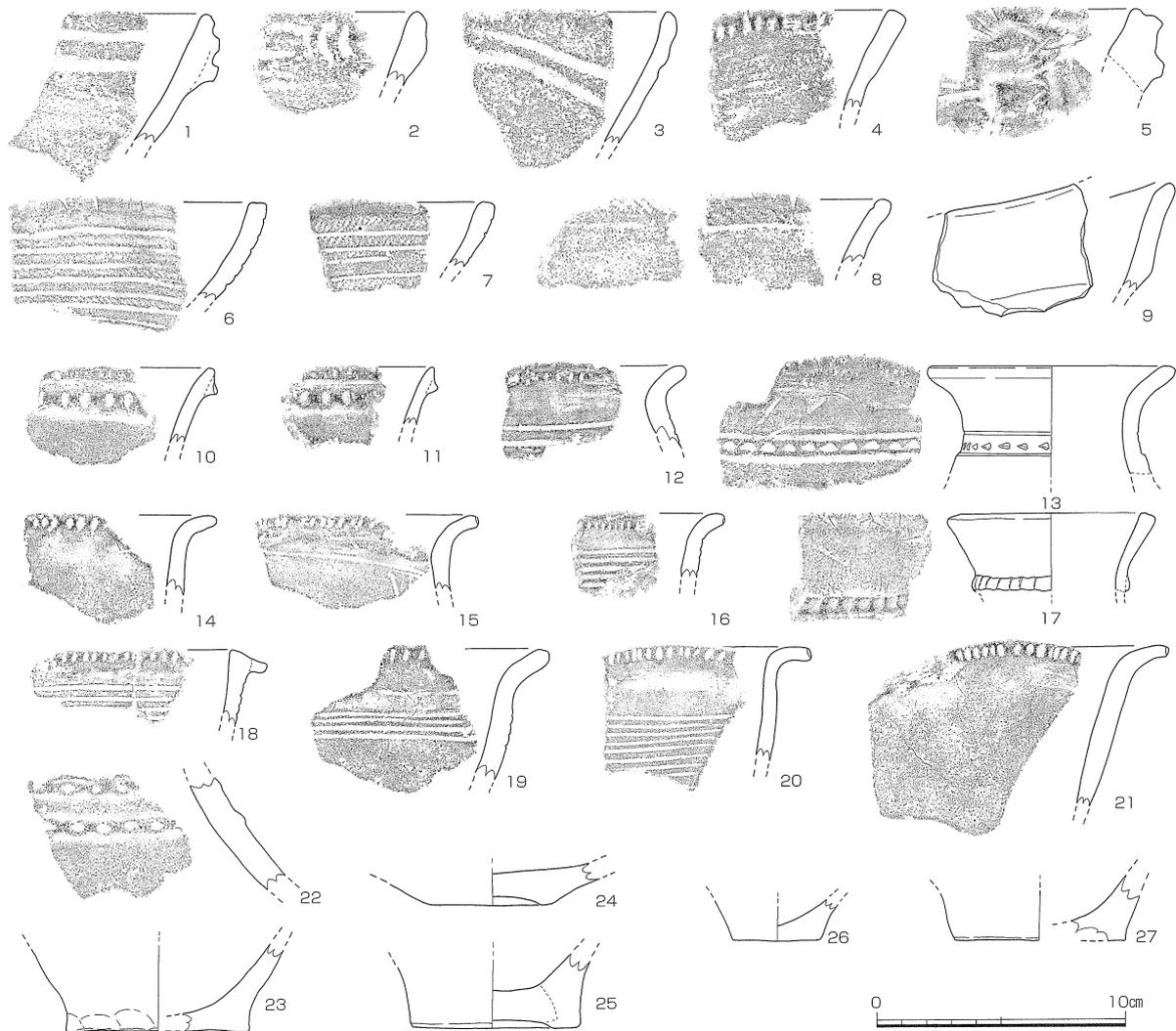
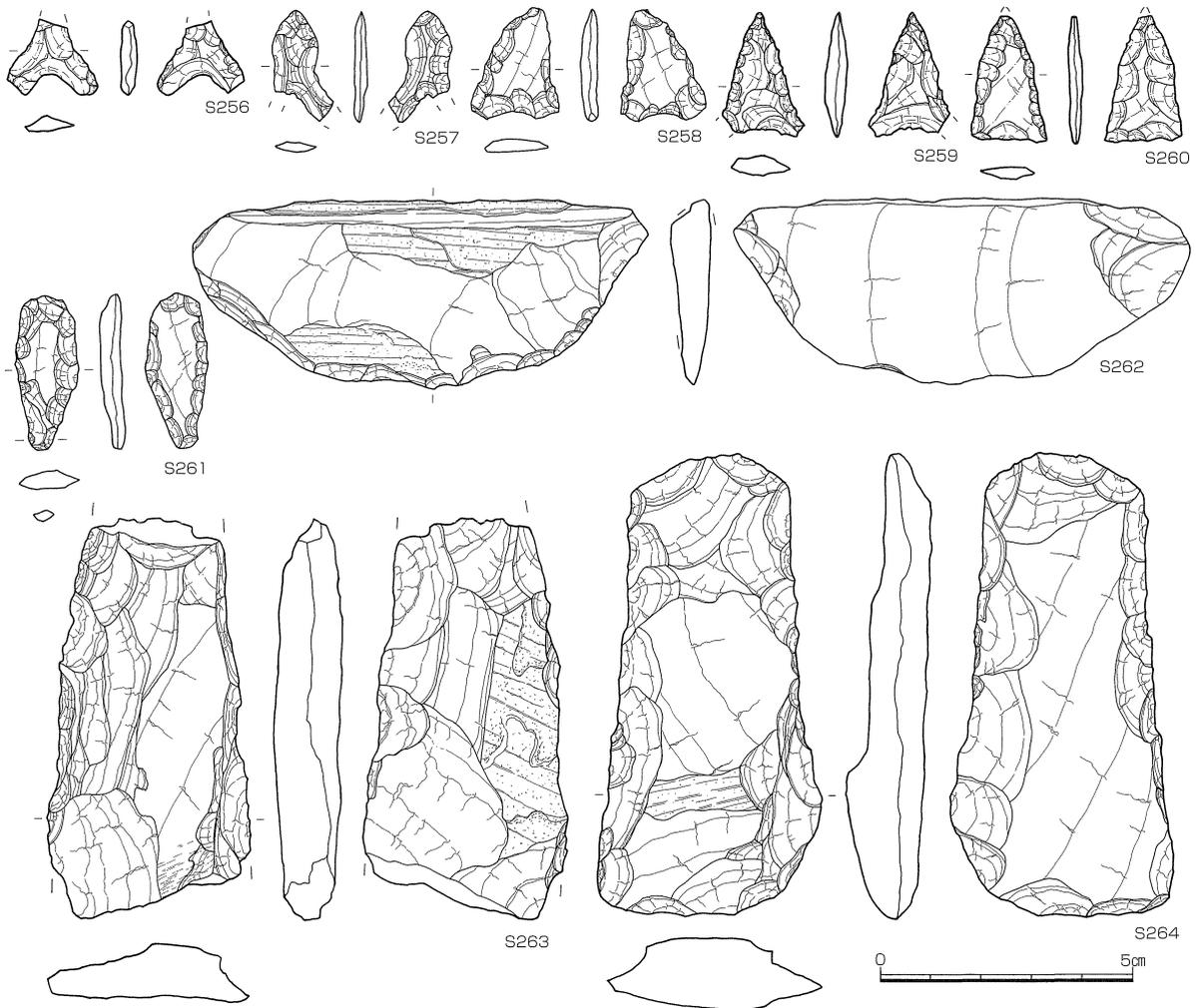


図152 河道・谷1~3 (縮尺 1/60・1/600)



番号	器種	形態・手法ほか	色調 (外/内)	胎土
1	深鉢	(外) ナデ、口縁部縄文、横位凹線2条 (内) ナデ	淡黄褐	細砂
2	深鉢	(外) ナデ、口縁部に凹線文、(内) ナデ	暗褐/淡褐白	微~細砂
3	深鉢	(外) ナデ+凹線文、(内) 丁寧なナデ	淡黄褐/淡灰褐	細砂
4	深鉢	(外) (内) ナデ、口唇部に刺突文	灰褐	粗砂
5	深鉢	把手、(外) ナデ+沈線文 (内) ナデ	淡灰/暗灰	微~細砂
6	浅鉢	(外) 縄文 (RL) +横位沈線文 (内) 磨きに近いナデ	淡褐/暗褐	細砂
7	浅鉢	(外) 縄文+横位沈線文 (内) ナデ、6と同一個体か	淡茶褐	細砂
8	浅鉢	(外) ナデ、(内) 口縁に縄文 (RL)、ナデ+横位沈線1条	淡褐/灰褐	微~細砂
9	鉢	(外) ナデ (内) 横ナデ	暗褐	微砂
10	深鉢	(外) ナデ、貼付突帯断面△+◇形刺突、(内) ナデ、口唇に刻み	淡橙褐/淡褐	微~細砂
11	深鉢	(外) (内) ナデ、貼付突帯、断面△、刺突D形、口唇に刻み	淡褐	微砂
12	甕	(外) ナデ、横位沈線、口縁に刺突 (内) ナデ	淡橙	細砂
13	壺	(外) ナデ、頸部に横位沈線2条、その間に刺突文 (内) ナデ	淡灰褐~暗灰	微砂
14	甕	(外) ナデ、口縁に刺突 (内) ナデ	淡橙	細砂
15	甕	(外) ナデ、横位の沈線1条、口唇に刻目 (内) 押圧+ナデ	淡黄褐	細砂
16	甕	(外) ナデ+横位沈線文、口唇に刺突 (内) ナデ	淡褐~暗褐	細砂
17	壺	(外) 横ナデ、頸部に貼付突帯。突帯上に刺突文 (内) 横ナデ	暗茶褐/暗灰褐	微砂
18	甕	(外) ナデ、押圧+横位沈線文、口唇に刺突 (内) ナデ	黒褐/淡橙	細砂
19	甕	(外) ナデ、横位沈線4条、口縁に刺突 (内) ナデ	淡白褐	微~細砂
20	甕	(外) ナデ+横位沈線文、口唇に刺突 (内) ナデ	淡橙/一部橙	微砂
21	甕	(外) ナデ、口唇に刻目、(内) 押圧+ナデ	淡橙~淡灰褐	細砂
22	壺	(外) 横ナデ、頸部付近に二条突帯。突帯上に刺突文、(内) 横ナデ	黄褐	微砂
23	甕	(外) (内) 押圧+ナデ、1/3残、復元底径7.4cm	茶褐~橙褐/褐白	微砂
24	鉢	(外) (内) 押圧+ナデ、7/8残、復元底径4.4cm	暗褐/暗褐~黒	細~粗砂
25	甕	(外) (内) 押圧+ナデ、内面煤付着、1/2残、復元底径6.6cm	橙~暗橙/黒褐	粗砂
26	甕?	(外) (内) 丁寧なナデ、3/5残、復元底径3.6cm	橙褐/暗灰褐	微砂
27	甕	(外) (内) 押圧+ナデ、1/4残、復元底径7.0cm	暗灰褐/淡橙	細砂

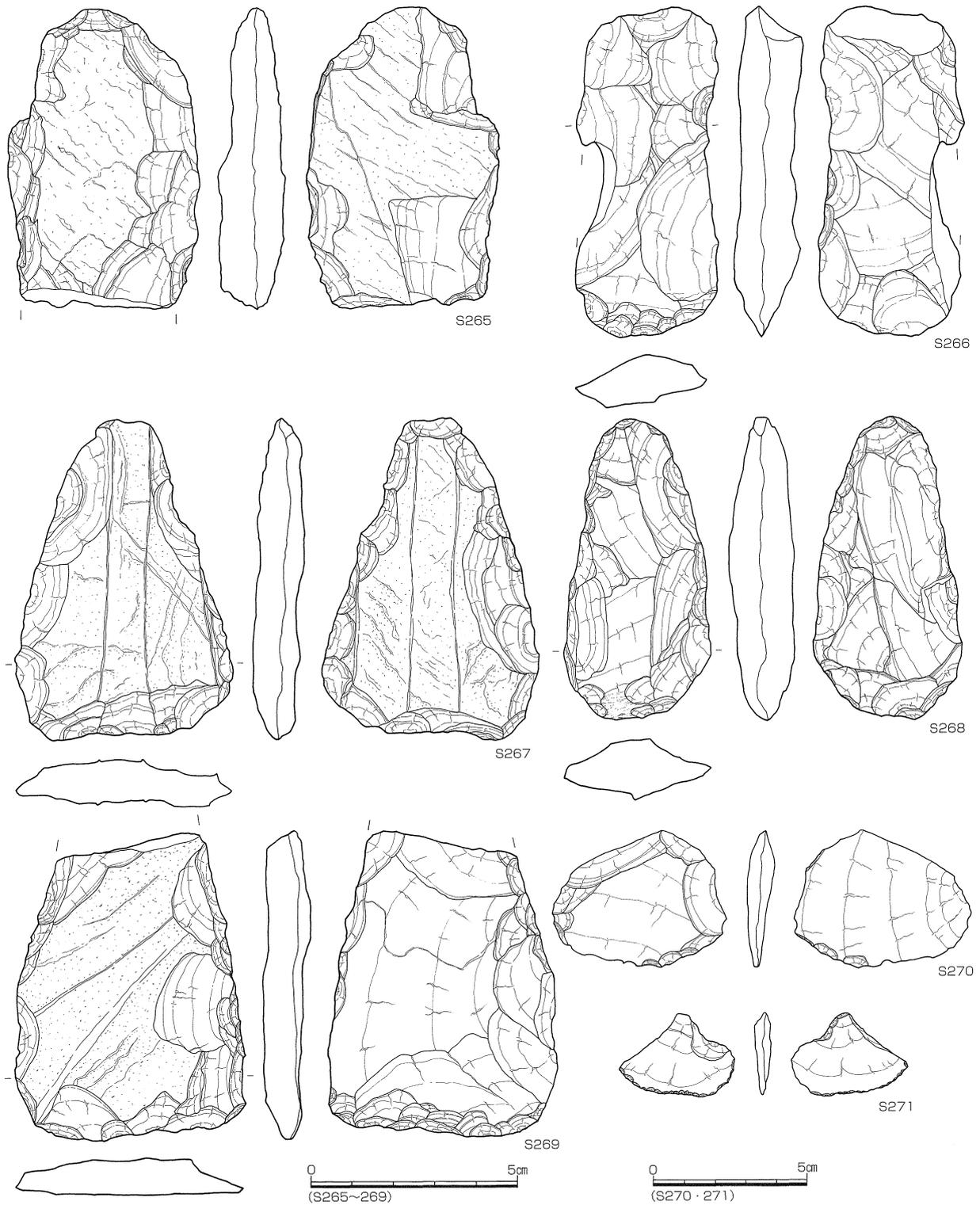
図153 河道出土土器 (縮尺1/3)



番号	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石材	特徴
S256	石鎌	(1.55)	(1.80)	0.30	(0.6)	サヌカイト	凹基式。挟りは明瞭。脚部は幅広。
S257	石鎌	(2.20)	(1.20)	0.25	(0.4)	サヌカイト	凹基式。挟りは明瞭。脚部欠損。
S258	石鎌	2.20	1.70	0.25	1.4	サヌカイト	凹基式。素材面を大きく残す。未成品か？
S259	石鎌	2.50	(1.65)	0.40	1.1	サヌカイト	凹基式。脚部を欠損。
S260	石鎌	(2.55)	1.55	0.25	0.9	サヌカイト	平基式。長幅比は大きい。
S261	石錐	3.10	1.25	0.45	1.9	サヌカイト	横長小剥片の周縁に両面調整。
S262	スクレイパー	3.75	8.90	0.80	86.4	細粒砂岩	扁平素材の下辺部に片面調整。
S263	石鋏	(8.00)	4.00	1.65	(50.8)	粘板岩	刃部欠損。両側縁に粗い調整。
S264	石鋏	9.25	4.45	1.55	61.4	細粒砂岩	扁平素材の周縁に両面調整。

図154 河道出土石器1 (縮尺2/3)

幅比や脚部形態などに差異がある。S256は挟りが明瞭で脚部は幅広である。先端部から脚部へ向かう側縁が中央付近で屈曲する。S259は細長で側縁が直線状にのびる。S258は素材面を大きく残しており、未成品かもしれない。S260は大型の平基式で先端部付近の側縁がわずかに屈曲し、平面が五角形状になる。石錐は1点出土した。S261はサヌカイト製で、横長小剥片を素材とし、周縁に細かい両面調整を施す。下半部にははやや広めの調整を重ね、素材の幅を減じて錐部分をつくり出している。握り部分は扁平である。スクレイパー (S262) は砂粒砂岩製で扁平な素材の下縁に浅い角度で片面調整を加え、鋭利な刃部をつくり出し、石包丁状に仕上げている。ただ下縁の調整は、それほど密とはいえず、また上縁には素材面がそのまま残ることから、素材自体が石包丁状の形状であったようである。石鋏は7点出土した (S263~269)。細粒砂岩製と粘板岩製のものがある。いずれも遺跡付近で採取可能な石材である。両側縁がバチ状に大きく開き基部先端が尖るもの (S267、268) とそ



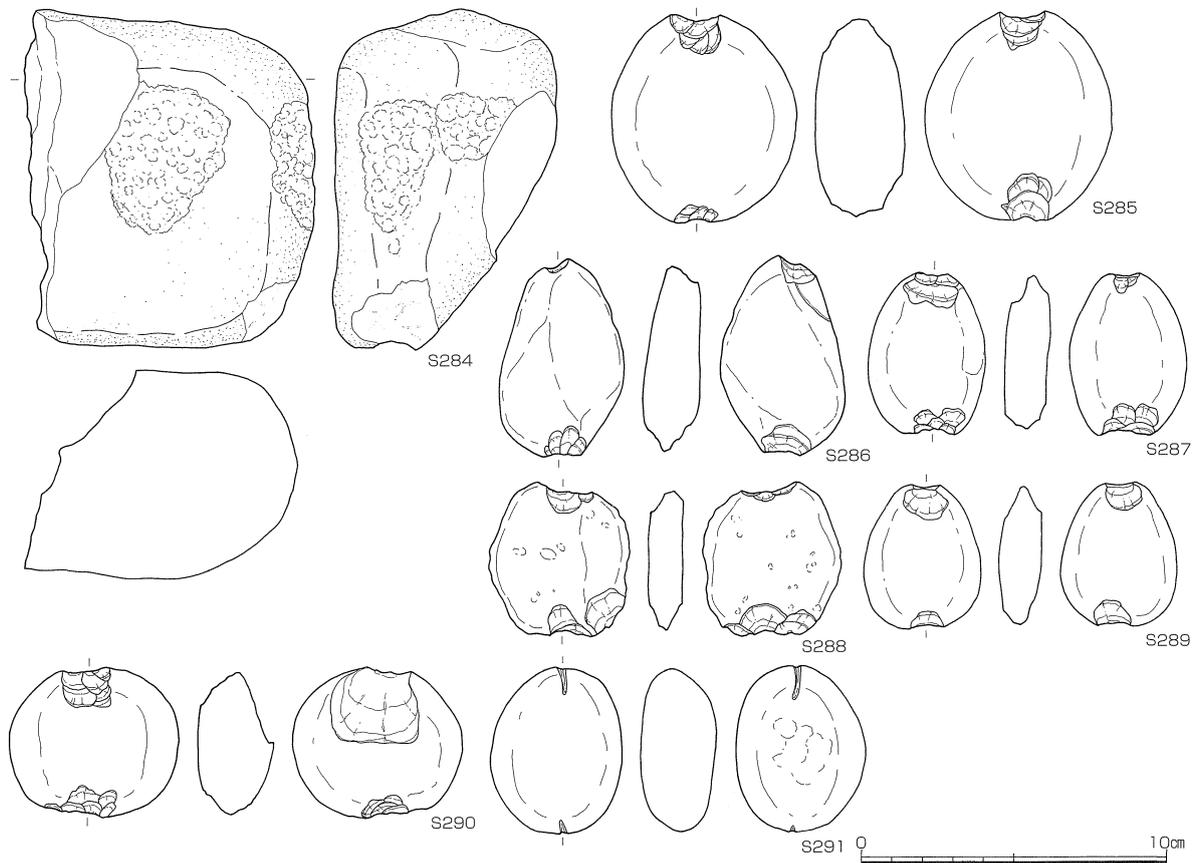
番号	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石材	特徴
S265	石鋏	(7.40)	4.60	1.80	62.7	細粒砂岩	刃部欠損。周縁に粗い調整。
S266	石鋏	(8.10)	(3.90)	1.65	(49.7)	細粒砂岩	粗い調整。未成品か？
S267	石鋏	8.90	5.25	1.15	56.0	細粒砂岩	側縁に抉りを意図した剥離。直刃。
S268	石鋏	7.40	3.55	1.60	41.3	粘板岩	小型品。刃部付近に摩擦部分と擦痕。
S269	石鋏	7.55	5.60	1.00	60.0	粘板岩	基部欠損。直線状の刃部。
S270	加工剥片	4.50	5.60	0.80	16.6	サヌカイト	下辺部の一部に両面調整。
S271	微細剥片	2.75	3.70	0.55	3.7	サヌカイト	下辺部に微細な剥離痕。

図155 河道出土石器2 (縮尺2/3・1/2)



番号	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石材	特徴
S272	楔形石器	6.60	3.60	0.90	20.2	サヌカイト	石核状。上下端に階段状のつぶれた剥離。
S273	楔形石器	3.60	2.50	1.10	9.8	サヌカイト	下端に階段状のつぶれた剥離。
S274	楔形石器	4.30	1.90	0.95	7.7	サヌカイト	上下端に階段状のつぶれた剥離。
S275	楔形石器	4.20	2.50	1.20	10.5	サヌカイト	一部に自然面。
S276	楔形石器	2.40	4.75	0.70	8.5	サヌカイト	上下端に相対する剥離。
S277	楔形石器	2.85	2.80	0.50	5.0	サヌカイト	右側面に剪断面。上下端に階段状剥離。
S278	石核	5.00	4.70	1.00	33.1	サヌカイト	上下端に両面調整。両側面に折断面。
S279	石核	3.05	4.6	0.75	8.6	サヌカイト	打面転位しつつ、小剥片を剥離。
S280	磨製石斧	(5.30)	(6.70)	(4.10)	(193.5)	安山岩	刃部のみ残存。使用による刃潰れ部位。
S281	叩石	10.30	8.00	7.10	767.5	石英安山岩	円礫の3面に敲打痕。
S282	叩石	(6.80)	10.35	3.30	(347.7)	花崗閃緑岩	下端、側縁に明瞭な敲打痕。
S283	敲石	(6.40)	10.9	(4.40)	(402.3)	流紋岩質凝灰岩	下端、側縁に明瞭な敲打痕。

図156 河道出土石器3 (縮尺1/2・2/3・2/5)



番号	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石材	特徴
S284	凹石	11.30	(9.50)	7.30	1028.2	石英安山岩質凝灰岩	片面中央に敲打、線条痕。
S285	石錘	6.90	6.20	2.90	168.6	流紋岩	円礫の上下端に打ち欠き。
S286	石錘	6.60	4.05	1.95	63.2	泥岩	円礫の上下端に打ち欠き。
S287	石錘	5.35	3.85	1.30	38.3	流紋岩	扁平な円礫の上下端に打ち欠き。
S288	石錘	5.15	4.60	1.55	37.0	流紋岩質凝灰岩	扁平な礫の上下端に打ち欠き。
S289	石錘	4.80	3.80	1.30	36.7	石英安山岩	小型品。扁平な礫の上下端に打ち欠き。
S290	石錘	4.90	5.50	2.55	89.7	流紋岩	円礫の短軸両端に大きく打ち欠き。
S291	石錘	5.55	4.30	2.40	70.3	流紋岩	円礫の上下端に打ち欠き。

図157 河道出土石器4 (縮尺2/5)

れほど開かないもの (S263~266・S269) がある。多くは扁平な素材の周縁に調整を施して整形し、下縁部に両面調整によって弧状もしくは直線状の刃部をつくり出す。ただ、個体ごとに調整には粗密がある。また、基部側と刃部側で折断されたものが多く、使用時に欠損した可能性が高い。S264は両側縁があまり開かない平面形で、素材面を残すが、比較的丁寧な両面調整を周縁に施す。刃部は緩やかな弧状で厚く、全体の重心が刃部側に寄る。S268は小型の完形品で周縁からの比較的広い剥離によって、全体的な形状を整えた後に、周縁に細かい調整を施す。横断面は比較的整った凸レンズ状である。刃部は厚みのある弧状のもので、基部から刃部にかけて徐々に厚みを増す。刃部付近には両面に使用による摩滅部分と擦痕が残る。

加工痕のある剥片 (S270) は剥片の下縁部の一部に両面調整が認められる。微細な剥離痕のある剥片 (S271) は扇形の剥片の下縁部全体に微細な剥離痕がある。非常に微細であり、使用痕の可能性が高い。右側縁には調整が認められる。楔形石器は6点出土した (S272~277)。すべてサヌカイト製である。上下端に階段状のつぶれた剥離を持つものを含めた。S272は石核状の大型品で、上端と下端に狭い範囲ながら階段状の剥離が認められる。S277は明瞭な剪断面を持つものである。石核は2点出土した (S278・279)。S278は板状のもので、小剥片を剥離した後に、上下縁を粗く両面調整している。また両側面に折断面がある。S279は、周縁から無作為

的に小片を剥離したもので、石鏃などに利用する剥片を剥離したと考えられる。

磨製石斧（S280）は安山岩製で、乳棒状石斧の刃部のみ残存する。丁寧な研磨によって、表面は平滑であるが、わずかに敲打痕も残る。刃部は弧状の両刃で、刃の縁辺に沿った部分は両面ともにU字形に特に入念に研磨され、刃が研ぎだされている。使用による刃潰れ部分も下端に確認できる。使用時に欠損したものであろう。

叩石は3点出土した（S281～283）。S281は礫の3面中央に敲打痕が残る。S282は花崗閃緑岩の扁平な礫を折断して利用しており、下端、側縁に敲打痕が残る。凹石（S284）は礫の表面に敲打、線条痕が残る。石錘は7点出土した（S285～291）。円礫の両端を打ち欠くものと摺り切りによって溝をもうけるものがある。

溝15（図158・159）

調査区の北端AW93-20・30、AW03-10～30、AW13-20・30にかけて検出した。本溝は弥生時代中期前半の河道の脇にちょうど沿った形であり、河道の流路を意識して掘削されたものと考えられる。検出時の標高は2.2～2.56m、底面のレベルは標高1.68～2.36mである。

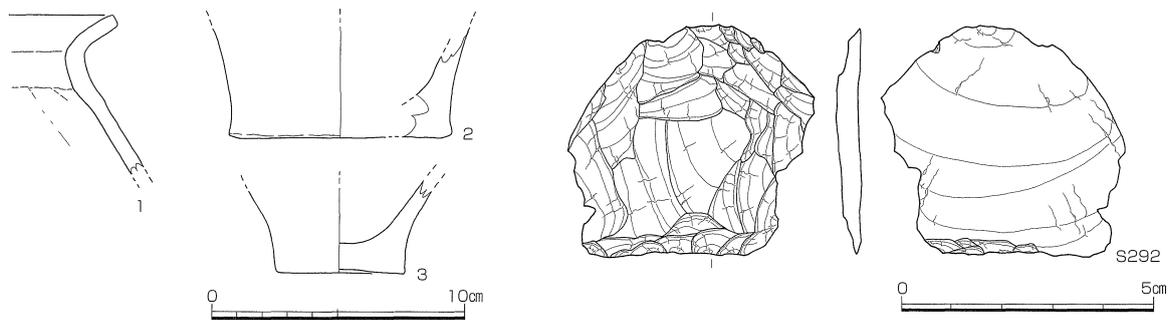
AW-1ラインから北壁に向かってわずかに深くなっており、北西方向へ向けて走行したものと考えられる。AW-1ライン付近で東へ屈曲して、検出部分の最東端では底面のレベルは標高2.36mで、最深部よりも約40cm程浅く、東端において急に浅くなる。検出できたのは03-20ライン付近までで、以東については削平されている。

aa'断面とbb'断面とは断面形態や埋土の状況が大きく異なる。bb'断面では、6・7層がaa'断面に対応するもので断面の形状もaa'断面に似た緩やかな傾斜である。それに対して、これを切って、断面四角形状に4・5層が堆積していることから、AW-0ライン以南の部分は掘り直しを行っているものと考えられる。cc'断面はbb'断面との共通性を強く示している。

溝15はaa'断面にみられるような傾斜の緩やかな皿状である中で、一部をbb'断面にみられるしっかりとした形状の溝へと改修したものである。また前述した河道の水路部分に沿っていることから、当初自然河道の一部を利用した水路であったものを、若干位置をずらして溝として整備し、管理したものと考えられる。

遺物は土器片120片余・石器が出土した。図158-1・2・3は器形・胎土の特徴から中期前半のものとして判断した。石器はサヌカイト製スクレイパーが1点出土した（図158-S292）。寸胴な剥片下辺に両面から浅い角度で調整を行い、鋭い刃部をつくり出している。

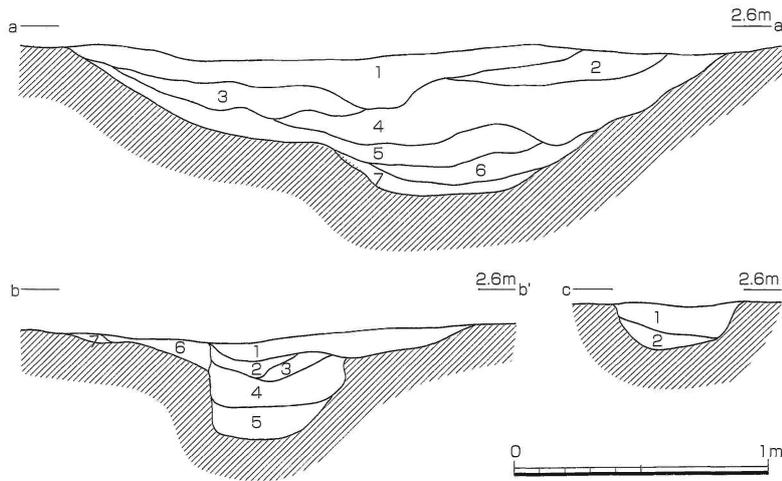
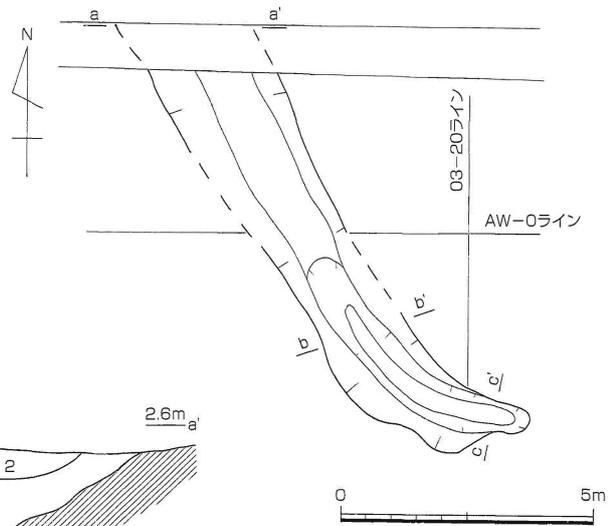
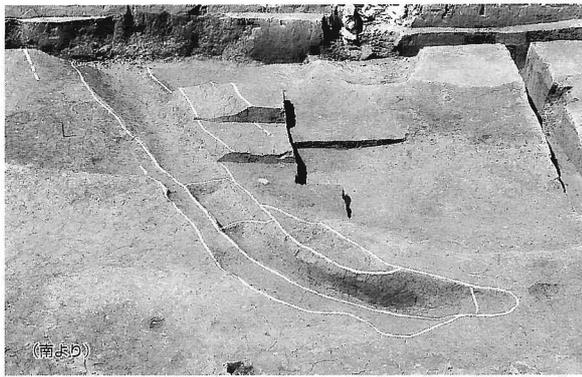
出土遺物から本遺構の時期は弥生時代中期前半に埋没したものと考えている。



番号	器種	形態・手法ほか	色調（外/内）	胎土
1	甕	（外）ナデ+縦ハケ目（内）押圧+ナデ	淡茶褐/淡褐	微～細砂
2	甕	（外）（内）ナデ+押圧、1/4残、復元底径8.8cm	淡橙褐/淡褐	粗砂
3	甕	（外）（内）押圧+丁寧なナデ、底部完存、底径4.9cm	淡橙～淡灰褐/褐灰	細砂

番号	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石材	特徴
S292	スクレイパー	4.60	4.80	0.52	12.5	サヌカイト	不安定な剥片の下縁に両面調整。

図158 溝15出土遺物（縮尺1/3・2/3）



- aa' 断面
1. 淡黄灰色粘質土
 2. 黄灰色粘質土
 3. 暗黄灰色粘質土
 4. 暗青灰色粘質土
 5. 暗灰色粘質土
 6. 灰色粘土
 7. 暗灰色粘土

- bb' 断面
1. 暗灰色砂質土
 2. 暗灰色粘土
 3. 暗灰色粘質土
 4. 暗灰色粘土
 5. 暗黒灰色粘質土
 6. 黒灰色砂質土
 7. 灰色砂質土

- cc' 断面
1. 暗黒灰色粘質土
 2. 淡灰色粘質土

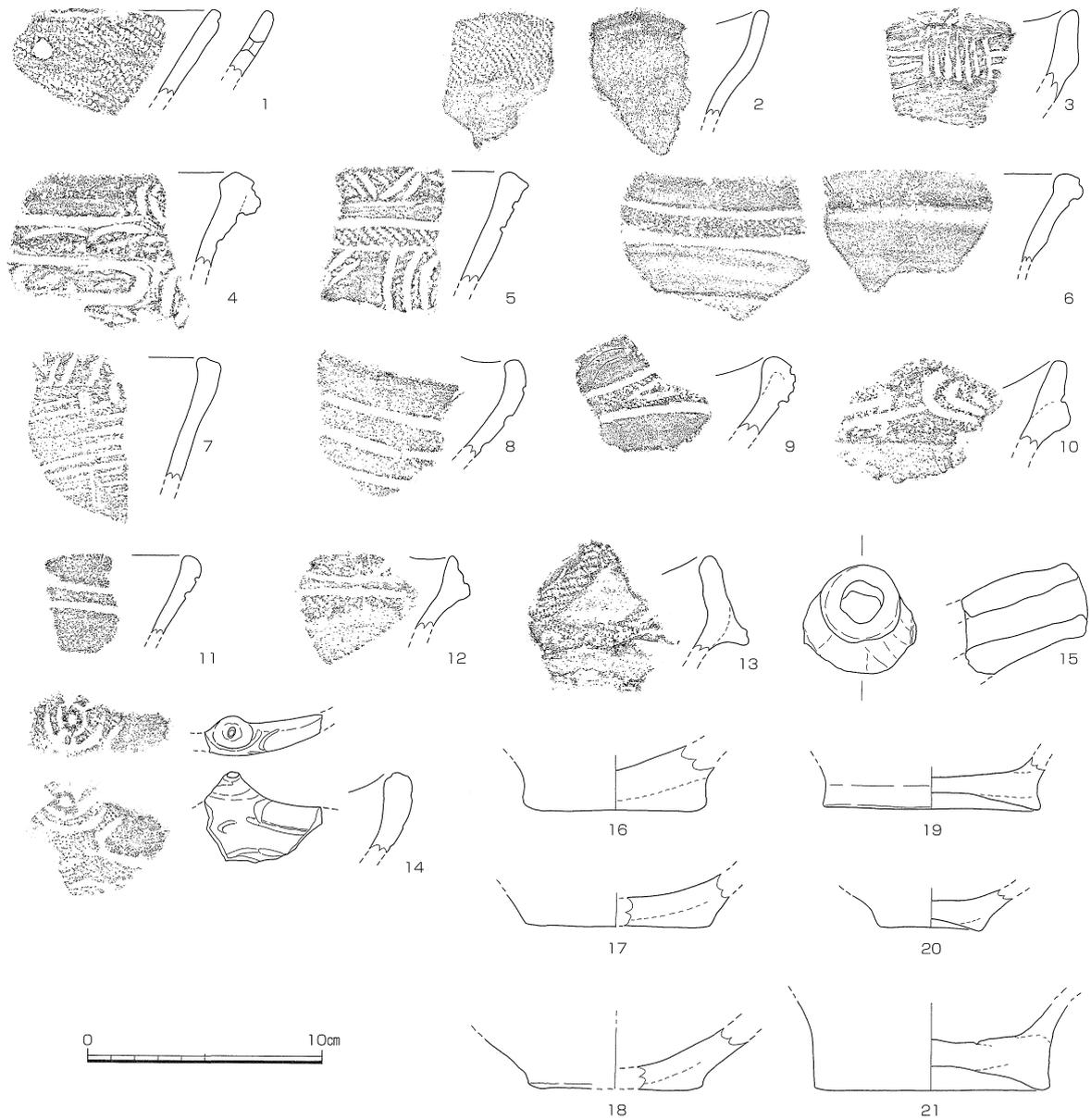


図159 溝15 (縮尺1/150・1/3)

c. 谷部出土遺物

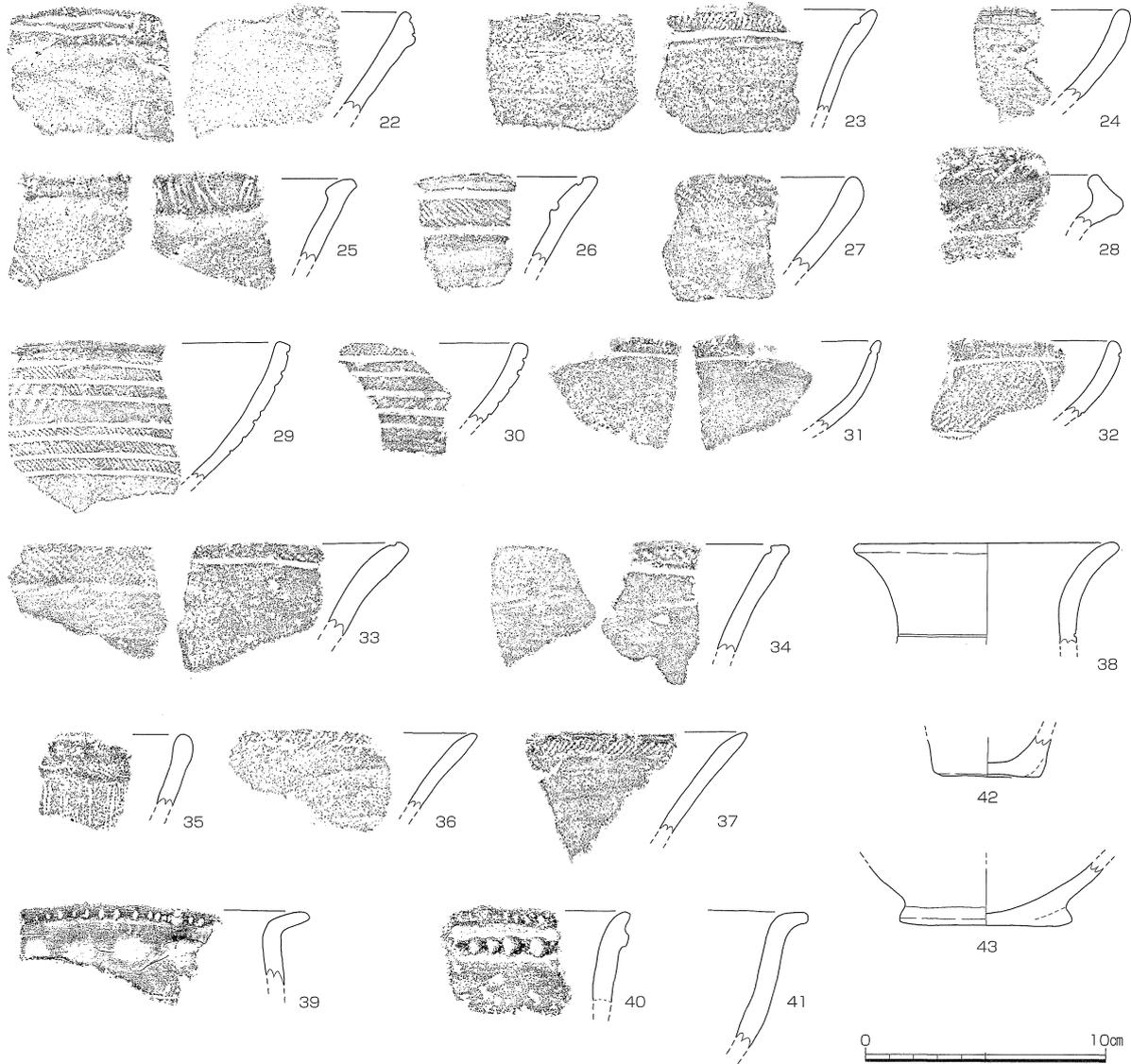
谷1～3層からは、合計でコンテナ(約28リットル)3/4箱、1300点余の遺物が出土した。その8割は谷1層からの出土であり、これらには弥生時代前期～前期末の遺物の他に、多量の縄文時代後期遺物が含まれている点特徴的である。谷1層はこの特徴と土質の点から、微高地部に堆積する13層に対応する可能性が高いと考えているが、直接関係する部分は削平を受けているため不明である。前述したように第17次調査地点の5・6区付近に堆積する「13層」については、弥生時代前期に縄文土層を伴って動かされた土層と考えており、谷1層との関係を考えた場合、「動かされた」時期は弥生時代前期末といえることができる。同じく前期末に比定される谷2層の遺物出土量はコンテナ1/4箱、200点足らずであり、この点でも谷1層が特異な状況にあることを示している。以下に個々の土層出土遺物についてみていこう。

調査の記録



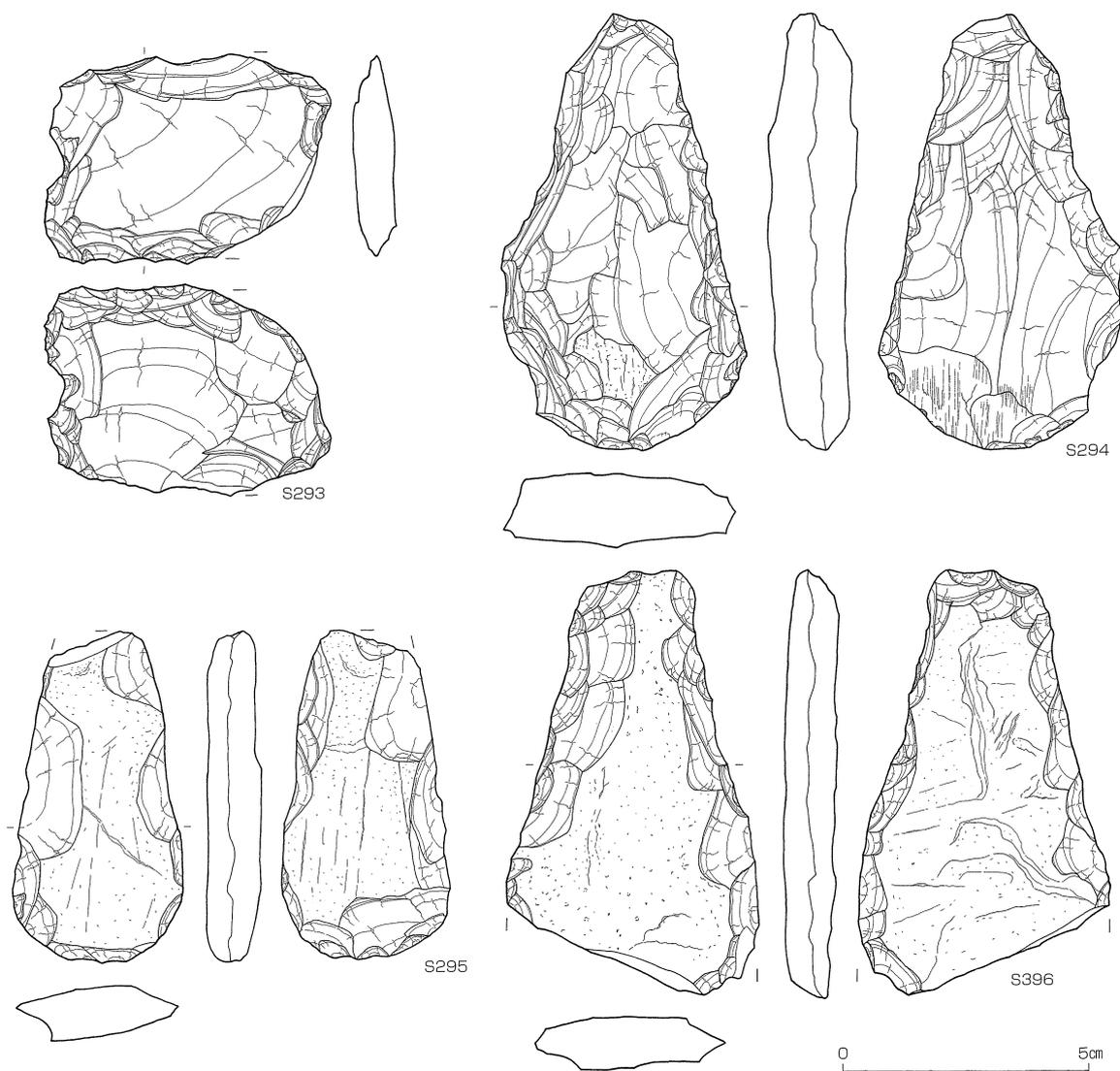
番号	器種	形態・手法ほか	色調(外/内)	胎土
1	鉢	(外) 沈線文1条、縄文(RL)、(内) 磨き、焼成後穿孔(径0.8mm)	暗灰	細~粗砂
2	浅鉢	波状口縁、(外) 縄文(RL)、磨き、(内) 押圧+磨き	淡灰茶褐	細砂
3	深鉢	口縁帯僅かに肥厚(外) 縦位7条+横位2条、条痕+ナデ、(内) 磨き、波状口縁	暗黄灰~暗茶灰	微~細砂
4	深鉢	(外) 口縁肥厚、広めの凹線文、ナデ、一部に縄文残す、(内) ナデ+押圧、	淡黄褐	細~粗砂
5	深鉢	(外) 口唇部凹線文、横位沈線2条+その間に縄文(RL)、沈線文+磨消、(内) ナデ	暗橙褐~茶褐	細砂
6	深鉢	(外) ナデ、肥厚部の上下に横位凹線+縄文、(内) 磨き	茶褐	微~細砂
7	深鉢	(外) 横~斜め条痕、口唇部へラ刺突(内) ナデ+押圧	淡茶褐/淡橙~黄褐	微~細砂
8	深鉢	(外) 磨消縄文+凹線文、(内) ナデ+押圧、波状口縁	淡黄褐白/暗灰褐	細砂
9	深鉢	(外) 縄文+沈線文、磨消縄文、(内) ナデ、波状口縁	黄橙褐/灰褐	細砂
10	深鉢	(外) 縄文+沈線文、磨消、ナデ、(内) ナデ、波状口縁	淡灰褐	細砂
11	鉢	(外) ナデ、沈線文2条、(内) 押圧・ナデ	暗茶褐/暗灰褐	細砂
12	深鉢	(外) 沈線文+縄文(RL)、ナデ、(内) ナデ	淡灰褐	細~粗砂
13	深鉢	(外) 縄文(RL)+押圧、ナデ、(内) 押圧、ナデ、波状口縁	淡橙褐	細砂
14	深鉢	(外) 縄文(RL)+凹線文、(内) 磨き、ナデ、波状口縁	茶褐	微~細砂
15	注口土器	接合部付近に沈線1条巡る、工具ナデ+押圧	淡黄褐	細砂
16	深鉢	(外) (内) ナデ、1/4残、復元底径7.6cm	褐灰	細砂
17	深鉢	(外) (内) ナデ+押圧、1/4残、復元底径7.9cm	淡橙	細砂
18	深鉢	(外) 粗いナデ(内) ナデ+押圧、1/4残、復元底径7.4cm	淡黄褐/黒	細砂
19	深鉢	(外) ナデ(内) ナデ+押圧、1/4残、復元底径9.3cm	淡黄褐	細砂
20	鉢	(外) ナデ、ローリングにより荒れ(内) ナデ+押圧、4/5残、復元底径4.3cm	淡橙/黒褐	細砂
21	深鉢	(外) ナデ+押圧、(内) ナデ、完存、底径10.1cm	暗褐白/淡橙	細砂

図160 谷1層出土土器1(縮尺1/3)



番号	器種	形態・手法ほか	色調(外/内)	胎土
22	深鉢	(外) 口縁肥厚部に2条横位沈線+縦位2条、押圧+ナデ、(内) 押圧+ナデ	淡橙褐/淡灰押褐	精良、細砂
23	深鉢	(外) 縄文+磨消縄文+磨き、(内) 磨き、口縁に沈線1条	黒	精良、細~粗砂
24	鉢	(外) (内) ナデ・条痕	黄褐	精良、微~細砂
25	深鉢	(外) ナデ+沈線文、(内) 口縁ヘラ沈線文、ナデ	黄褐	精良、微砂
26	深鉢	(外) ナデ、(内) 凹線2条、縄文(RL)+ナデ	淡褐~暗褐	精良、細砂
27	浅鉢	(外) 縄文(RL)、ナデ、(内) 押圧、ナデ、口縁縄文	淡灰褐	精良、細砂
28	深鉢	(外) ナデ、刻み+横位沈線、口唇部付近縄文(RL) (内) 押圧+ナデ	淡押褐灰	精良、細砂
29	浅鉢	(外) 沈線文7条、縄文(RL)、一部磨消(内) 磨き	暗茶褐~暗灰褐	精良、細砂
30	浅鉢	(外) 沈線文4条、縄文(RL)、一部磨消、(内) 磨き、1と同一個体か	暗茶灰/暗黒灰	精良、細砂
31	浅鉢	(外) 口縁縄文、ナデ、(内) 磨きに近いナデ、口縁縄文	淡茶褐	精良、微~細砂
32	鉢	(外) 沈線文2条、縄文(RL)、(内) ナデ	淡灰褐/淡灰褐~暗灰	精良、細砂
33	深鉢	(外) 工具ナデ+口縁部縄文(RL)、口縁やや肥厚、(内) ナデ、口縁に沈線1条	暗茶褐	精良、細砂
34	深鉢	(外) ナデ、(内) 工具ナデ、口縁に沈線1条、口縁に縄文(RL)	淡灰褐/暗灰黒	精良、細砂
35	深鉢	(外) 口縁部斜位沈線+下位は縦位沈線(4条一組)、(内) 条痕	淡橙	精良、細砂
36	浅鉢	(外) 口縁縄文、粗めのナデ、(内) 磨き	淡褐/暗灰褐	精良、細砂
37	浅鉢	(外) 口縁縄文+磨き、(内) 磨きに近いナデ	暗灰褐	精良、細砂
38	壺	(外) (内) ていねいなナデ、頸部外面に沈線1条、1/6残、復元口径10.6cm	淡橙	精良、微砂
39	甕	(外) ナデ+押圧、口縁部刻目、(内) 丁寧なナデ+一部押圧	淡褐~灰褐/暗灰褐	精良、微~細砂
40	深鉢	(外) ナデ、貼付突帯上に刺突(◇形、やや深め)、口縁にも刻目、(内) ナデ	暗褐灰	精良、微~細砂
41	甕	(外) (内) ナデ	淡橙白/淡橙	精良、細砂
42	鉢	(外) ナデ+押圧(内) ナデ+押圧、1/2残、復元底径4.2cm	黒/淡褐白	微~細砂
43	深鉢	(外) やや粗いナデ(内) ナデ、2/5残、復元底径6.8cm	暗灰褐	微~細砂

図161 谷1層出土土器2(縮尺1/3)



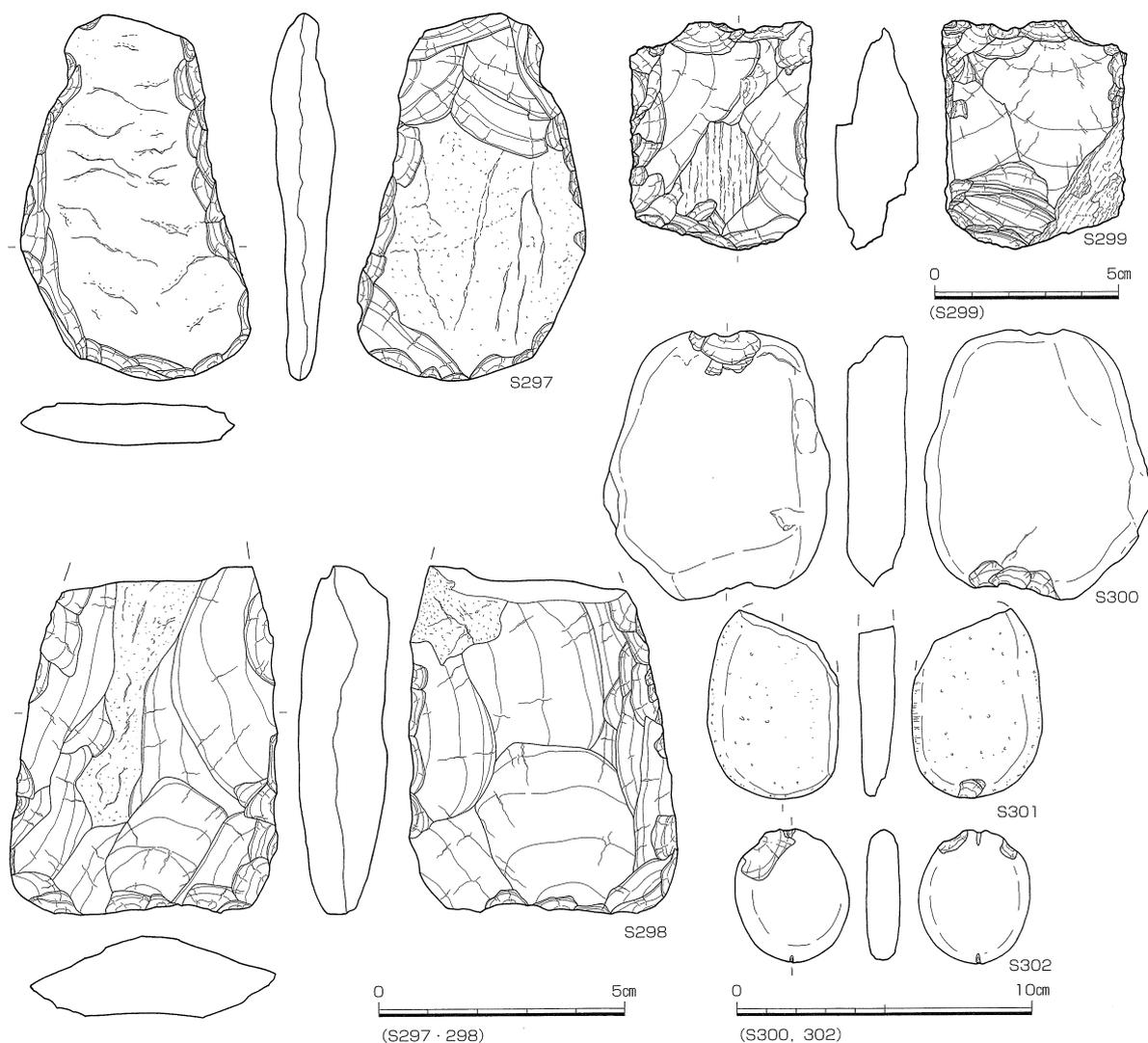
番号	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石材	特徴
S293	スクレイパー	4.30	5.80	0.90	27.7	サヌカイト	抉り入り。欠損の後加工か？
S294	石鋏	8.90	4.90	1.80	79.6	粘板岩	刃部に資料による摩滅と線状痕。
S295	石鋏	(6.80)	3.40	1.10	34.5	粘板岩	小型品。扁平素材の周縁に両面調整。
S296	石鋏	(8.70)	(5.10)	(1.10)	(56.9)	粘板岩	刃部欠損。両側縁に両面調整。

図162 谷1層出土石器1 (縮尺2/3)

谷1層 (図152・160～163)

本層からはコンテナ (約28リットル) 1/2箱、約1000点の遺物が出土した。このうち土器43点、石器10点を図160～163に掲載した。出土遺物には縄文時代中期末～弥生時代前期末のものが含まれる。谷1層の埋没時期は弥生時代前期末である。

出土土器のうち主体をなすのは、縄文時代後期前葉の遺物であり、次いで後期中葉に入るものが目立つ。微高地部の13層に比べて、中葉のものが目立つ点を注意しておきたい。1～3は縄文時代中期末の特徴をもつ。中津式～福田KⅡ式、津雲A式といった後期前葉のものとして、4～14がある。4～10・12～14は深鉢である。22～34は、後期中葉のものである。16～21は胎土・調整等の特徴から縄文時代後期のものとした。40は刻み目突帯文を有する深鉢である。弥生時代前期の土器には、38・39・41があり、38の壺は前期中頃に、39・41の甕は前期前



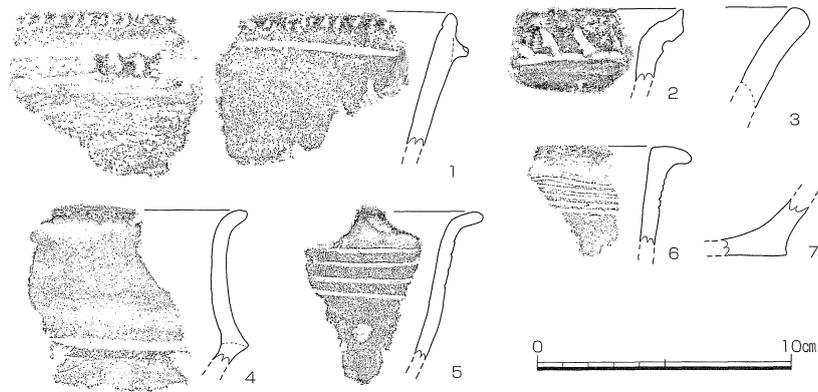
番号	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石材	特徴
S297	石鋏	7.6	4.6	1.3	46.7	細粒砂岩	基部付近に抉りを意図した剥離。
S298	石鋏	(7.2)	5.4	1.8	(95.5)	粘板岩	基部欠損。直線状の刃部。
S299	石核	6.25	5.00	2.20	79.7	サヌカイト	両極打法による剥離。
S300	石錘	9.3	7.7	2.1	228.1	流紋岩質凝灰岩	扁平な礫の上下端に打ち欠き。
S301	石錘	(6.5)	4.4	1.3	(51.4)	流紋岩	上部を欠損。下端部にわずかに打ち欠き。
S302	石錘	4.6	3.8	1.2	30.7	石英安山岩	小型品。円礫の上下端に摺切による溝。

図163 谷1層出土石器2 (縮尺1/2・2/3・2/5)

半と位置づけられる。

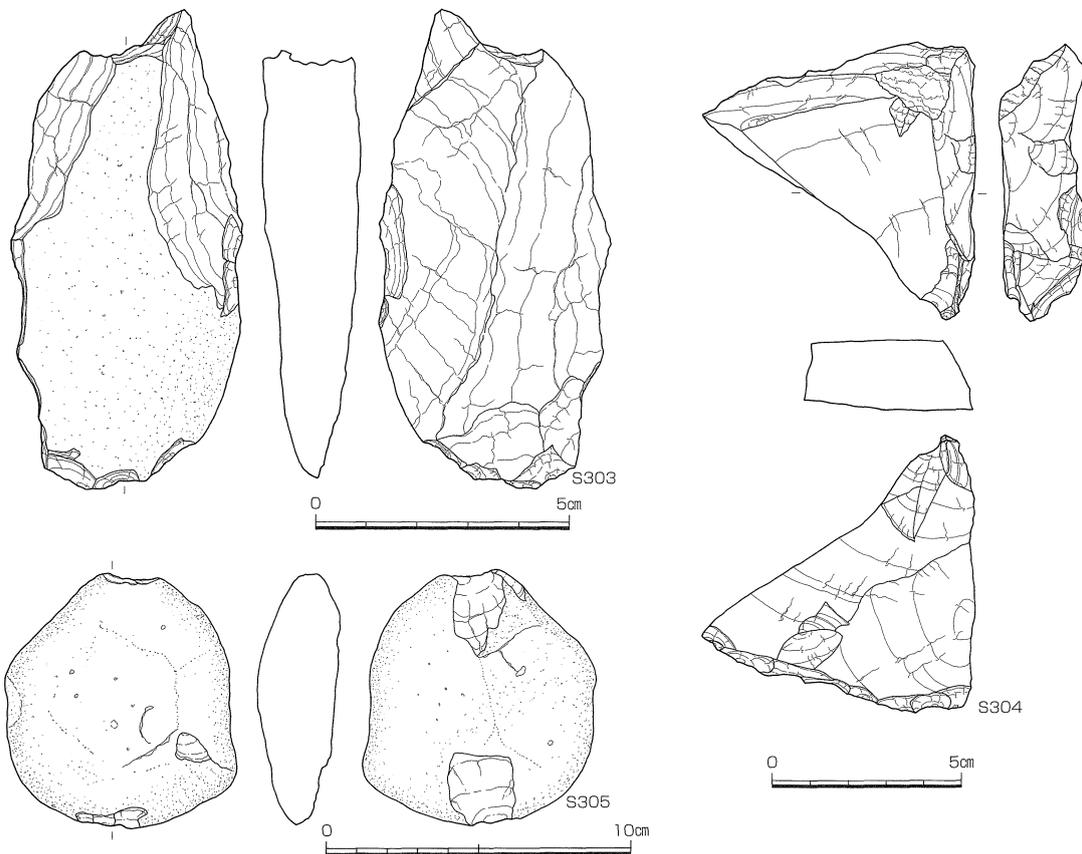
石器はスクレイパー・石鋏・石核・石錘が出土している (図162・163 図版22・24・25)。

図162-S293はサヌカイト製スクレイパーである。下縁に両面調整によって厚みのある刃部をつくりだす。左側縁には両面からの細かい調整によって抉り部がつくり出されている。右側縁は折損するが、その面から細かい調整を施しており、再加工した可能性が高い。刃部には使用による摩滅部位が認められる。S294～298はいずれも粘板岩製石鋏である。S294は基部が尖り、基部から刃部にかけて両側縁が大きく開くバチ状の平面形である。素材の周縁から整形を意図した調整剥離を重ね整形した後に、周縁全体に両面から調整を細かく施して仕上げている。下縁部には厚みのある弧状の刃部がつくり出される。両側縁の上部付近には、抉りを意識した調整が認められるが、ここが木柄との緊縛に用いられた可能性がある。刃部には使用による摩滅と線条痕が認められる。特



番号	器種	形態・手法ほか	色調	胎土
1	深鉢	(外) 横ナデ、貼付突帯、断面三角、刻みD形、口唇に刻み (内) ナデ、沈線1条	暗茶褐/黒	細～粗砂
2	深鉢	(外) ナデ、口縁帯に沈線文、帯下に横位沈線1条 (内) ナデ	暗茶褐/茶褐～黒褐	細～粗砂
3	壺	(外) (内) やや粗いナデ	淡橙褐～淡黄褐	細～粗砂
4	鉢	(外) 丁寧なナデ+凹線+下位は磨き+使いナデ (内) 押圧+ナデ	黒褐～茶褐/暗灰黒	細砂
5	甕	(外) ナデ、横位沈線4条、(内) 押圧+ナデ	淡黄褐～茶褐	細砂
6	甕	(外) (内) 丁寧なナデ、外面、5条一組の横位沈線	茶褐～赤茶褐/黒～淡黄褐	微～細砂
7	深鉢	(外) ナデ (内) 磨きに近いナデ	暗黄褐/黒	細砂

図164 谷2層出土土器 (縮尺1/3)



番号	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石材	特徴
S303	石鋸	9.55	4.6	1.92	111.2	玄武岩質凝灰岩	下辺に粗い調整。
S304	石核	7.2	7.38	1.85	97.5	サヌカイト	板状の素材。自然面を残す。
S305	石錘	8.5	7.65	2.7	220.4	流紋岩	大型品。扁平な碟の上下端に打ち欠き。

図165 谷2層出土石器 (縮尺2/3・2/5・1/2)

に裏面が大きく摩滅する。S295は小型品で下端に両面調整によって厚みのある弧状の刃部をつくり出す。S296は素材面を大きく残し、周縁部に両面調整を施す。刃部が欠損する。S297も扁平な素材に簡略に両面調整を施したものであるが、左側縁の上部に抉りを意図したような調整が認められる。S298は扁平な素材に周縁から整形を意図した調整剥離を施し厚みを一定した後に、両側縁と下縁を両面調整して仕上げる。横断面は整った凸レンズ形である。刃部は直線状だが、わずかに内湾する。基部を欠損する。S299はサヌカイト製石核で自然面が大きく残ることから、扁平な角礫を素材としたと考えられる。上下縁は縁辺部となり、階段状のつぶれた剥離がそれぞれ認められ、上下縁を結ぶような方向で薄い小剥片が剥離した面が数枚確認できる。おそらく、両極打法によって、石鏃などに用いる剥片をとっていた石核と判断される。ただ、大型の楔形石器とみることも可能かもしれない。石錘は3点出土した（S300～302）。S300は大型品である。上下端に片面から打ち欠き利用している。S302は上端に磨り切りによる溝と打ち欠きが認められる一方で、下端は溝のみが観察される。

谷2層（図134・152・164・165）

谷2層の出土遺物には土器片187点（28リットルコンテナ1/4箱）と石器3点があり、図164・165に掲載した。詳細は後述するが出土遺物も併せ、時期は弥生時代前期末と考えられる。

前期の遺物は3・5～7である。甕のうち6は前期末、5は前期前半と位置づけられる。その他に突帯文土器深鉢（1）・縄文後期の深鉢（4）がある。

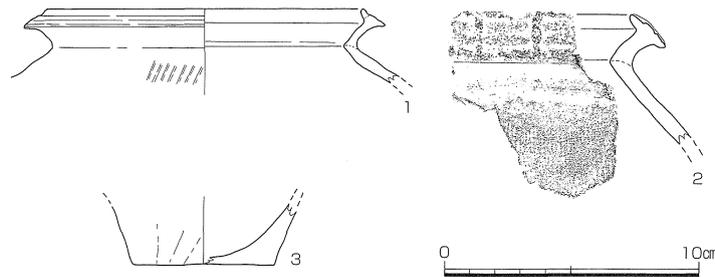
石器は石鋏・石核・石錘が出土している（図165）。S303は玄武岩質凝灰岩製の石鋏で、円礫を裁断し素材として利用する。両側縁上部に整形を目的とした剥離を行なうが、全体的に不定形である。刃部調整も粗く、未成品の可能性もあろう。S304はサヌカイト製石核で板状の素材に打面をつくり、小剥片を剥離する。自然面が一部残る。一側縁には片面調整も認められる。S305は流紋岩の円礫を利用した大型石錘で、上下端を打ち欠く。

谷3層（図152・166）

第22次調査地点の谷状地形を最終的に埋めることとなる土層である。溝21・22（古代溝）よりも北側では、調査区全域で谷3層の堆積が認められ、ほぼ水平堆積である。

遺物は弥生土器片84点が出土し、そのうち3点を掲載した（図166）。1・2は甕口縁部片、3は甕底部である。いずれも中期の遺物であるが、1・2の存在から谷3層は中期後半～末の時期が考えられる。

弥生時代中期前半に溝15が埋没した後、短期間に谷3層が埋没したものと考えられ、その結果後期には平坦化した地形を呈してと考えられる。



番号	器種	形態・手法ほか	色調（外/内）	胎土
1	甕	（外）横ナデ+縦ハケ、端面に凹線一条（内）横ナデ、1/6残、復元口径12.6cm	淡褐	細砂
2	甕	（外）端面に凹線3条+棒状浮文2カ所、丹塗り?、横ナデ、縦ハケ（内）横ナデ	淡黄橙、淡黄褐	精良、微砂
3	甕	（外）ミガキか、底部外面はナデ（内）押圧+ナデ、1/2残、復元底径5.6cm	淡茶褐/淡灰褐	微～細砂

図166 谷3層出土土器（縮尺1/3）

第5節 古墳時代の遺構・遺物

古墳時代の遺構は13層・11層・10b層の各層の上面で検出した（図167）。

第17次調査地点では、弥生時代前期にあたる13層上面で、前期の溝1条（溝16）及び後期と考えられる溝1条（溝17）柱穴列1条を検出した。また第22次調査地点では、調査区中央部が古代溝によって削平されているが、その両脇においては、11層上面で前期の溝1条、10層上面で後期の溝2条（溝18・19）と畦畔をそれぞれ検出した。

a. 溝

溝は合計4条を検出した。時期としては古墳時代前期のもの（溝16）と、後期のもの（溝17～19）とがある。

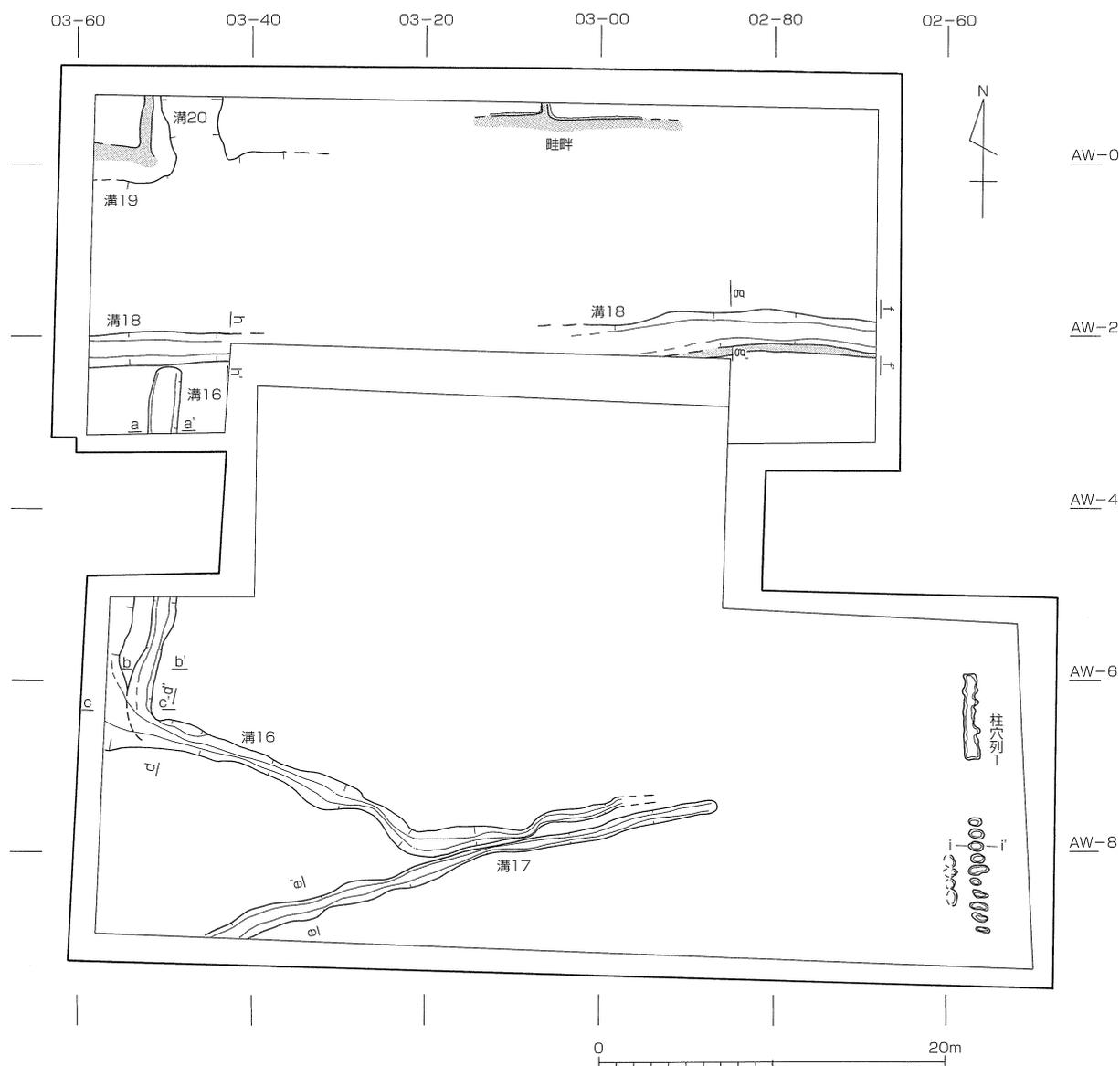
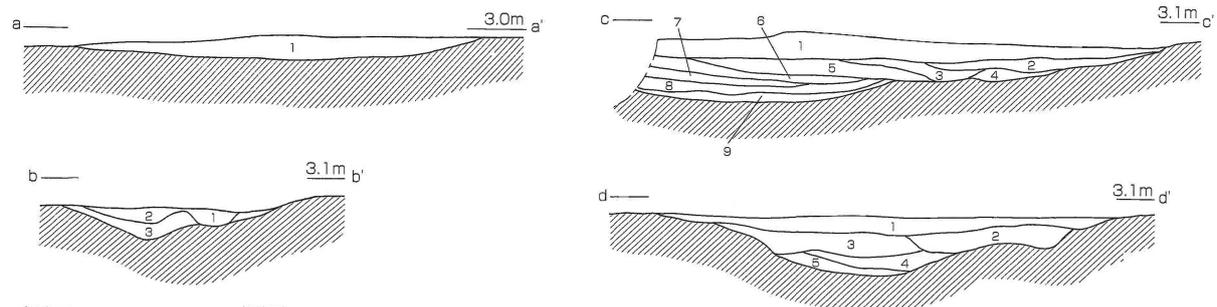


図167 古墳時代遺構全体図（縮尺 1/400）

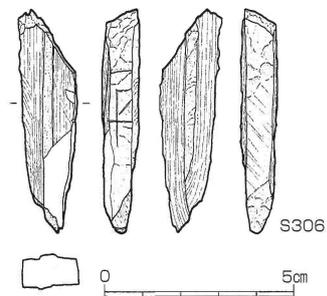
溝16 (図167・168 図版28)

AW03-88区より西南方向に走行し、03-20ライン付近で北西に向きを変えて、調査区西端部ではほぼ直角に北流する。途中AW-6ラインあたりで2本に別れ、西側は調査区西壁より外へ、東側の溝はAW-2ライン付近で収束する。検出面は第17次調査地点では13層上面であるが、第22次調査地点では11層上面であることから本来は11層上面の遺構である。検出レベルは、第22次調査地点で標高2.95m、第17次調査地点の西半で標高3.0m前後、溝の東端では標高3.1mである。底面のレベルは西半で標高2.8m、東端で3.07mで、東に向けて浅くなり、03-00ライン以東では検出できなかった。溝の幅は最小で0.6m、最大で2.0mと、場所によって不揃いであり、これは新旧二つの流路が重複しているためと考えられる。上述したように溝16はcc'断面の北から2本に分かれるが、このうち東側溝が新段階、西側が旧段階にあたる。埋土をみるとcc'断面では1層(灰褐色粘質土)は最終の流入土、2~5層が新段階、6~9層が旧段階の流路である。新段階の埋土は灰褐色~灰黄褐色系の砂質土であり、aa'断面1層、bb'断面1~3層、dd'断面2層がこれに対応する。旧段階の埋土は灰黄褐色~暗橙色系砂質土で、下層(cc'断面8・9層、dd'断面5層)には鉄分の沈着が目立つ。

遺物は、土師器甕の小片のほか、石器1点が出土している(図168-S306)。S306は良質な粘板岩製で、両面にはそれぞれ両側縁からの擦り切り痕が明瞭に認められ、その中央には折り取られた部分が残る。また右側面には擦り切る位置を割り付けしたような十字の刻線も確認できる。おそらく、板状素材に擦り切る位置を刻線で割り付け後に、素材の両面から順次擦り切り、最後に折り取ったものの破片と判断できる。良質な石材であり、玉



- | | | |
|------------|---------------|-----------------|
| aa'断面 | cc'断面 | |
| 1. 灰褐色砂質土 | 1. 灰褐色粘質土 | 7. 灰褐色砂質土 |
| bb'断面 | 2. 灰黄褐色砂質土 | 8. 暗橙灰褐色砂質土(鉄分) |
| 1. 灰褐色砂質土 | 3. 暗灰褐色砂質土 | 9. 暗黄橙色砂質土(鉄分) |
| 2. 暗灰褐色砂質土 | 4. 暗褐色砂質土 | |
| 3. 暗黒褐色砂質土 | 5. 灰黄褐色砂質土 | |
| | 6. 暗黄橙色砂質土 | |
| | dd'断面 | |
| | 1. 灰褐色粘質土 | |
| | 2. 灰褐色砂質土 | |
| | 3. 灰黄褐色砂質土 | |
| | 4. 暗灰黄褐色砂質土 | |
| | 5. 暗橙色砂質土(鉄分) | |



番号	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石材	特徴
S306	玉素材	5.95	1.60	0.90	11.0	粘板岩	両側面からの擦り切り痕。右側面に割付用の刻線。

図168 溝16・出土遺物 (縮尺1/30・2/3)

造り素材の可能性もあろう。

出土遺物と層位から、本溝の時期は古墳時代前期と考えている。

溝17 (図167・169)

13層上面で検出したが、本来は10層上面の遺構と考えられる。検出レベルは標高3.1m、底面のレベルは標高3.0mである。溝の幅は0.9~1.1m、深さ10cm前後で、北東~南西方向に伸びる溝である。02-90ライン以東では検出できなかった。底面のレベルからは流路の方向は不明であるが、南西に向けて若干傾斜のある地形を考慮すると南西方向へ流れている可能性がある。埋土は灰褐色粘質土で、黒褐色土(13層)のブロックを含んでいる。出土遺物には須恵器片を含む土器小片約20点があり、土器は図化できるものはなかった。

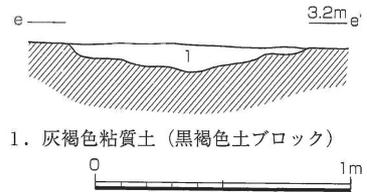
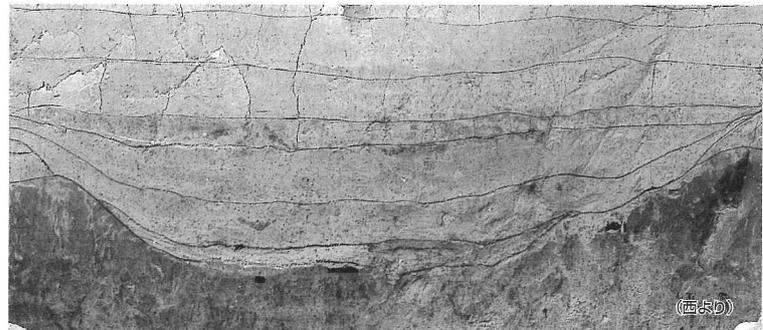


図169 溝17 (縮尺1/30)

本溝の時期は出土遺物と層位関係より、古墳時代後期と考えられる。

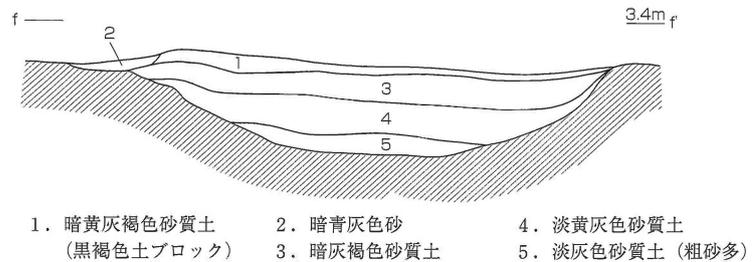
溝18 (図167・170)

AW-2ラインに沿うように、東西方向に走行する溝である。10b層上面で検出した。03-00ラインから03-40ライン間は古代の溝等によって削平を受けている。検出レベルは標高3.1~3.3m、底面のレベルは標高2.8~2.9mで、深さは0.4m前後である。溝の幅は2m前後を測る。断面の形状はU字形を呈している。



溝18 ff'断面

埋土は黄灰色系の砂質土を主体とするff'断面1層、gg'断面2層中には黒褐色土ブロック(13層)を含む。また下方(ff'断面5層、gg'断面4・5層)では粗砂の割合が多い。



遺物のごくわずかに土器数片が出土し、古墳時代前半の土師器高杯片があるが、溝の時期は検出層位から古墳時代後期である。

本溝は、本調査地点の西約20mに位置する第9次調査地点の溝21、さらに第6次調査地点の溝11と同一遺構である可能性が高い。

溝19 (図167・171)

調査区の北端部に位置する。10b層上面で検出した。検出レベルは標高2.9mである。03-40ラインから調査区西端部までの間で確認した東西方向に走行する非常に浅い溝であるが、

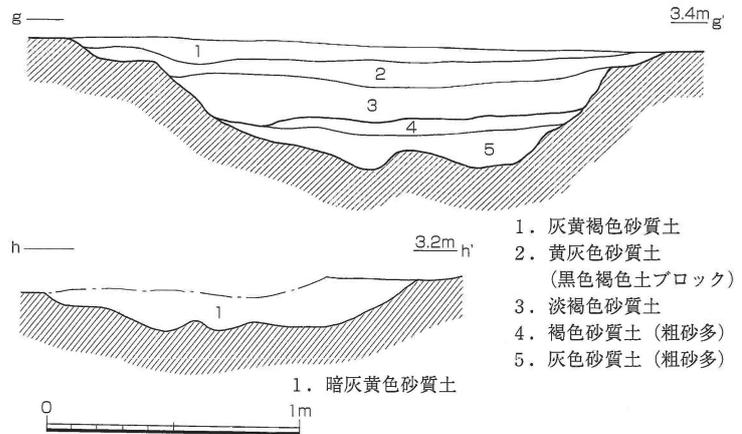


図170 溝18 (縮尺1/30)

大半は古代の溝によって削平されている。

埋土は10a層に近似する灰白色砂質土層であり、後述する畦畔とともに10a層の堆積時に埋没したものと考えられる。本溝から遺物の出土は認められなかったが、10a層中より7世紀代の須恵器片が出土しており、遺構の時期も古墳時代後期と考えている。

本溝は、位置関係と時期から、第9次調査地点溝20、第6次調査地点溝8、さらに第7次調査地点溝3に対応する可能性がある。その場合既調査地点の状況から、本溝は、溝18と平行して流れるものと考えられる。

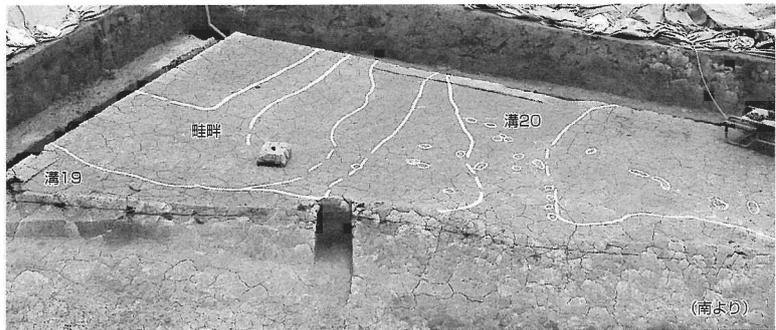
溝20 (図167・171)

調査区の北西端に位置し、溝19に直交するように入り付くことが推測される。検出レベルは標高2.9mである。溝の幅2.8~3.5m、深さは南から北に向かって徐々に深くなるが、最大で15cm程度の浅い溝である。底面は凹凸が顕著で、2ヶ所でたわみ状を呈する。埋土は10a層に近似する灰白色砂である。また本溝に伴うものと考えられる杭あるいは杭の痕跡25本を検出した。東側の肩から底面付近を中心に打ち込まれたもので、いずれも直径10cm前後である。配列からは具体的な用途の推定は難しい。前述した溝19に直交するように入りつく形状から、第6次調査地点の溝8に取りつく溝9・溝10との共通性が認められる。

本溝からはわずかに出土した遺物として7世紀前半代の須恵器片があり、本遺構の時期としては7世紀前半と考えている。

b. 畦畔

10b層上面で、ほぼ東西南北の方向に合致する畦畔を検出した(図167)。いずれも最長でも9mほどが残り、古代溝等による破壊により、残存状況は悪い。溝19の北側では同溝肩部に沿って東西にのびる畦畔と、これに直交して北にのびる2ヶ所の畦畔を検出した。南北方向の畦畔の間隔は約23mである。検出レベルは標高2.9~3.0mである。溝沿いにある東西方向の畦畔は、幅0.7m前後であるに対し、北側へのびる部分は幅0.3m程度と狭く、違い



溝19・20と畦畔

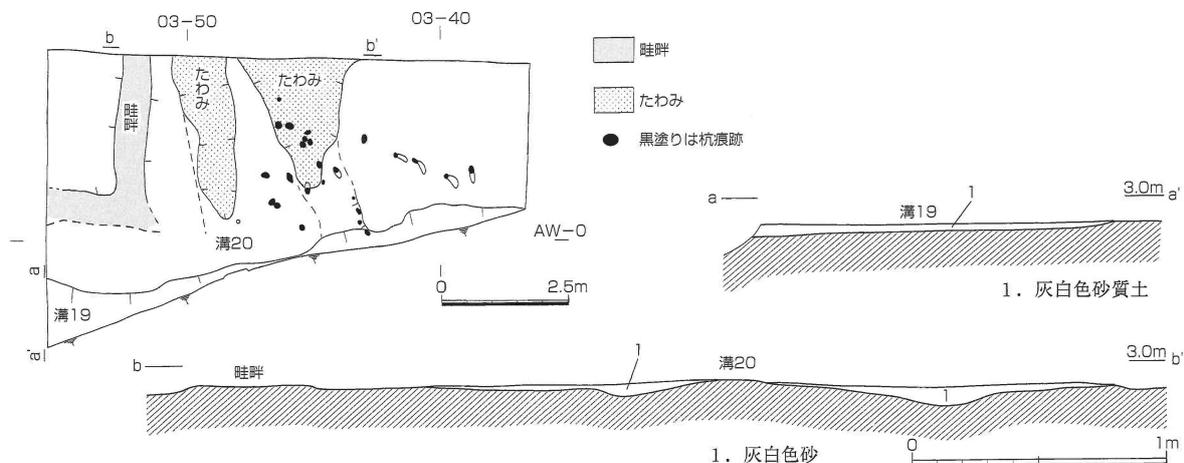


図171 溝19・20、畦畔 (縮尺 1/150・1/30)

調査の記録

を示す。畦畔の高さは1.5～3 cm前後である。一方、溝18の南側では同溝の縁に東西に走る。検出レベルは標高3.15～3.2mである。幅0.3m、高さ1.5～2 cmである。

これらの畦畔は前述の溝18～20と併存していたものと考えられる。出土遺物は見られないが、上面を覆う10a層、検出面である10b層から須恵器片が出土していることから、本遺構の時期は古墳時代後期と考えられる。

c. 柱穴列

柱穴列 1

13層上面において、調査区南東部の02-60ライン付近で検出した(図167・172)。検出レベルは標高3.1～3.2mである。長径60～115cm、短径20～50cm、深さ10cm前後の平面楕円形を呈する掘りこみを、南北方向に連続して検出した。底面レベルは標高3.05～3.1mである。南側では長さ7 m中に10個の掘り込みが、間隔10～15cm前後と、ほぼ等間隔に、密接して掘削されている。一方、この並びの3 m程北側では長さ5 m、幅0.8mほどの溝状の掘り込みが認められる。この長条形の掘り込みには、南側にみられる不整形掘り込みを複数と一緒に掘ったものである。深さ10cm程である。本来、少なくとも2列は存在していたようであるが、西側の一列は土層観察用の側溝掘削のために列の大半を確認することができなかった。東西の列の間隔は0.6～1.0mである。柱穴の断面の形状はいびつな皿状を呈している。埋土は白灰色粘質土で、10層と近似している。遺物は出土していないが、土層の状況から少なくとも古墳時代後期には埋没したことが伺える。

遺構の性格については判断する材料に欠けているが、同様の遺構は百間川沢田遺跡の柱穴列、窪木遺跡の柵列状遺構などが挙げられる。津島岡大遺跡第26次調査地点でも類例が認められ、道の下部構造の可能性が指摘されている⁽¹⁾。本柱穴列1についても、同様の可能性を考えておきたい。その場合道の規模としては柱穴列の両端をとると幅3 mと考えられる。

註

(1) 光本順2005「古墳時代後期から中世における遺構群の変遷」『津島岡大遺跡15』(岡山大学構内遺跡発掘調査報告第20冊)

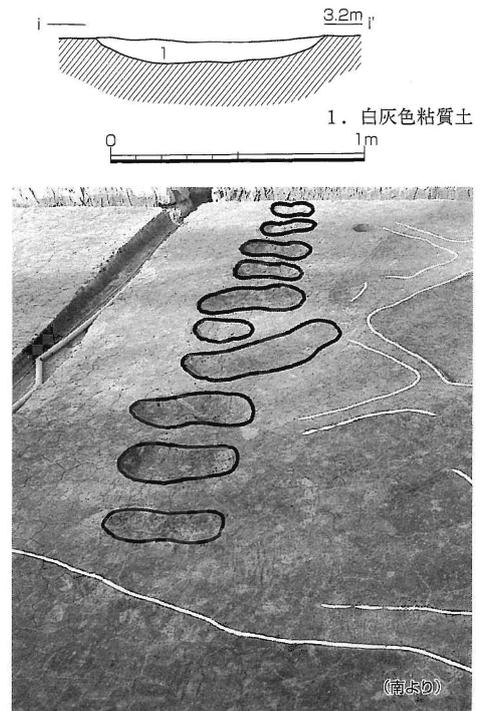


図172 柱穴列1 (縮尺1/30)

第6節 古代の遺構・遺物

古代の遺構は溝3条(溝21～23)と畦畔である(図173)。8b層では谷部では溝21上層溝と微高地部で畦畔が検出されている。畦畔は微高地部分(第17次調査地点)のほぼ全域に、東西南北の正方位に近い方向でひろがる。9層では谷部(第22次調査地点)において、溝21下層溝・溝22・23に加えて、溝22に伴う畦畔と、溝23に伴う畦畔を検出した。畦畔と溝23、溝21下層溝との先後関係は、土層堆積状況から併存する可能性が強いことから、溝21内の杭群の存在も含め、主要な用水路と支流となる水路などの有機的関係を考えさせられる。

古代の遺構は古いものから、溝22と畦畔→溝21下層・溝23と畦畔→溝21上層と微高地部畦畔と整理される。

a. 溝

溝21 (図173~184 図版20~26・28~30)

調査区の北半、AW-0~2ライン間をほぼ東西方向に走行する溝である。溝21には大きく二つの段階が想定され、上層溝は8b層、下層溝は9層に帰属する。検出面のレベルは、場所によって若干の差異があるが9層上面で3.1~3.3m、8b層上面で3.2~3.4mである。埋土は堆積状況と土質から5群のまとまりに分類することができる(図175)。〈1〉群は暗灰褐~暗橙褐色砂、〈2〉群は灰色系の粘質土、〈3〉群は灰色系砂を主体とし、部分的に淡灰色粘質土がみられる。〈4〉群は灰褐色系砂が主で、西半部では暗灰色系の粘質土が下位に堆積する。また〈5〉群は灰褐色系の粘質土を主体とし、部分的に暗灰色系砂が下位にみられる。このうち、〈4〉群の最上層が9層上面の溝23埋土と一体化していることから、〈1〉~〈3〉群を溝21上層溝、〈4〉・〈5〉群を溝21

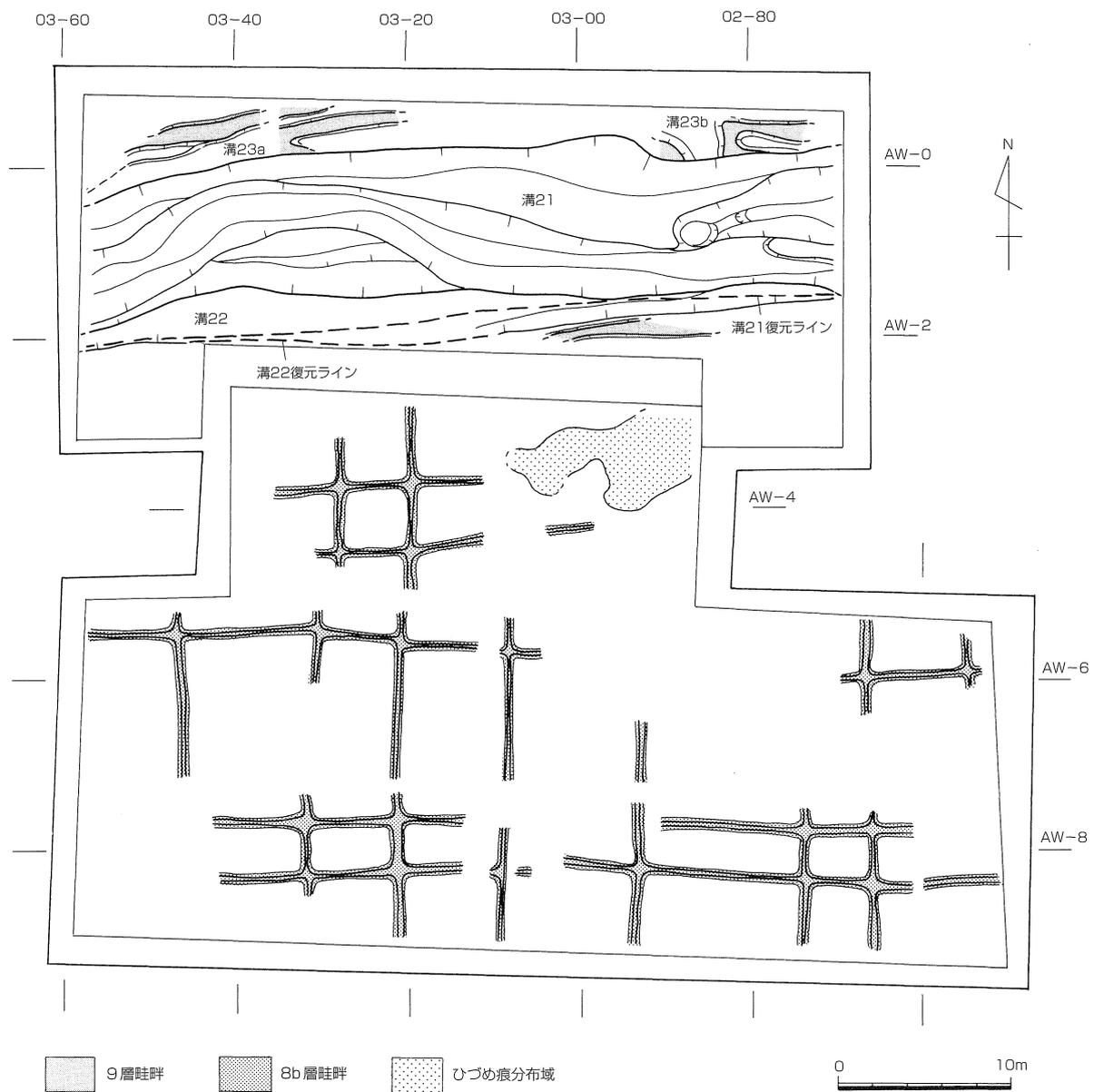


図173 古代遺構全体図 (縮尺1/400)

下層溝と区別できる。さらに下層溝はaa'・cc'断面から〈4〉群と〈5〉群の2段階に細分される。

上層溝は中世溝等による削平を受けているが、形状や流路をうかがえる。溝の残存幅は東端で7.0m、西端で8.8m、底面のレベルは標高2.5mを測る。深さは0.5mが残る。断面の形状はU字形を呈している。上層溝は東端からやや南寄りに西流し、03-10ライン付近で北に蛇行する。さらに03-40ライン付近で南に振れる。西に向かうにつれ、底面がフラットに近くなり、幅がひろがる。

下層溝は大半が上層溝と重複しているため、全形は不明である。前述したように2段階の流路に区別でき、〈4〉〈5〉群では流路が若干異なる。新段階（〈4〉群）は上層溝とほぼ同様の形状・流路を示している。溝の残存幅は東端で8.8m、西端で10.2m、底面のレベルは標高2.5mを測る。深さは0.35~0.5mが残る。

古段階（〈5〉群）の底部は、dd'断面ではU字形を呈し、残存幅7.3m、深さ0.4mである。底面のレベルは東端で標高2.3m、西端で2.14mである。走行方向は北東~南西方向にやや振れているが、大きく蛇行していたかどうかは不明である。

溝21からは多くの杭を検出した。このうち原位置で確認できた60本余について図174に位置を示した。また03-20~30ライン間では溝21の南側斜面で杭・横木がまとまって検出され、これを「堰状遺構」として記述する。まず杭については、まとまって検出されたのは、溝の東端部分（a~c群）と西端部（d群）である。東端部では溝の北岸側の傾斜面が段状を呈しており、一段目に約30本がまとまっているc群の中では北側の肩に

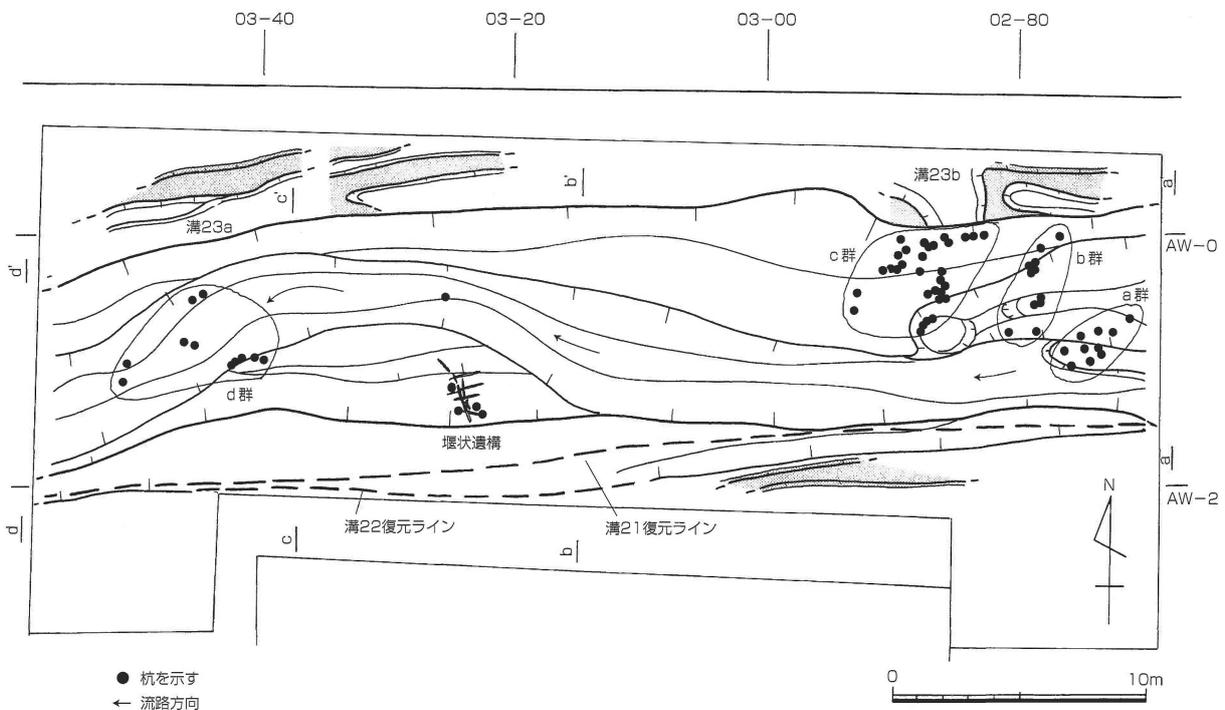


図174 溝21杭出土状況（縮尺1/300）

群	aa'	bb'	cc'	dd'
(1)	1~3	1	-	-
(2)	4・5	2~4	1~3	1・2
(3)	6~9	5~7	4~6	-
(4)	-	8	7	-
(5)	10~13	9~14	8・9	3~5
溝21上層	粘	-	10・11	6
溝21下層	粘	14~16	12~15	7
溝22	砂	-	18	-
	-	19・20	16・17	11

溝22

bb'断面

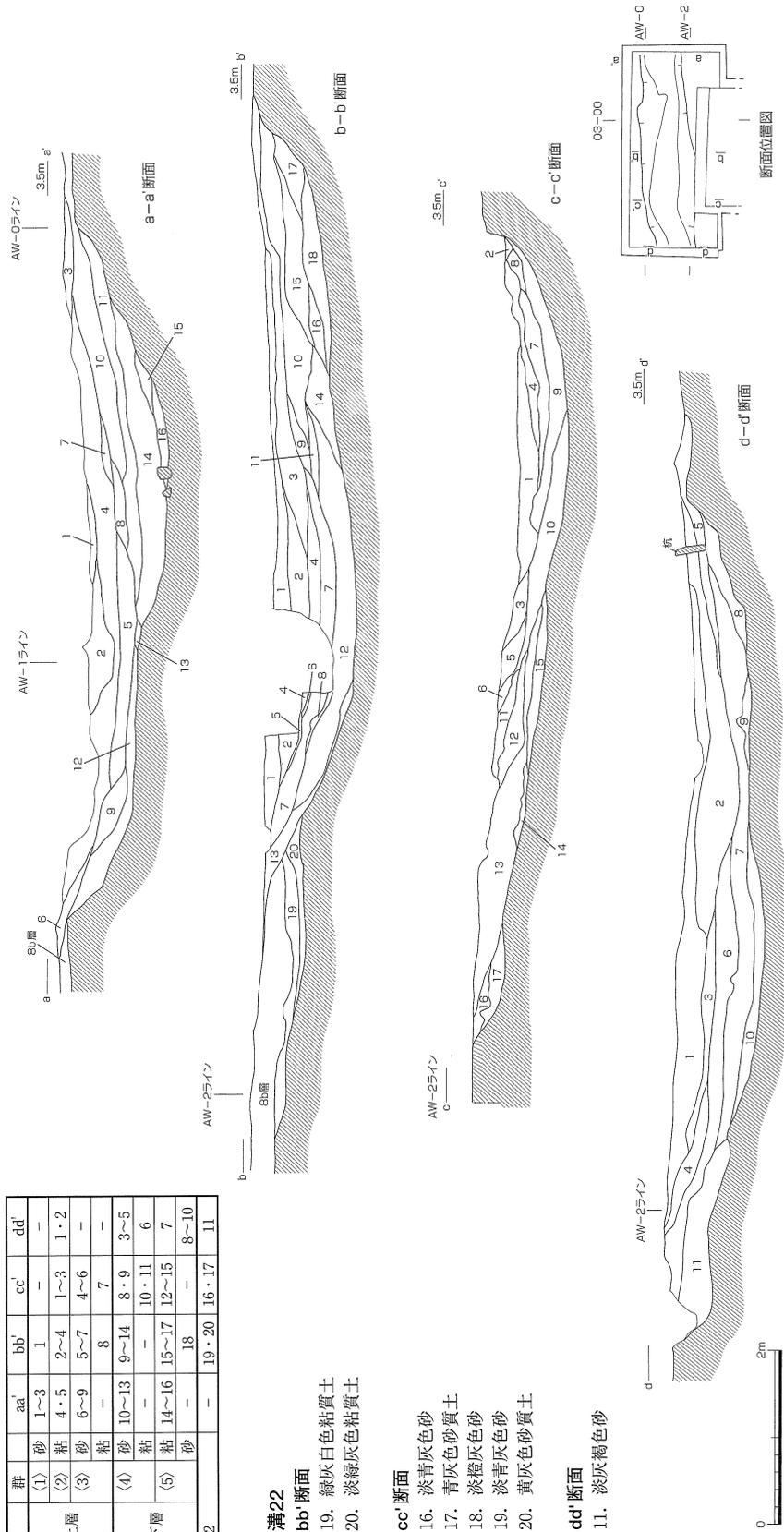
- 19. 緑灰白色粘質土
- 20. 淡緑灰色粘質土

cc'断面

- 16. 淡青灰色砂
- 17. 青灰色砂質土
- 18. 淡橙灰色砂
- 19. 淡青灰色砂
- 20. 黄灰色砂質土

dd'断面

- 11. 淡灰褐色砂



溝21

aa'断面

- 1. 暗燈褐色砂
- 2. 淡黄灰色砂
- 3. 暗黄灰色砂
- 4. 暗緑灰色粘質土
- 5. 淡灰色粘質土
- 6. 暗燈灰色砂
- 7. 暗黄灰色砂
- 8. 淡灰色砂
- 9. 淡灰白色砂
- 10. 淡灰褐色砂
- 11. 淡褐色砂
- 12. 淡黄灰褐色砂
- 13. 淡灰褐色砂
- 14. 淡灰色砂
- 15. 灰白色砂
- 16. 暗燈灰色砂

bb'断面

- 1. 暗灰褐色砂
- 2. 暗青灰色粘質土
- 3. 灰色粘質土
- 4. 淡青灰色粘質土
- 5. 淡青灰色砂
- 6. 暗燈灰色砂
- 7. 暗燈灰色砂
- 8. 淡灰色粘質土
- 9. 暗灰白色砂
- 10. 淡灰黄白色砂
- 11. 黄灰色細砂
- 12. 暗灰色粗砂
- 13. 暗緑灰色砂
- 14. 青灰色砂
- 15. 暗灰褐色粘質土
- 16. 暗灰褐色粘質土
- 17. 暗灰色弱粘質土
- 18. 暗燈褐色砂

cc'断面

- 1. 暗緑灰色粘質土
- 2. 暗青灰色粘質土
- 3. 淡灰色粘質土
- 4. 暗灰色砂
- 5. 淡灰色砂
- 6. 淡青灰色砂
- 7. 暗灰褐色粘質土
- 8. 青灰色砂
- 9. 暗灰褐色砂
- 10. 暗灰色粘質土
- 11. 暗青灰色粘質土
- 12. 淡灰白色粘質土
- 13. 淡灰白色粘質土
- 14. 淡灰色粘質土
- 15. 暗灰色粘質土

dd'断面

- 1. 暗灰色粘質土
- 2. 暗灰褐色粘質土
- 3. 淡灰白色砂
- 4. 淡灰色砂
- 5. 灰色砂
- 6. 暗灰色粘質土
- 7. 灰褐色粘質土
- 8. 灰色砂
- 9. 灰色砂
- 10. 暗灰色砂

図175 溝21・22 (縮尺1/80)

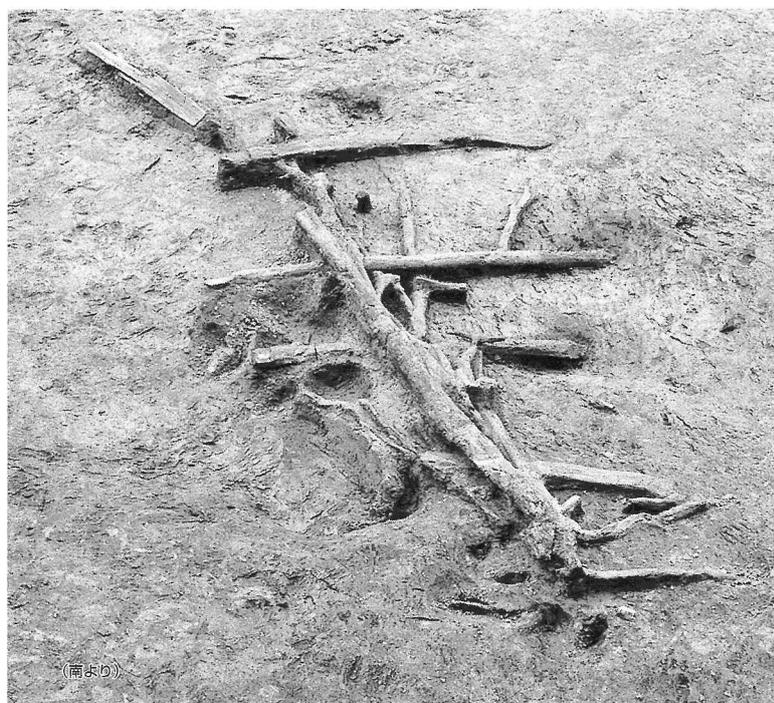
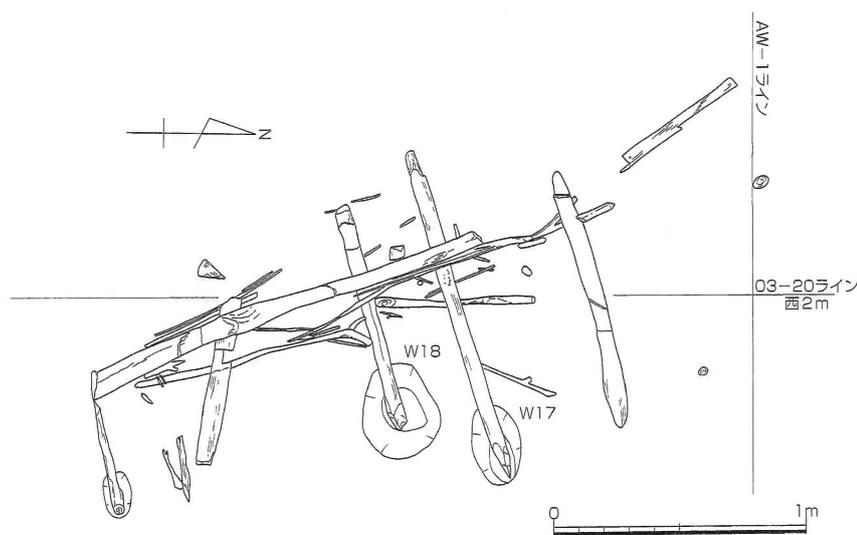


図176 堰状遺構 (縮尺1/30)

沿うように東西方向の杭列が認められ溝23bとの関係も考えられる。また底が一部たわみのように深まる部分の北側に南北方向の杭群がある。b群も流れに直交する配列であり、a群と一連で東からの流れを堰き止めるとの可能性がある。西端部では10点余の杭が検出された(d群)。数が少なく列のまとまりを見いだすのは困難であったが、南側の傾斜面に、東西方向のまとまりを認めることができる。これらの杭の下端のレベルは標高1.0~2.4mとばらつきがあるが、杭群の位置は断面の観察から〈4〉〈5〉群の堆積域に合致していることから、下層溝に伴う可能性が高いと考えられる。ただし杭の性格上確定は難しく、上層溝の段階にも機能していたことも推測される。

また03-20ライン~03-30ライン間にあたる下層溝の南側斜面で杭・木材を組み合わせた堰状遺構を検出した(図176)。〈5〉群の底面にあたる検出レベルは標高2.3m、底面の標高は2.9mである。南北方向に並ぶ杭に横木をかけるという構造で、杭の数は現存5本と痕跡3本が確認されている。東からの流れによって倒れた状態で検出された。使用段階の状態を保っているものと考

え、杭を立て、横木のかかる位置を復元すると、標高3.2mにあたる。この高さまでは水流があった時期もあるものと考えられる。古代面で検出されている水田面のレベルは標高3.15~3.2mである。横木をかけて、隙間を木材や枝等で充填していたものと考えられ、検出時には木葉や細かい雑木も認められた。堰状遺構の位置は、フラットに近い緩斜面にあたり、常に水流のある地点とは考えにくいことから、機能としては、堰とは別の用途を考える必要がある。

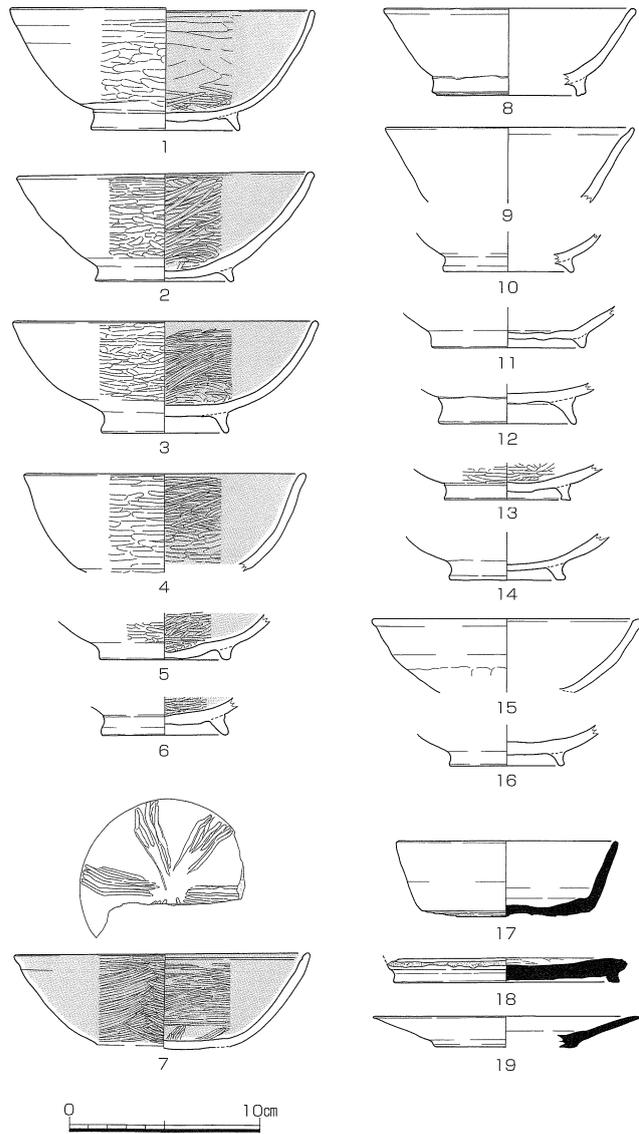
本溝からは土器類がコンテナ3箱分出土した。その他に石器・土製品・木製品・鉄滓も出土している。以下に、種類ごとの概要を述べることにする。本溝の機能していた時期は平安時代、10世紀後半~末と考えられる。

土器 (図177・178 図版20)

土器の出土量は28リットルコンテナで3箱分、3,400点余であった。その内訳は全体の80%強を土師質土器が

占め、次いで弥生土器8%、須恵質土器6%、縄文土器6%という構成であった。これらのうち、明らかに遊離している遺物を除き、本溝の時期に関わる遺物について45点の土器を図177・178に図示した。

黒色土器（1～7）は、いずれも均質で細かい胎土を使用した椀である。1～6は黒色土器A類（いわゆる「内黒」）である。外面の色調は、白色系（1・3～5）と褐色系（2・6）とが認められる。特に1では、外面が見事な白色に発色している。また、器壁が非常に薄く均質である点や内外面の篋磨きの幅は広く、特に内面は平滑であり、黒銀色に光沢を放つ状態に仕上げられている点などに、他とは明瞭に区別される良質な仕上がりを示す。ただし、見込み部分の篋磨きの幅は狭く、磨き残し部分も認められる。器形は、大振りな深い椀形態を示し、高台も径が大きく強く引き出されて形成されている。2は褐色系の色調を示す。やや軟質感があり、外面の凹凸を残す傾向がやや強い椀である。やはり、見込み部分の篋磨きは希薄でその多くが磨き残されている。3は、その外面がやや黄色かかった白色を呈する椀である。篋磨きと焼き上がり感から硬質な印象が強く、高台は強く引き出されるなどの特徴を見せる。口径



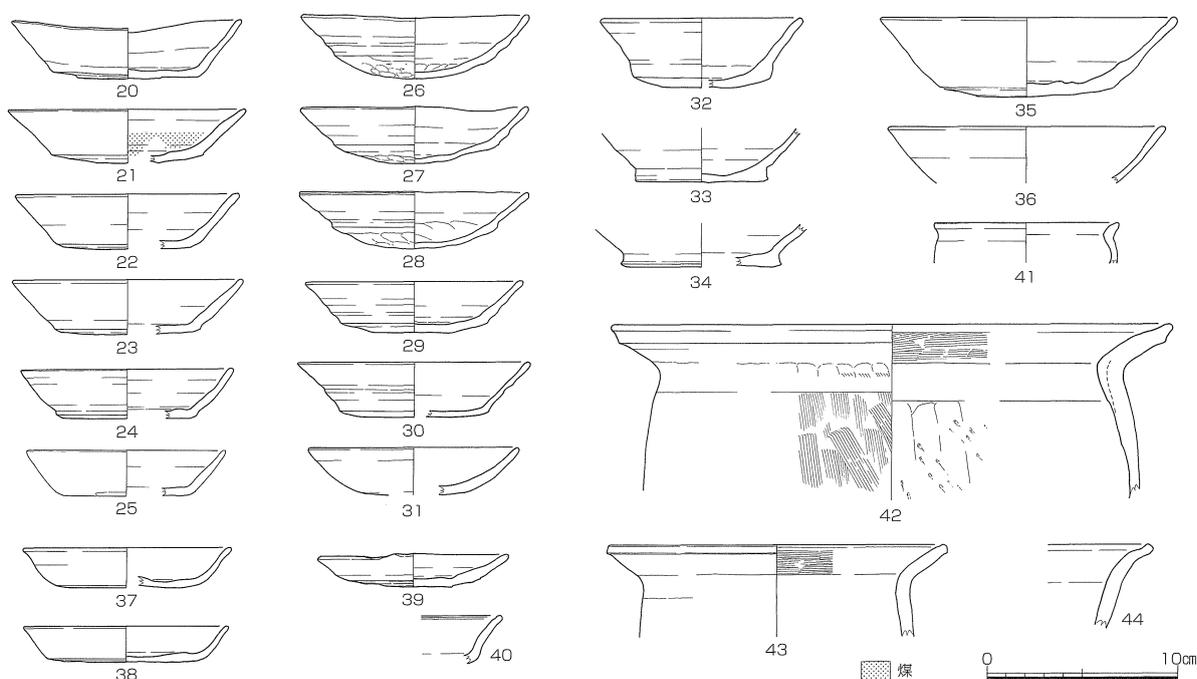
番号	器種	法量(cm)			形態・手法ほか	色調(外/内)	胎土
		口径	底径	器高			
1	黒色土器・椀	16.3	7.8	6.3-6.5	薄手で全体に浅い磨き。(外) 下半に凹凸少し・底部ナデ。(内) 光沢・一部に磨き残し。2/3残存	白/黒	微砂、精良・均質
2	黒色土器・椀	15.6	7.3	5.5-5.8	やや厚手。内外面磨き密。軟質感あり。(外) 凹凸残す・底部ナデ。(内) 少し光沢有り。1/3残存	黄褐/黒	微砂、均質・細かい
3	黒色土器・椀	16.0	6.7	5.9	丁寧な仕上げで表面は硬質感。見込み部の磨きは隙間多い。(外) 凹凸少し・底部ナデ。1/3残存	淡黄白/黒	微砂、均質・細かい
4	黒色土器・椀	14.8	—	—	内外面磨き。外面磨きはやや浅く幅広め・磨き残しもあり。1/5残存	淡茶白/黒	微砂、均質・細かい
5	黒色土器・椀	—	6.9	—	内外面磨き。見込み部は磨き残し多い。(外) 高台部内押圧+ナデ。1/2残存	淡灰/黒	微砂、均質・細かい
6	黒色土器・椀	—	6.8	—	(外) 底部未調整的な凹凸残る。(内) 浅い磨き	淡黄褐/黒	微砂、均質・細かい
7	黒色土器・椀	15.6	—	—	(体部) 磨き密・光沢。(口) 沈線残存。見込み部にナデ後放射状磨き6ヶ所。底部外面はナデ。2/3残存	黒/黒	微砂、均質・細かい
8	土師器・椀	13.2	8.0	4.6	横ナデ。内面～高台外面まで赤色顔料残存し、明橙褐色を呈する。1/6～1/10残存	淡灰白	微砂、粗砂少
9	土師器・椀	13.0	—	—	横ナデ。1/6残存	淡黄茶白	水漉粘土・均質
10	土師器・椀	—	6.9	—	丁寧なナデ(磨きの可能性残る)。内面に赤色顔料若干残存。1/3残存	暗灰褐/明黄灰褐	水漉粘土・均質
11	土師器・椀	—	8.0	—	丁寧なナデ。底部中央は押圧。内面に赤色顔料(明赤褐色化)、1/3残存	淡黄灰白/黄褐	微砂、均質・角閃石
12	土師器・椀	—	7.2	—	ナデ。3/4残存	赤褐	微～粗砂
13	土師質土器・椀	—	6.7	—	(体部) 内外面磨き・密。(底部) 篋切り後ナデ、硬質感、1/4残存	白/淡灰白	微砂少
14	土師質土器・椀	—	6.0	—	ナデ(外面摩滅進行)。軟質感。1/3残存	白	微砂、細かい
15	土師質土器・椀	14.2	—	—	ナデ。体部下半は押圧痕少し。軟質。1/2残存	白	微砂、粗砂少、細
16	土師質土器・椀	—	6.0	—	摩滅。1/3+1/2残存。軟質	白	微砂、粗砂少、細
17	須恵器・杯	11.6	8.8	4.0	横ナデ。底部篋切り。1/3～1/8残存。内面の一部に墨?の痕跡	淡灰	微～細砂
18	須恵器・硯	—	11.9	—	高台付杯を打ち欠いた転用硯。(底) 篋切り後ナデ・墨書残る。(内) ナデ・薄く墨	淡灰/淡黒灰	微砂少
19	須恵器・硯	14.0	7.4	1.7	転用硯。ナデ。内面に墨付着。1/4残存	淡青灰	緻密

図177 溝21出土遺物1 (縮尺1/4)

調査の記録

の大きさの割に椀部はやや浅い。4は褐色かかった白色を呈し、若干小形の口径を示す。7は内外面黒色の黒色土器B類である。口縁部には浅い沈線がかすかに残存する。非常に細かい篋磨きが内外面に施され光沢をもつ。見込み部分には、篋磨きの集積によって構成された幅1.5cm程度の暗文状の文様帯が6ヵ所、放射状に配される。外面の磨きは3分割されて施されている可能性が考えられる。高台部は剥離している。全体の特徴から楠葉窯の黒色土器と評価される。

内外面が白色の色調を呈する一群である土師質土器椀（13～16）は、本地域では、中世的な土器様相の代表的な椀として報告される。15・16に関しては、その形態や特徴から13世紀初頭～前半代の時期が想定される。しかし、13・14については、高台の断面形態が方形を示しており定型化以前の可能性を有する点、さらに13では内外面に篋磨きが密に施され、硬質感が強く窺われる点から、少なくとも13は黒色土器と共存してもさほど矛盾はな



番号	器種	法量 (cm)			形態・手法ほか	色調 (外/内)	胎土
		口径	底径	器高			
20	土師器・杯	12.1	7.8	3.1	横ナデ。底部外面篋切り・押圧。ロクロ回転左。赤色顔料全面塗布 (赤橙色化)	黄褐	微砂、細砂少、細
21	土師器・杯	12.5	8.0	2.9	強い横ナデ。底部篋切り。内面下半に墨付着。1/5 残存	明橙	微砂
22	土師器・杯	11.8	7.4	2.9	横ナデ。底部篋切り後ナデ。内面赤色化の可能性有り。1/4 残存	黄灰褐～淡橙褐	微砂、角閃石多
23	土師器・杯	12.2	7.7	2.9	強い横ナデ。底部篋切り後ナデ。内面赤色化。1/4 残存	淡橙～淡黄灰褐	微砂
24	土師器・杯	11.2	7.4	2.6	横ナデ。底部篋切り。内面一部に煤付着。1/6 残存	暗灰褐～淡灰褐	微砂、角閃石少
25	土師器・杯	10.5	6.6	2.4	横ナデ。底部ナデ。1/4 残存	橙～淡黄灰白	微砂、金雲母
26	土師器・杯	12.0	8.5	3.4	(体) 強い横ナデ (底) 外面篋切り後押圧・内面押圧。煤内外面に点在。硬質感。3/4 残存。歪み	淡明橙～淡黄白	微砂、細砂少
27	土師器・杯	12.0	8.7	3.0	強い横ナデ。底部外面は篋切り後押圧+押圧。口縁内面に煤付着。硬質感。3/4 残。歪み	淡黄白橙～淡橙白	微砂、細砂少
28	土師器・杯	12.0	8.6	3.0	(体) 強い横ナデ (底) 篋切り後? 押圧・ナデ。内外面に煤点在。硬質感。1/4 残存。歪み	明橙褐	微砂、細砂少
29	土師器・杯	11.4	7.7	2.7	(体) 強い横ナデ (底) 外面篋切り後ナデ+中央内外押圧・ナデ。内面に煤点在。1/6 残存	橙褐	微砂、細砂少
30	土師器・杯	12.1	7.8	2.9	(体) 強い横ナデ (底) 篋切り。内面～体部外面に赤色顔料。1/3 残存	(底外) 淡灰白 (他) 明橙	微砂
31	土師器・杯	11	5.3	2.5	口縁～内面横ナデ。外面押圧後ナデ。底部ナデ。	淡黄灰褐	微砂、細かい
32	土師器・杯	10.6	7.3	3.7	横ナデ。底部篋切り。ロクロ回転左?。内面一部に煤。1/2～1/8 残存	灰褐～橙灰褐	微～細砂
33	土師器・杯	—	7.0	—	外面横ナデ、底部篋切り、内面横ナデ後押圧・ナデ。ロクロ回転左?	淡橙褐	微砂
34	土師器・杯	—	8.4	—	横ナデ、底部篋切り・板目痕。1/4 残存	淡黄灰褐	微砂
35	土師器・杯	15～15.6	9.0	4～4.3	強い横ナデ。底部篋切り・板目痕。底部内面仕上げナデ。ロクロ回転左。1/4 残存	明赤橙	細砂、細塵、赤色粒
36	土師器・杯	14.6	—	—	横ナデ。1/3 残存	淡明橙	微砂、赤色粒少
37	土師器・皿	10.8	8.2	1.9	横ナデ。底部篋切り。ロクロ回転左。硬質感。1/3 残存	淡黄灰白～淡橙	微～細砂、赤色粒
38	土師器・皿	11.0	7.5	2.0	横ナデ。底部篋切り後ナデ。内面仕上げナデ。1/3 残存	淡黄灰褐	微砂、均質
39	土師器・皿	9.6-10	6.8	1.8	強い横ナデ。底部篋切り。内面仕上げナデ。口縁1ヶ所摘み痕。ロクロ回転左	淡黄橙灰白	細砂
40	土師器・皿	—	—	—	横ナデ。底部は篋切り後ナデ。内面の沈線は不明瞭、全面に赤色顔料残存し橙色化	淡灰白	微砂、均質、細かい
41	土師器・鉢	9.7	—	—	横ナデ。1/4 残存	明橙	微砂、均質
42	土師器・甕	30.0	—	—	(外) 体部刷毛・頸部押圧・口縁横ナデ。(内) 口縁刷毛・体部削り後ナデ。1/4 残存。外面煤付着	暗茶褐色	細砂、細塵僅少
43	土師器・甕	17.7	—	—	(外) 体部被熱剥離・口縁横ナデ。(内) 口縁刷毛目・体部丁寧ナデ。1/5 残存。外面被熱剥離	赤橙褐/暗橙褐	細～粗砂・角閃石多
44	土師器・鉢	—	—	—	ナデ	明黄褐	細砂、赤色粒

図178 溝21出土物2 (縮尺1/4)

いように思われる。

土師器は、椀（8～12）・杯（20～36）・皿（37～40）・鉢（41・44）・甕（42・43）があげられる。ここでの皿の区分は器高が2cm以下を基準としている。

椀は、そのほとんどが小片で数も少ない。口径が計測可能なものはわずかであるが、黒色土器よりは小振りな椀部形態が復元される。ただし、高台径では違いを見せない。調整は丁寧なナデを基本とし、須恵器の形態を模した特徴を示すもの（8・9）を含む。胎土は、水漉し粘土のように細かいもの（9・10）、角閃石を含むもの（11）、粗砂を含むもの（12）などが確認される。9・10は白っぽい褐色系の色調を示す点でも他とは異なっている。11では内面に赤色顔料の塗布が確認される。この中で、8は胎土・色調・赤色顔料の状況などが皿（40）と共通しており、高台形態などからも、他の遺物よりは古い時期（9世紀後半代）が想定される。

杯は、その法量から2タイプに大別される。点数が多く出土土器の中で中心を占める口径10cm前後～12cm前後の小形のもの（20～34）と、数は少量であるが口径が15cm前後を測る大形のもの（35・36）である。さらに、小形の杯は、底部の成形状況から、20～30と32～34とに大別される。

20～30は体部ラインが直線的で器壁はやや厚手のタイプ（20～25）と体部ラインが横ナデによって強く波打つ状態を示し器壁の厚さが非常に薄いタイプ（26～30）とに細分が可能である。前者では、底部は篋切りと軽いナデ仕上げにより平坦に形成されている。20・23では赤色顔料が確実に塗布されている。煤の付着は決して多くはないが、21には内部下半に広く残存し、24でも底部内面である。後者は、底部径が比較的大きく、底部が篋切り後の押圧によって丸く押し出された形態が特徴となっている（26～28）。そのため、篋切りが中心に及んでいたかどうかは確認できない。29は底部の押圧が不十分な状態を見せる。そのため、器壁もやや厚さを残しているが、基本的には他と同じと考えられる。いずれも、口縁部周辺の内外面に煤がタール状となって付着する。点在する部分も多い。30は、底部の押圧による丸底を示さない点で異なる。底部は中心まで達した篋切りの上を軽くなで、平坦な形態を作り出している。また、赤色顔料の塗布が底部外面以外に施される。このように、前者の一群とは多くの点で違いを指摘することができる。また、時期差か工人差かはさておき、同タイプに含めたなかでもさらに細分されることが窺われる。

一方、32～34は、底部の成形が円盤高台状を呈する点で他と区別される。底部は篋切りが中心まで及ぶ。体部は直線的ラインを見せ、器壁の厚さはやや厚めである。32では底部内面に煤が付着する。褐色系の胎土で、赤色顔料は確認されない。こうした特徴からは、赤色顔料の点以外では20などの一群と共通点が多いことが読み取れる。24の底部付近を観察すると、非常に小さいものではあるが、円盤高台状の立ち上がりを見取することができる点も注意しておきたい。

その他に、これらに属さないものとして31がある。底部はナデによって丸みを持った形状に成形されている。底部はかすかに確認される程度で、口縁部にいたるプロポーシオンは他とは明瞭な違いを示す。また、大形の杯（35）では、底部は篋切りで成形され、赤色顔料は確認されない。この形態は中世の杯に近似しており、時期の確定に躊躇するが、全体の中で新しい傾向を有するものとして評価しておきたい。皿（37～39）は、いずれも底部篋切りで赤色顔料は確認されない。その形状から37・38と39に分類される。前者は小形の杯と共通した形態を示すが、胎土や色調には明瞭な違いを示す。後者については、口径が10cmを、底部径も7cmを切るなど、他よりは明確に小形化している。体部ラインも大きく開くなど、中世の小皿の形態に近似しており、新しい傾向を認めることができる。その他に、40は土師器椀（8）と共通した胎土・色調を示し、赤色顔料も内外面に塗布される。口縁部内面には沈線がわずかに確認され、その形態からも同様に古い所属時期が想定される。

須恵器では、転用硯の出土が注目される。転用硯（18）は、高台付き杯の体部を打ち欠いたものである。内面には墨が薄く残存し、使用痕が確認される。高台内には墨書状の痕跡とわずかに磨り跡が残る。19は皿の転用である。非常に緻密な胎土が使用されている。内面には墨が付着する。

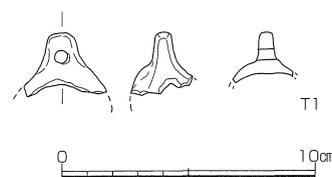
これらの遺物の所属時期は、それぞれの特徴からは、全体としては平安時代後半、10世紀後半～11世紀初頭に属する土器群と判断される。また、土師器あるいは黒色土器の生産に関しては、複数の工人の存在を窺うことができる点を指摘しておきたい。

その他に、須恵器杯（17）については、前述した土師器椀（8）あるいは土師器皿（37）と共に平安時代前半に属すると考えられる。同時期の遺物が、小片ではあるが様々な器種にわたって含まれていることから、溝の使用時期を、同時期にまで遡らせることもできるかもしれない。また、13世紀に属する土師質土器の存在は、本溝が最終的に埋没した時期を示す可能性が高い。

土製品（図179 図版21）

T1は土鈴の一部である。上部に穿孔があり、体部の下半は欠失している。

残存部の形状から中空になっていることがわかる。つくりは丁寧である。



番号	器種	法量 (cm)			形態・手法ほか	胎土・色調
		長さ	幅	厚さ		
T1	土鈴	2.0	3.2	2.2	丁寧なナデ、つまみ部の穿孔径0.5cm	細砂・淡褐灰/暗灰

図179 溝21出土遺物 3 土製品（縮尺1/3）

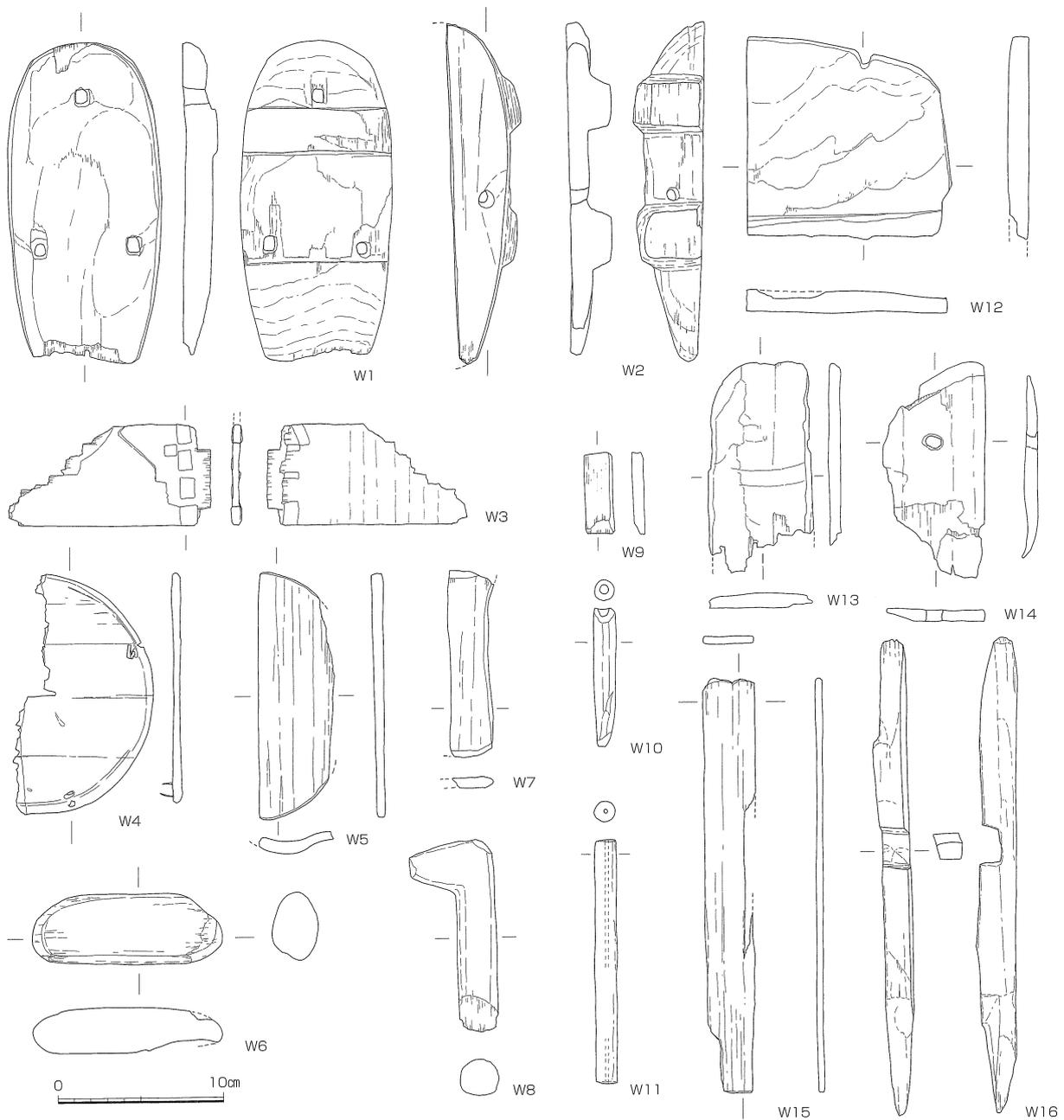
木製品（図180～182 図版29・30）

本溝から出土した木製品は総計220点余に及んだ。明らかな加工痕を確認できたものが102点である。その内訳は下駄・曲げ物といった製品を特定出来たものが7点、杭69点、部材・板材といったように加工痕は明らかであるが、明確な用途の特定には至らないものが29点である。このうち33点を掲載した。

W1・2は下駄である。W1は図の下端が欠損しているが、ほぼ全形がわかる。ヒノキ製である。表面は摩耗した部分から左足用であることがわかる。また歯もかなり摩耗しており、前側が1cm程残るのみで、後ろ側はほとんど原形をとどめていない。W2は右半分1/3程の破片であり、鼻緒の穴は1ヵ所認められる。スギ製である。歯は残りが良く、前後とも6～7cm程の高さで残っている。W1・2ともに長さは20cm前後であった。W3～5は曲げ物の一部である。W3は側板で綴じ部が残っている。スギ製である。W4・5は底板である。W4は約1/2が残っており、2ヵ所に側板と接合するための綴じ部が認められる。W5は約1/3が残っているが、歪んでいる。ヒノキを利用している。杭（W17～24・27・28・32）はほとんどが先端のみを加工し、その他は自然木のままとしているものである。先端加工は五面（W17）・八面（W18）・四面（W20）と比較的丁寧にカットしている。掲載したもののうちW18のみが、先端以外の部分にも若干の加工を施すものである。杭にはアカマツ、モミ属、ツガ属、コナラ属アカガシ亜属、マツ属、サカキの各種が利用されている。加工材としては、W12～14のように方形を呈する板状のもの、薄い短冊状のもの（W15・25・26・29～31）、角材状のもの（W33）等がある。このうちW12～14はその形状から鋤先などの農具の一部とも考えられる。短冊状のものうちW25は樹皮を利用したもので、図の上端に2ヵ所の綴じ部が認められる。曲げ物等によく見られるように樹皮を用いて、他の部材と綴じていたようであるが、全形・用途については不明である。その他にW6は平面楕円形状を呈し、浮子とも考えられるが、紐擦れ痕等は認められず、断定はできない。W7は柄の一部、8は把手の一部ではないかと考えられる。W10・11はいずれも穿孔のある管状を呈するが、用途・機能は不明である。W16は角材の先端を杭のようにカットし、中央部に方形の切り込み部を施している。切り込み部分の加工は大変丁寧である。用途・機能は不明である。元は何らかの部材であったものを、杭として再利用した可能性も考えられる。

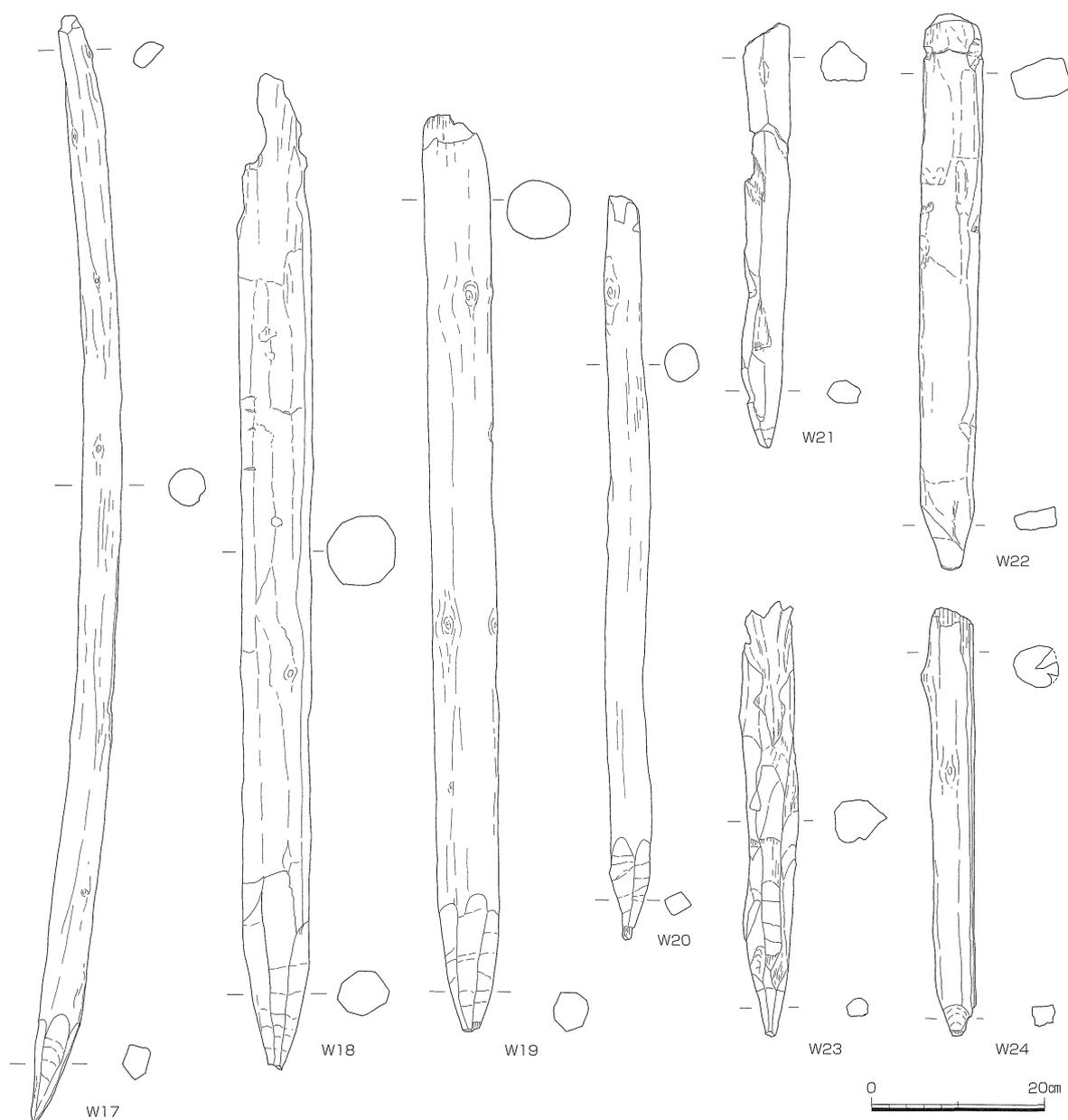
石器（図183・184 図版22～26・28）

石器は15点が出土した（図183、184）。石鎌（S307）はサヌカイト製で、先端部を欠損する。素材面を多く残す。左右の側縁で調整の単位が異なり、下縁も挟りを意図した剥離を両面から行なうが、挟りをつくり出せていない。平面形も左右非対称であり、製作途中で放棄された未成品である可能性が高い。スクレイパー（S308）



番号	器種	法量(cm)			形態・手法ほか	樹種
		長さ	幅	厚さ		
W1	下駄	19.6	9.3	1.9	丁寧な加工。使用による摩耗が顕著。後ろ側を欠損。	ヒノキ
W2	下駄	20.7	4.0	2.6	全形の1/3程の破片。図の下の方の歯は磨滅顕著。穿孔径0.7cm、丁寧	スギ
W3	曲げ物	6.2	12.2	0.2	曲げ物の合わせ目部。樹皮で綴じ合わせている。	スギ
W4	曲げ物	7.9	2.1	0.6	周縁の加工は丁寧。	—
W5	曲げ物	15.7	4.2	0.7	周縁の加工は丁寧。面取りも丁寧。横断面では湾曲。	ヒノキ
W6	加工木	11.5	4.3	2.8	用途不明。加工は丁寧。使用痕等は認められない。	ケヤキ
W7	柄	11.5	2.5	0.7	図の下端は炭化。全体に丁寧な加工。	ヒノキ
W8	加工木	11.8	5.1	2.4	把手状。全体に丁寧な加工。	カキノキ属
W9	加工木	4.9	1.7	0.7	小札状。欠損により全形不明	ヒノキ
W10	加工木	8.5	1.3	1.3	管状。径0.3~0.6cmの孔が貫通する。	ウツギ属
W11	加工木	14.9	1.3	1.3	管状。径0.2cmの孔が貫通する。	—
W12	農具?	12.1	12.5	1.6	図の上端に丸みをつける。使用痕あり。農具の一部か。	ツガ属
W13	加工板	13.3	6.2	0.7	0.75×1.0cmの方形穿孔あり。	ヒノキ
W14	加工板	12.9	6.2	0.8	図の上端、左側に加工。裏面には炭化した部分あり。	—
W15	板材	25.4	3.1	0.5	丁寧な加工。薄札状であるが、用途不明	ツガ属
W16	加工木	29.2	2.0	2.4	角材状。中央に2.5×1.9cmの挟りあり。	モミ属

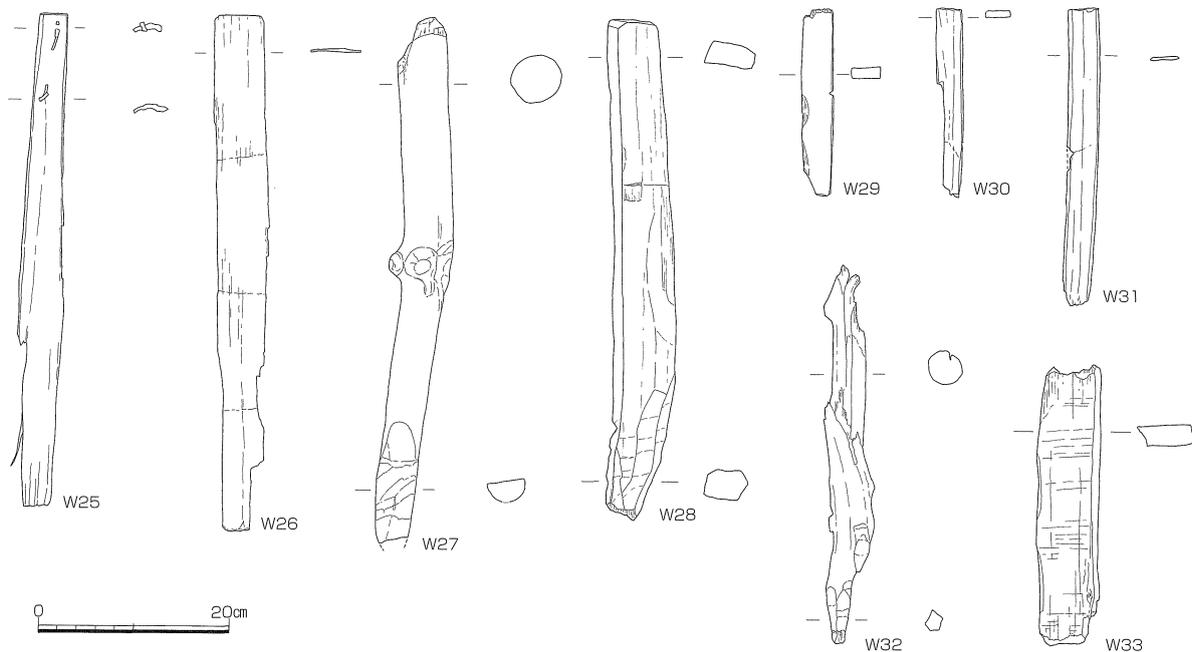
図180 溝21出土遺物4 木器 (縮尺1/4)



番号	器種	法量 (cm)			形態・手法ほか	樹種
		長さ	幅	厚さ		
W17	杭	130.0	4.5	-	下端部以外は未加工。下端断面は5面体	アカマツ
W18	杭	117.0	8.5	8.5	下端は断面8~9面体。全体に加工痕あり、断面11~12面体	モミ属
W19	杭	117.8	7.2	-	下端部以外は未加工。下端断面は7面体	モミ属
W20	杭	87.7	4.8	-	下端部以外は未加工。下端断面は4面体	ツガ属
W21	杭	51.6	5.1	4.6	芯持ち材の下端を加工。下端の断面は6面体	コナラ属アカガシ亜属
W22	杭	64.2	6.8	4.6	角材の下端に加工。先端は欠損。図の上端両側縁にわずかな抉りあり。	コナラ属アカガシ亜属
W23	杭	51.1	5.7	5.0	一部に樹皮残すが、全体に加工。下端は6面体。	マツ属複雑管束亜属
W24	杭	50.1	6.1	4.7	芯持ち材の下端のみ加工。	サカキ

図181 溝21出土遺物5 木器 (縮尺1/8)

は細粒砂岩製で扁平な素材の周縁全体に両面調整を施し、石包丁状に整形している。手になじむ形状となっており、下縁には内湾する弧状の厚い刃部をつくり出す。刃部に使用による摩滅などは認められない。先端部を一部欠損する。石鋏は4点出土した (S309・310・314・315)。いずれも細粒砂岩製である。S309は細長く厚みのある素材の周縁に調整を施す。両側縁は下辺に行くに従い直線状に開きながら刃部に続き、下縁は厚みのある弧状



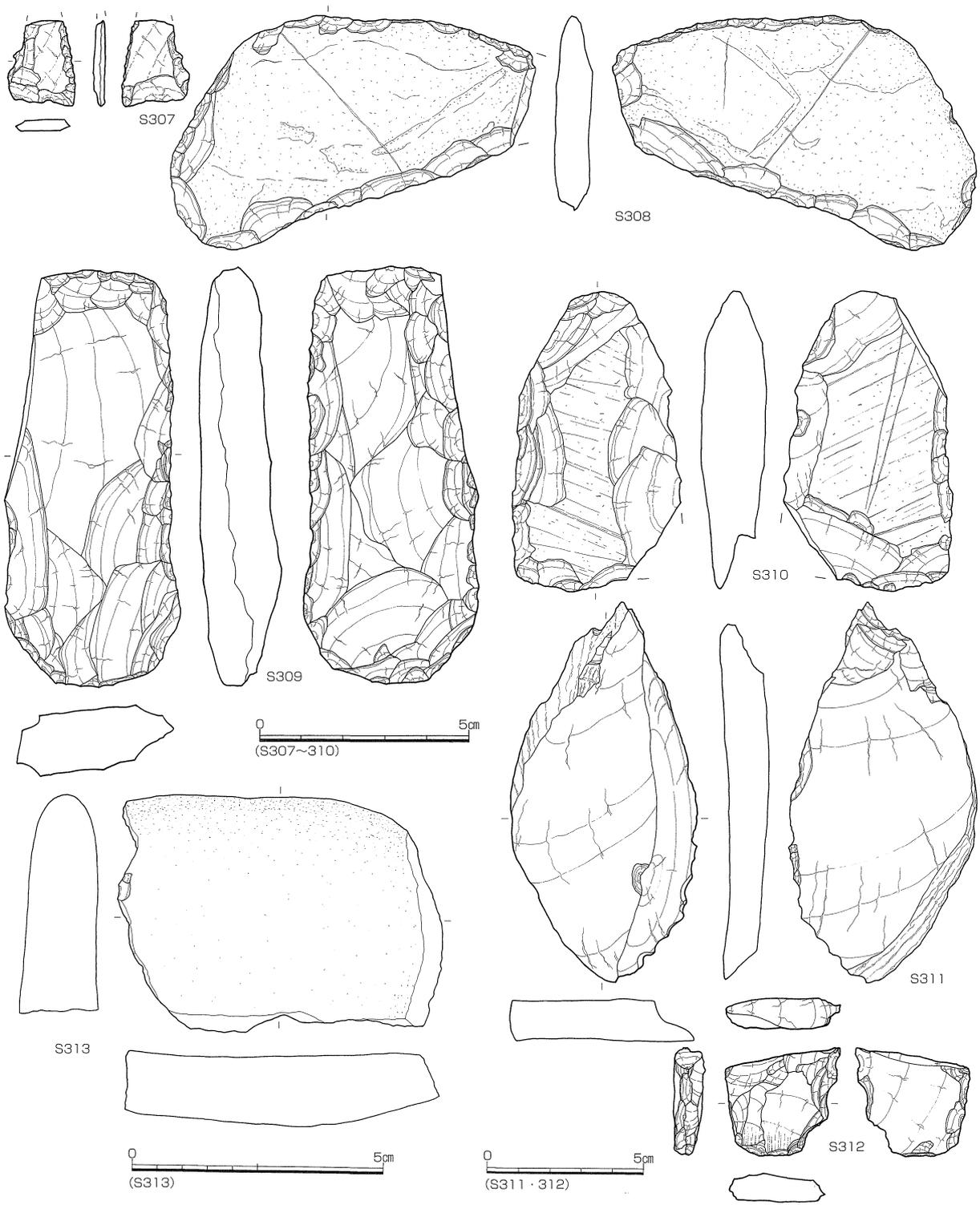
番号	器種	法量 (cm)			形態・手法ほか	樹種
		長さ	幅	厚さ		
W25	加工木	52.1	4.8	0.7	長条形の樹皮に二カ所に綴じ部。いずれも樹皮が残る。用途不明	—
W26	板材	54.5	5.2	0.4	側縁の加工が特に丁寧。用途不明	—
W27	杭	55.6	5.2	5.1	芯持ち材の下端のみ加工。	マツ属複雑管束亜属
W28	杭	53.2	6.6	3.2	角材の下端に加工。先端は欠損。	コナラ属アカガシ亜属
W29	加工木	20.0	3.1	1.2	加工丁寧。全形不明	スギ
W30	加工木	10.2	2.6	0.7	厚めの板状。全形・用途不明	樹皮
W31	板材	31.5	3.1	0.4	側縁の加工が特に丁寧。用途不明	—
W32	杭	40.0	4.8	3.5	芯持ち材の下端のみ加工。	モミ属
W33	板材	29.6	6.3	2.4	厚手の板材と考えられるが、欠損部多く、全形不明	スギ

図182 溝21出土遺物6 木器 (縮尺1/8)

の刃部がつくり出され、全体の重心は刃部側にある。上縁にも両面調整を施す。S310は小型品で、周縁を粗く両面調整を施す。S314は基部側1/2程度のみ残存するが、扁平な素材の両側縁に鈍く両面調整を施す。両側縁は下辺に行くにつれて直線状に開く。刃部は使用時に欠損した可能性もある。楔形石器 (S312) はサヌカイト製で、上下縁に階段状のつぶれた剥離を確認できる。一方で、左側縁付近には使用によると思われる摩滅部分と線条痕が残る。石鋏片を楔形石器として転用した可能性も考えられる。S311はサヌカイト製の縦長剥片である。右側面には自然面が残る。原礫から剥離された後にほとんど加工されていない。石皿 (S313) は流紋岩の扁平な礫を利用し、表面が全体的に摩滅し、その部分が緩やかに凹む。下縁と右側縁は折損するが、上縁付近は摩滅範囲が及んでおらず、整形のための折り面の可能性が高い。叩石 (S316) は泥岩製である。拳大の円礫を利用する。打ち叩く作業に適した形状、重さで、両主面や下端に敲打痕や線状痕が明瞭に残る。凹石 (S317) は風化の進んだ流紋岩の円礫を利用し、両面中央に1カ所ずつ凹みを有する。また下縁や側縁に敲打痕が広い範囲で観察できる。磨石は1点出土した (S318)。周縁を中心に全体的に摩滅する。石錘は3点出土した (S319~321)。いずれも円礫の長軸両端を両面から打ち欠いている。S320は大型品で左側縁の一部に敲打痕が残る。

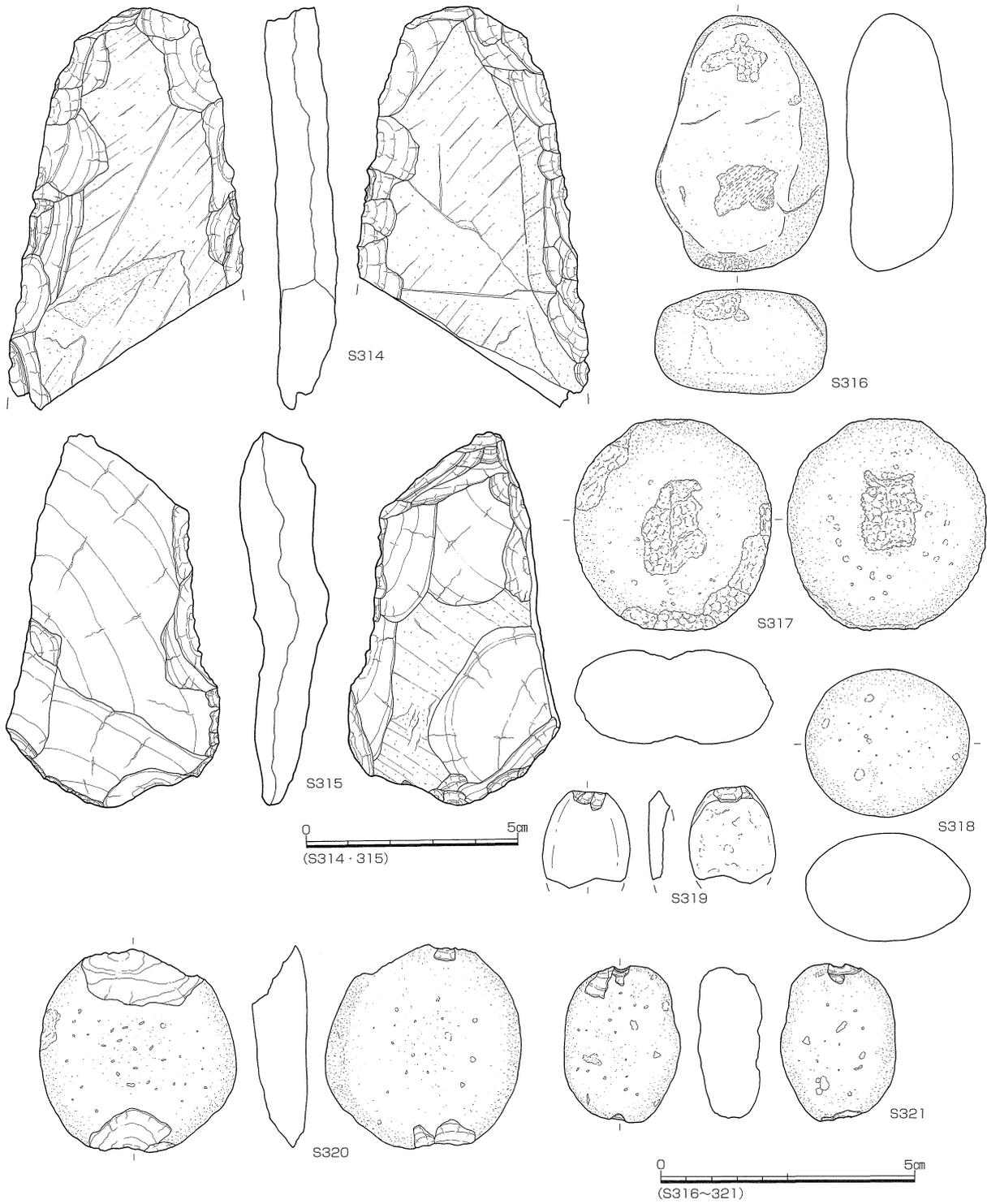
溝22 (図173~175)

溝22は9層上面からの溝で、溝21に北側の大半を削平されており、調査区内では平面形状の確認ができなかった。bb'断面の観察ではAW-2ライン付近を中心とする幅4m程の規模に復元できる。溝21の南肩に沿う方向で、残存部分の幅3.5m、深さ0.5mを測る。bb'断面19・20層、cc'断面16・17層、dd'断面11層部分が対応する。出土遺物はみられなかった。本溝の時期は確定が難しいが、溝21との関係から平安時代と考えられる。



番号	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石材	特徴
S307	石鏃未成品	(2.10)	1.65	0.30	(1.0)	サヌカイト	素材面を多く残す。右側縁に両面調整。
S308	スクレイパー	5.65	8.70	0.95	67.2	細粒砂岩	扁平素材の周縁に両面調整。石包丁状。
S309	石鏃	10.10	4.20	1.90	96.9	細粒砂岩	扁平素材の周縁に両面調整。
S310	石鏃	7.25	(4.05)	1.55	(59.2)	細粒砂岩	小型品。刃部一部を折損。
S311	剥片	12.30	5.98	1.65	118.5	サヌカイト	縦長剥片。原礫面を残す。
S312	楔形石器	3.50	3.65	0.95	13.7	サヌカイト	表面に摩滅範囲と線状痕。石鏃片の転用か？
S313	石皿	15.05	9.65	3.15	615.7	流紋岩	表面全体に摩滅範囲が観察できる。

図183 溝21出土遺物7 石器 (縮尺2/3・1/2・2/5)



番号	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石材	特徴
S314	石鋏	(9.60)	5.50	1.30	(89.8)	細粒砂岩	基部のみ残存。素材の周縁に両面調整。
S315	石鋏	8.95	5.00	2.15	82.4	細粒砂岩	扁平素材の周縁に両面調整。
S316	叩石	10.40	6.80	4.20	437.2	泥岩	拳大の円礫。表面と下端部に敲打痕。
S317	凹石	7.80	8.50	3.75	357.1	流紋岩	円礫両面中央に凹み。
S318	磨石	6.40	5.92	4.35	926.3	石英安山岩質凝灰岩	全体的に摩滅。
S319	石錘	(3.90)	(3.50)	(0.90)	(12.9)	流紋岩	裏面を欠損。上端に打ち欠き。
S320	石錘	8.20	7.70	2.15	188.2	流紋岩	扁平な礫の上下端に打ち欠き。
S321	石錘	6.30	4.60	2.50	97.3	流紋岩	円礫の上下端に打ち欠き。

図184 溝21出土遺物8 石器 (縮尺2/3・2/5)

溝23 (図173)

調査区の北端部で部分的に検出した溝で、西側を溝23a、東側を溝23bとして記述する。東側では9層上面、両側では9b層上面にあたり、検出レベルは標高3.2mである。埋土は前述の溝21下層溝の〈4〉群中の砂層と同じで、両者が併存していた可能性は高い。溝23aは03-20~60ライン間で溝21の北肩に沿って長さ約8m、幅1.8mを確認した。深さは9~19cmを測る。この溝の北東部に幅0.5m、深さ6cmの小溝がとりついており、東西方向の長さ4m程を検出している。底面レベルは、小溝の東端で3.18m、溝22の西端で2.94mを測り、東から西へ流れている。近似する状況は溝23b(02-70~90ライン間)でも認められ、東西方向部分(残存幅0.3m、長さ9m)と、その西側から南へ向かう幅広の溝(幅2.0~4.2m、長さ約2m)を確認している。この部分での底面レベルは東端で3.0m、南端で2.88mを測る。また02-80ラインと03-10ライン付近ではそれぞれで、西側が収束する溝状のくぼみ(幅0.8~1.5m、残存深度5cm程度)が認められる。これらも溝23と関連するものと考えられるが、全形は不明で確定はできない。また溝23aと溝21の杭d群、溝23bと杭c群という位置関係を考えると、溝23側から溝21への水流を制御する機能を想定でき、この点からも溝21・23の併存の可能性が高いと言える。出土遺物はなかったが、層位から平安時代と考えている。

b. 畦畔 (図173)

微高地部の畦畔は、8b層で検出したもので、標高3.3m前後を測る、約20面を確認し、畦畔の幅20~30cm、高さ3~5cmを測る。不確定な部分もあることから一区画は東西3.8~9.0m、南北2.4~9.6m、面積8.16~22.0㎡とばらつきがある。谷部では溝21の南北で、畦畔を検出している。検出レベルは標高3.2m前後、9層上面にあたる。北側の畦畔は前述の溝23aに伴い、この一画では9b層上面にあたる。03-30~50ライン間で幅0.3m、高さ2cmの畦畔を長さ3.5m程を検出した。これを切る形で03-20~30ライン間で幅0.9m、高さ3cmの畦畔を確認したが、この畦畔の西端は、前述の溝23のくぼみを取り巻くように南側に屈曲するようである。02-70~90ライン間でも幅0.5~1.0mの畦畔を検出し、ここでも溝状くぼみを取り巻くように西側で南に向けて屈曲している。また南側の、溝22に伴う東西方向の畦畔は長さ約8m、幅0.5m、高さ2cm程を検出した。

なお第17次調査地点の北東の一画(AW03-60・AW03-61区)では畦畔は認められなかった。この部分では、東西10m、南北5m程の範囲が若干たわんでおり、馬あるいは牛の蹄痕が多数認められた。このたわみも畦畔と同様、8a層の洪水砂で覆われている。ずぶずぶとした湿地状を呈したことを示すものと考えられる。

第7節 中世の遺構・遺物

中世の遺構は耕作に伴うものが大半である。7層上面では溝1条(溝24)とたわみ2を検出した。6層上面では溝1条(溝25)と溝25に伴う水口2ヵ所および畦畔と、調査区のほぼ全域に及ぶ耕作痕を検出した。

溝24は、それ以前の古代の溝21を踏襲していたものであり、中世後半、おおよそ14世紀代のうちに埋没する。その後溝25が掘削されるが、これは位置を南にずらし、AW-2ライン付近を走行するものである。溝25の掘削以降、近代まで、この位置の溝が坪境の溝として機能していくこととなる。中世末頃に、土地の区画整理を大規模に行ったことの傍証となるものであろう。同様の状況は、本遺跡第12次調査地点でも確認されており、溝25に対応する溝として溝32、溝24に対応するものとして溝31との関係が認められる。

a. 溝

溝24 (図185・186)

AW-1ライン付近を東西方向に走行し、8b層検出の古代の溝(溝21)を踏襲する形で構築されている。検出

面のレベルは標高3.2~3.4mで、7層上面にあたる。溝の残存幅は2.4~3.2mで、深さは最深部で45cmである。底面のレベルは東端で標高3.05m、西で2.9mであり、東から西へ流れている。

埋土は東側ではaa'断面にみられるように砂質が強いが、bb'断面以西では粘質を強める。bb'断面では暗灰~灰褐色系の粘質土を主体としている。このうち7層（淡灰褐色土）の堆積部分は幅0.4m、深さ約15cmの断面丸底を呈する小溝状を呈している。平面形では、03-20ラインの東から03-50ラインの西側までの間に長さ17m程の小溝として確認された。この小溝の機能については不確定であり、本溝に伴うかどうか確定はできないが、走行方向は一致していることから、本溝に伴う可能性がある。

遺物はコンテナ（約28リットル）1/2箱の土器・陶磁器片が出土した。中世後半のものと考えられる須恵器甕等の破片が認められるが、図化できるものはなかった。本溝の時期は中世後半と考えられる。

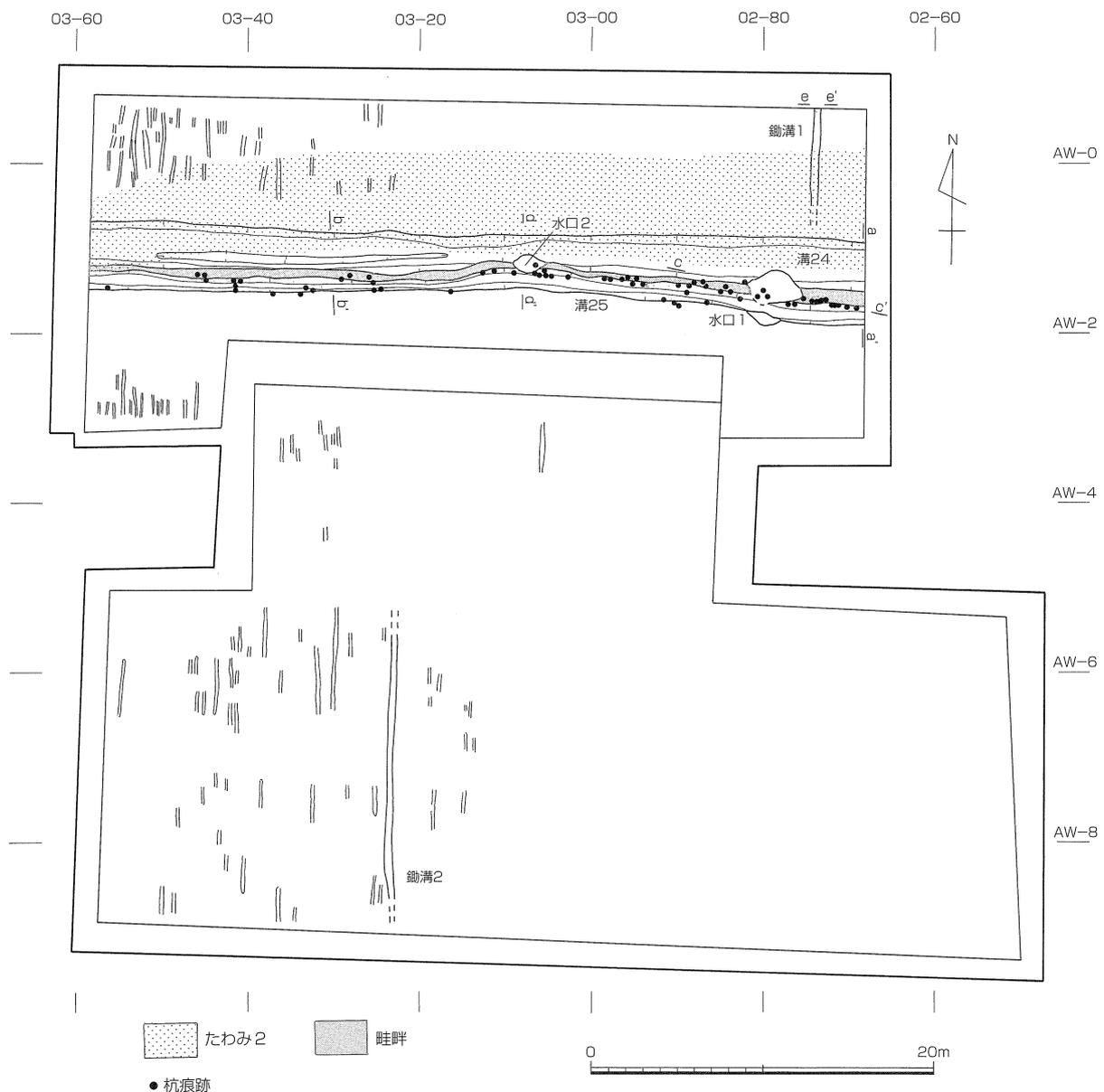


図185 中世遺構全体図（縮尺1/400）

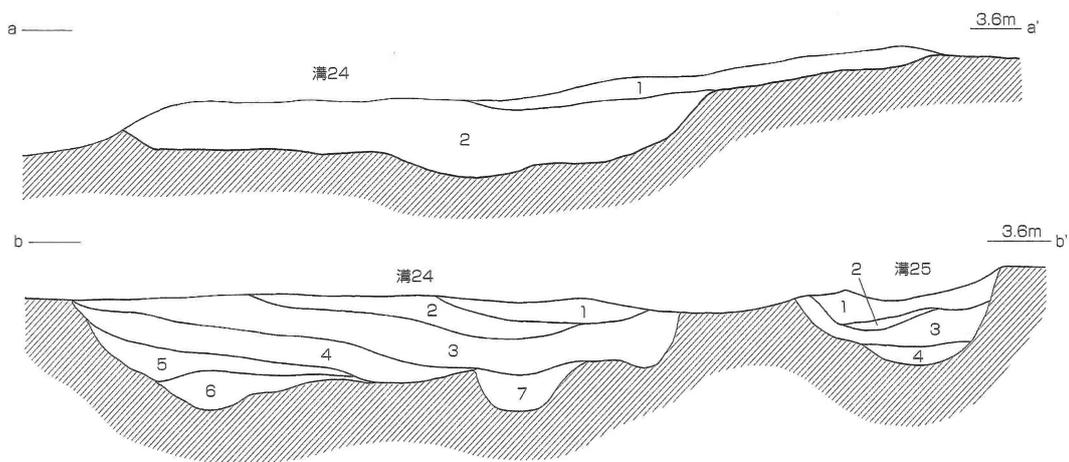
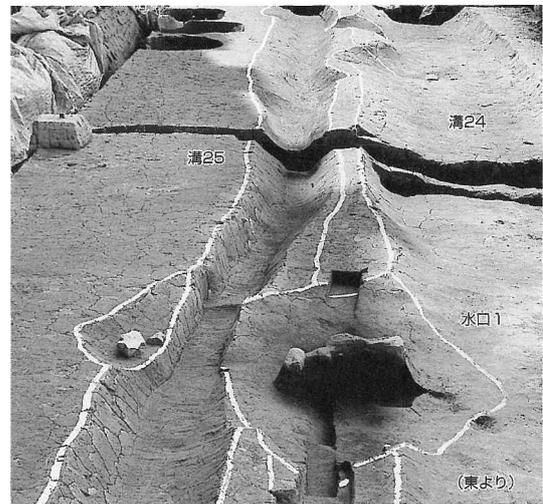
溝25 (図185~188)

溝24の南に位置し、AW-2ラインに沿って東西方向に走行するが、西に向かうにつれ、次第に北へ振れていく。検出面のレベルは標高3.4~3.5mで、6層上面にあたる。近世の溝(溝26)・近代の溝(溝27)が本溝を踏襲した形で重複しているため、上面はかなり削平を受けている。調査区東壁断面の観察から、本来は15cm程度は高かったことが窺える。検出できた部分で幅0.8~1.0m、深さ35~40cmを測る。底面のレベルは標高3.1m前後である。わずかに東高西低となっている。断面形は丸底に近い。埋土は灰色から灰褐色の砂質土が主体である。また底面では杭および杭の痕跡を確認した。検出位置からは溝の護岸的な用途が推測される。杭の性格上、本溝に確実に伴うものかどうかは不明確である。その位置が溝25の両脇に集中していることから、本溝との関係を考えてい。

出土遺物は少なく、陶器片、土師質土器碗等が見られる。時期としては中世後半と考えている。そのほかに石器1点が出土した(図188)。S322は砂岩(シルト岩)製砥石である。四面全てが摩滅し、中央面には線状痕が明瞭に残る。

本溝には2ヵ所に水口を確認している。水口1はAW02-82区で、水口2はAW03-21区で検出した。

〈水口1〉溝の南北2個で一対になっている。検出レベルは標高3.3~3.4mで、6層上面にあたる。北側では、長径3.0m、短径1.8mの不整形を呈し、最深部の深さ40cmを測る。底面のレベルは標高3.0mを測る。南側では長径2.0m、短径0.6mの不整形を呈し、最深部の深さは18cmである。底面のレベルは標高3.2mを測る。溝25底と比べると南側は10cm程高く、北側は10cm程低くなっていることから北側に向けて取水したことが伺える。埋土は、細礫や粗砂を多く包含する粘質土を下層に、上層に緑灰色砂質土が堆積する。また最上層の1層中には最大径約30cm~拳大の礫が認められたが、これは水口を塞ぐために据えられた可能



溝24

aa' 断面

- 1. 黄緑灰色砂質土
- 2. 淡橙褐色砂質土

bb' 断面

- 1. 暗緑灰褐色土
- 2. 暗灰褐色土
- 3. 淡灰褐色土
- 4. 暗灰色粘質土
- 5. 淡灰褐色土
- 6. 暗灰色土
- 7. 淡灰褐色土

溝25

- 1. 暗灰褐色土
- 2. 暗緑灰褐色砂質土
- 3. 灰褐色砂質土
- 4. 暗灰褐色砂質土



図186 溝24・25 (縮尺1/30)

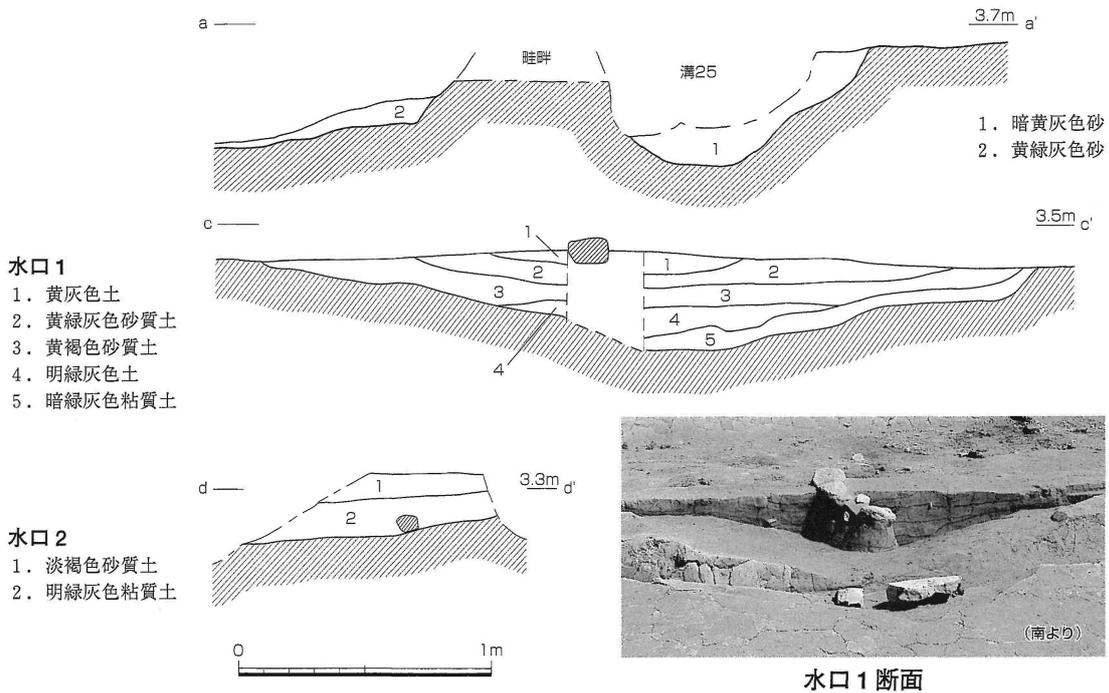
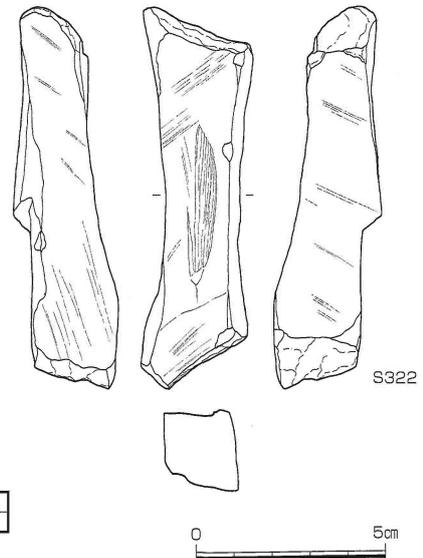


図187 溝25・畦畔、水口1・2 (縮尺1/30)

性も考えられる。

本来は溝25の両側に、東西方向の畦畔が存在していたものと想定されるため、この水口は溝25から水田面へ直接水を取り入れるための設備と考えられる。遺物はわずかに土師質土器の小片が認められた。
 <水口2> 水口1に比べても格段に残存状況が悪かった。検出レベルは標高3.35mである。長径1.8m、短径1.0mで、深さ25cmを測る。底面のレベルは北端で標高3.0mで、溝25底よりも10cm程低い。埋土は上層が褐色砂層、下層が緑灰色粘質土層の2枚からなる。機能としては水口1と同様の設備と考えられる。出土遺物は僅かに土器の小片が認められた。



番号	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石材	特徴
S322	砥石	10.15	2.90	2.15	88.1	泥岩(シルト岩)	四面全て使用。

図188 溝25出土遺物 (縮尺1/2)

b. たわみ

たわみ2 (図185・189)

7層上面で検出した。検出面の標高は東端で3.35m、西端で3.3m、底面の標高は東端で3.0m、西端で2.9mを測る。幅は東端約7m、西端で5m、深さは40cm前後である。古代溝(溝21)の上位にあたり、ほぼ東西方向である。埋土は淡橙褐色粘質土である。aa'断面にみられるように緩やかな皿状を呈しており、その点で溝24と共通する。ここではたわみとして記述したが、溝24と同様の形状の溝である可能性も考えられ、その場合、溝24との位置関係を考慮して、第12次調査地点の溝32に対応する可能性がある。

調査の記録

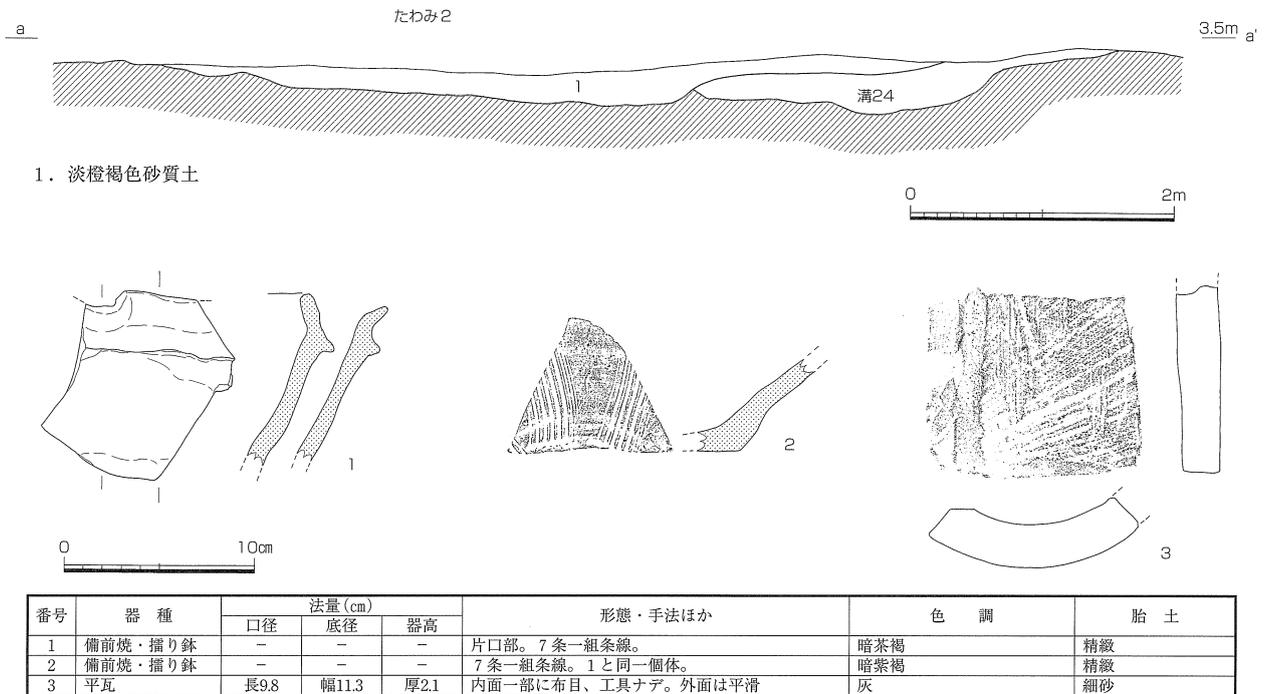


図189 たわみ2・出土遺物 (縮尺1/60・1/4)

たわみ2の出土遺物を図189に掲載した。1・2は備前焼の播り鉢である。3は平瓦であり傷みが多い。これらの遺物からたわみ2の埋没時期は14世紀代と考えられる。

c. 畦畔

溝25の北側に沿うように東西方向の畦畔を検出した(図185)。検出レベルは標高3.3mで、6層上面にあたる。畦畔の幅は0.4~0.6m、高さ10~15cmである。調査区東壁断面(図187)にみられるように、本畦畔に伴う耕作土と考えられる6層上面のレベルは畦畔の南北で比高差が認められ、南側では標高3.6m、北側では3.4m前後である。畦畔と溝25を境として南北で耕地に段差があったと考えられる。また本来は溝25の南側にも畦畔があったことは推測されるが、近世段階の耕作により削平されているものと考えられる。

d. 耕作痕 (図185・190)

第17次・第22次調査地点とも、西半分で南北方向の小溝群を検出している(図185)。検出レベルは北側で標高3.4m前後、南側では3.6m前後である。6層上面の検出である。幅10~20cm、長さは短いものでは20cm程度、長いもの(鋤溝1・2)で6~15mである。深さは2~5cmと浅い。これらの小溝群は耕作痕であり、鋤痕と考えられる。

鋤溝1(図190)は第22次調査地点の北東端部で検出した。南北方向の溝を調査区北壁から溝23の北側まで約6m確認した。6層上面で検出したもので、検出レベルは標高3.4m、底面の標高は3.32m前後で北側がわずかに低い。幅0.5m、深さ8~10cmである。溝24との切り合い関係は確認できなかった。出土遺物は見られなかったが、検出面の時期から本溝の時期は中世後半と考えられる。第17次調査地点の鋤溝2も同様の形状であった。

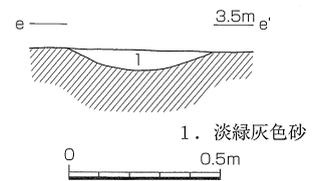


図190 鋤溝1 (縮尺1/30)

第8節 近世・近代の遺構・遺物

1. 近世

近世の遺構は、7層上面で土坑3基、5層上面で溝1条（溝26）・集石遺構・柱穴列と耕作痕、3層上面で土坑7基を検出した（図191）。このうち土坑については、検出面は中世層である7層を含む複数層に及んだが、いずれも本来は3層の遺構と評価される。溝26と集石遺構についても土層の状況から、3層の遺構であると判断される。ただし溝については前段階からの経緯や出土遺物の内容を含めて、5層段階にも溝が存在し機能していた可能性は高いものと考えている。

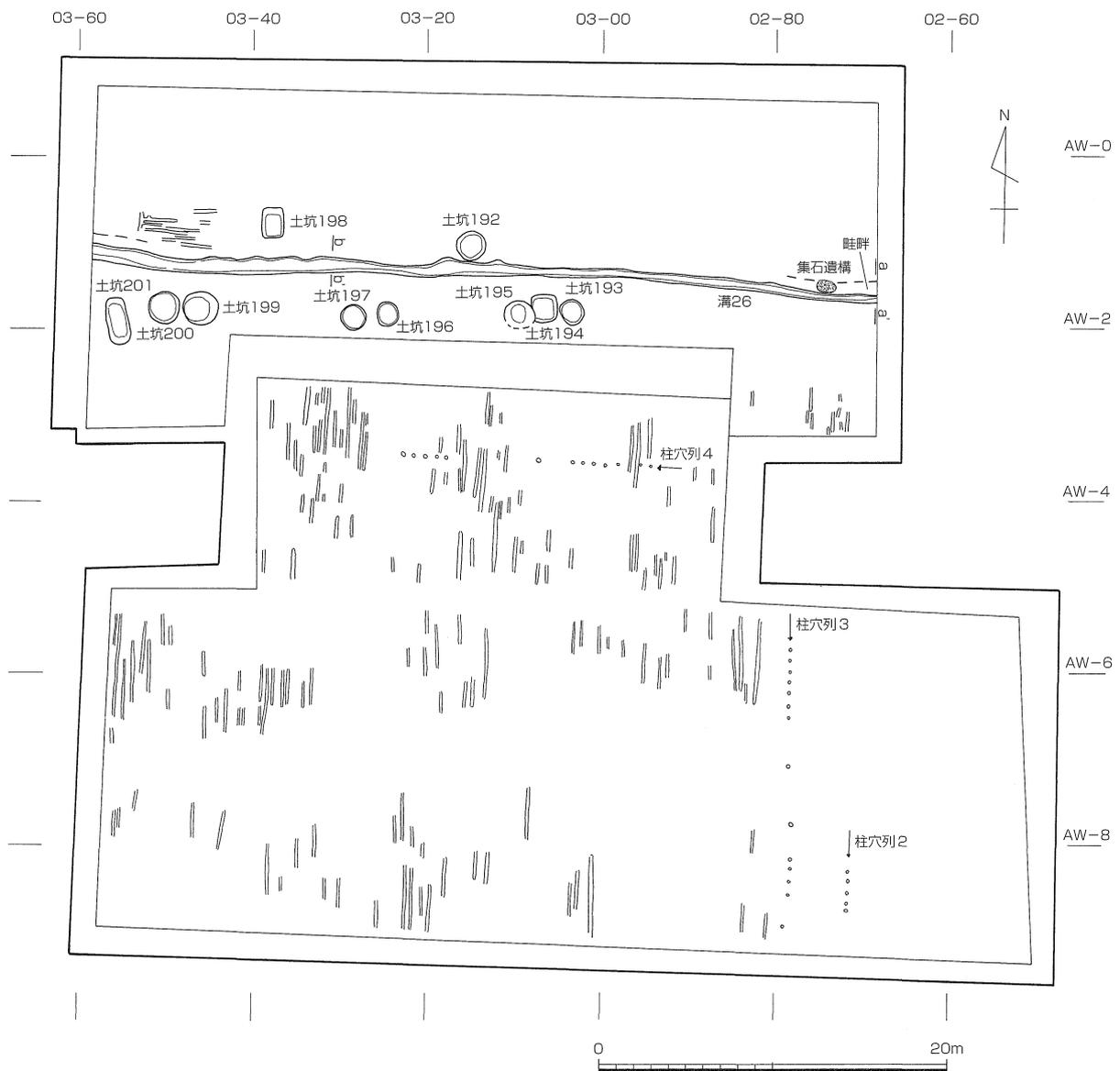


図191 近世遺構全体図（縮尺1/400）

このようにみえてくるとまず、5層段階に属する遺構である耕作痕は、溝より北側では東西方向、南側では南北方向の耕作痕としてとらえられる。検出面の標高は北側で3.55m、南側で3.7m前後である。これらの耕作痕は幅10cm程、深さ2～5cmの浅い小溝状であり、長さは0.5～4mとまちまちである。この形状は南北のいずれでも同様であることから、方向の違いは、耕作方法ではなく、区画の違いを示しているものと考えられる。また溝の南北で検出面のレベルに差異があることから、この溝を境として、中世段階と同様に耕地面に段があることが窺える。

次に3層段階の遺構は、東西方向の溝1条（溝26）と畦畔および集石遺構、溝に沿ってつくられる土坑10基、柱穴列である。土坑については、位置と形状から3群に分類できる。また3層上面の標高は、北側が標高3.6m、南側が標高3.8m前後と、溝を境とした南北の段差が、この段階でも認められる。

a. 土坑

土坑は10基を検出した。土坑192～195・197・199・200は3層上面で、土坑196・198・201は中世層である7層上面での検出である。平面形では円形のもの（土坑192・193・195～197・199・200）と方形に近いもの（土坑194・198・201）に分類される。位置では、溝26の北側に2基（土坑192・198）、南側に8基（土坑193～197・199～201）がつくられており、北側はAW-1ライン、南側はAW-2ライン上に並ぶ。南側の並びは溝26からほぼ1.5mの間隔を持っており、この部分が畦畔にあたるのであろう。北側については土坑198は同じく1.2m程の間隔を持つ。しかし土坑192は溝の北肩に接しており、土坑群の中では新しい時期の可能性が考えられる。

南側につくられる土坑のうち円形のものには2基ずつ対になった配置と認められる。東より土坑193・195、その約6m西に土坑196・197、その約7m西に土坑199・200と並ぶ。このことから6～7m毎の南北方向の区画が想定できる。対とはならない方形を呈する2基についても、土坑北側のラインは一致していることから、同様の意図で構築されたことが窺えるが、形状の差は時期差を示している可能性がある。同じく方形の土坑194が円形の土坑195に切られていることから、方形のものが古い一群と考えられる。

以上のことから、土坑群については、古いものから土坑194・198・201（方形）→土坑193・195・196・197・199・200（円形で2基一対）→土坑192という3群に分類される。これらの土坑の多くは野壺であったと考えられるが、土坑198・201に関しては特徴の違いから、別の機能が想定される。

土坑192（図191・192）

溝26の北側、AW03-11区に位置している。検出面は3層である。検出面の標高3.55m、底面は2.68mを測る。

平面形は円形で、直径1.55～1.63mを測る。底面は周縁が若干くぼみ、直径1.30mの円形を呈する。検出面からの深さは83cmである。掘り方の断面ではほぼ垂直に掘削される。

埋土は灰色粘質土が主体である。3層中からは木枠の側板が、4層中からは底板とみられる木片が出土した。他の調査地点で検出している木枠の据えられた土坑では、枠の外側を充填する埋土が確認されているが、本土坑では認められないことから、本来設置されていた木枠は廃棄時にとり外されていると想定される。

遺物は陶磁器・瓦片等が出土している。本土坑の時期は近世と考えられる。溝26北肩に接し、畦畔を切る位置にあたることから、土坑群のなかでも新しい時期の可能性はある。

土坑193（図191・193）

溝26の南側、AW03-11区に位置する。3層上面で検出し、検出面の標高3.75mである。

平面形は円形で、直径1.2～1.35cmである。標高2.92mまで掘削された底面は、径1.1～1.2mの円形を呈し、縁辺部が若干くぼむ。掘り方断面はほぼ垂直に掘削されたことを示しており、土坑192と共通する。埋土は1・2層が灰色粘質土、最下層の3層は淡灰色粘質土である。

遺物は近世の陶磁器小片がごく僅かに認められた。本土坑の時期は近世と考えられる。

土坑194 (図191・194)

AW03-01区に位置している。土坑195に接しており、西側の肩部を破壊されている。7層上面で検出したもので、検出レベルは標高3.4m、底面のレベルは標高3.0mである。平面形は一辺1.5mの隅丸方形を呈し、残存部の長径1.92m、短径1.58mである。残存深度は40cmである。底面は概ね平坦で、掘り方の形状は、ほぼ垂直に立ち上がる。

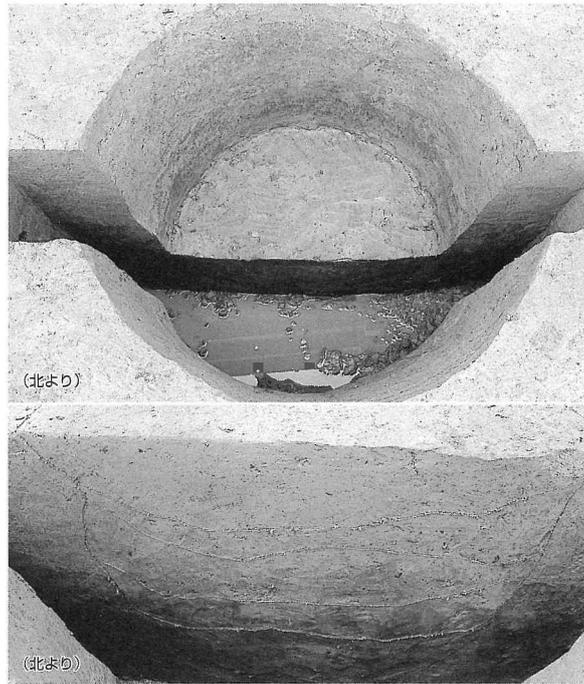
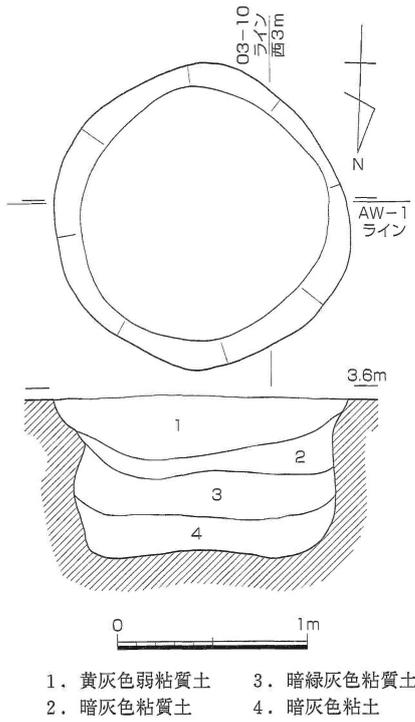


図192 土坑192 (縮尺1/40)

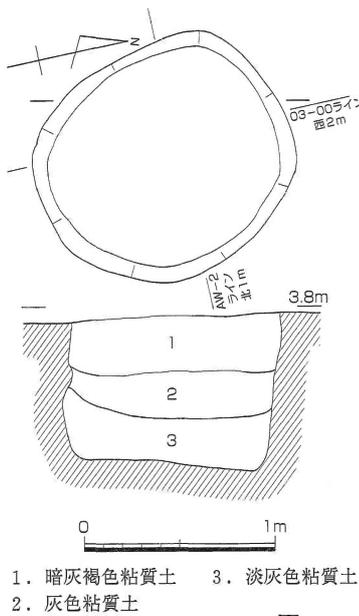


図193 土坑193 (縮尺1/40)

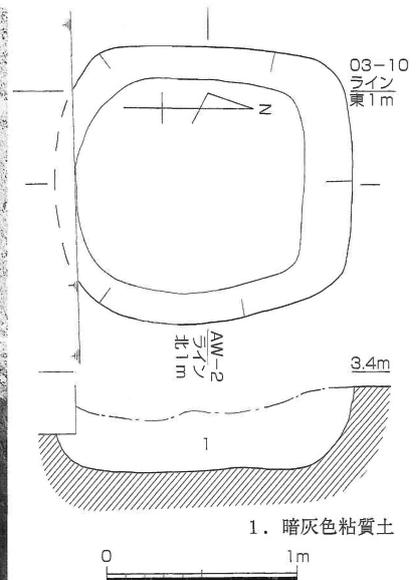


図194 土坑194 (縮尺1/40)

埋土は灰色粘質土である。遺物はみられなかった。検出面は異なるが、埋土の状況や底面のレベルが一致することから、本土坑の時期は近世と考えられる。

土坑195 (図191・195)

溝26の南側で、AW03-01区とAW03-11区にまたがり、南側は側溝によって削平される。土坑194と接しており、その西側の肩を壊している。

検出面は3層でレベルは3.7mを測る。平面形は円形で、長径1.7m、短径は推定で1.4mである。標高2.9mまで掘削された底面は平坦に近く、径0.8~1.1mの楕円形状を呈する。掘り方の断面形は、丸みのある逆台形を示す。土層の堆積状況から、本土坑には木杵が据えられていたと想定できる。木杵内の土層は有機物や粘質土のブロックを含むのが特徴的である。4層は木杵の外側を埋めた土層で、砂質であり、内側の埋土とは明瞭な違いを示す。遺物はポリ袋で6袋の陶磁器片、瓦片が出土している。いずれも近世のものであるが、図化できるものはなかった。本土坑の時期は近世である。

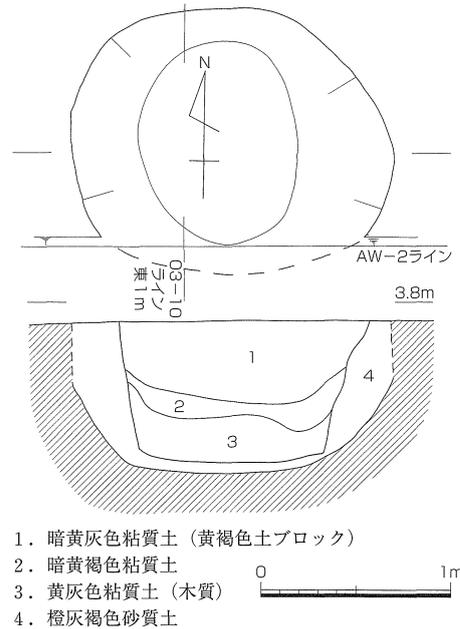


図195 土坑195 (縮尺1/40)

土坑196 (191・196)

7層上面で検出した。溝26の南側、AW03-21区に位置する。検出レベルは標高3.0m、底面のレベルは標高2.85~2.95mである。

平面形は円形を呈し、直径1.13~1.26mを測る。残存部深さは15cmを測る。7層での検出であるが底面のレベル、配置が溝26の南側の土坑群と一致することから、これらと同じく3層の遺構と判断した。

出土遺物はわずかに陶器片が認められたが、図化できるものはなかった。本土坑の時期は、近世と考えられる。

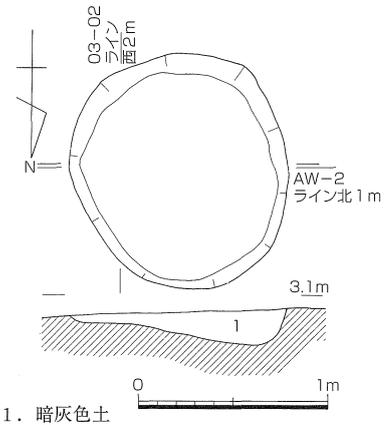


図196 土坑196 (縮尺1/40)

土坑197 (図191・197)

AW03-21区とAW03-22区にまたがった地点に位置する。北側には溝26が、東隣に土坑196が存在する。

平面の形状はほぼ正円形を呈し、長径1.35mである。3層上面で検出し、検出面のレベルは標高3.7m、底面のレベルは標高2.9mである。検出面からの深さ82cmを測る。底面は円形で、直径は1.28mであり、掘り方断面からもほぼ垂直に掘り込まれたことがわかる。機能時には木杵を入れていたものであろう。

埋土は全体として灰色系の粘土であるが、最下層4層は暗黄緑灰色粘質土に黄灰色細砂が混じり、使用時の流入土と考えられる。

遺物はわずかに陶磁器片が認められ、備前焼播り鉢の破片などが含まれる。本土坑の時期は近世と考えられる。

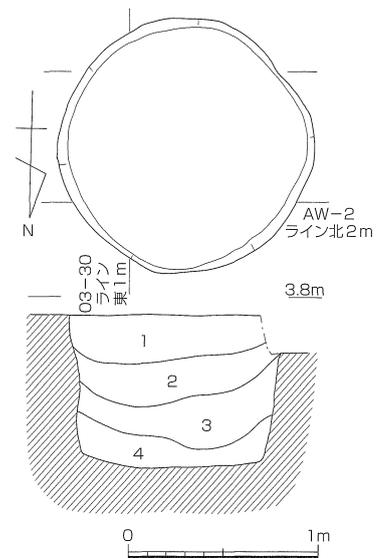


図197 土坑197 (縮尺1/40)

土坑198 (図191・198)

調査区北寄りのAW03-30区に位置する。溝26の北側にあたる。検出面は7層で、検出レベルは標高3.35m、底面のレベルは標高3.05mであ

る。

平面形は長方形を呈し、規模は長辺1.65m、短辺1.17mである。残存深度は30cmを測る。底面の形状は、平面長方形を呈し、長辺1.2m、短辺0.9mを測る。掘り方の断面は、南側が急峻に立ち上がるのに対し、北側の傾斜は緩やかである。平面形の点で他とは異なるが、底面のレベルと溝の北肩の畦畔を意識した配置の点は共通する。

出土遺物のごくわずかに陶器小片が認められた。本土坑の時期は近世と考えられる。

土坑199 (図191・199)

AW03-41区に位置する。溝26の南側で、土坑197の7m西に位置する。

検出面は3層上面、検出レベルは標高3.55mであり、底面は標高2.85mにある。平面形は円形を呈し、直径1.90~1.95mである。深さは約80cmである。底面の形状は直径1.45~1.50mの円形を呈する。掘り方断面はほぼ垂直に掘り込まれている。

埋土は1~4層が灰色系の粘土・砂質土で、これらは木枠内の埋土である。5~7層は砂質土であり、枠外の堆積土である。出土遺物はわずかに染付片等の陶磁器類が認められる。本土坑の時期は近世と考えられる。

土坑200 (図191・200)

AW03-41・51区に位置する。

溝26の南側で、土坑199の西に隣接する。3層上面で検出した。検出面のレベルは標高3.5m、底面の標高2.7~2.85mである。平面形は円形で、直径1.65~1.8m、最深部の深さは0.8mである。底面は直径1.4~1.55mの円形を呈しており、掘り方の断面はほぼ垂直である。

土坑内の埋土から木枠が据えられていたことが想定される。1~5層は木枠内の埋土にあたり、1~4層は灰色系の粘土層、5層は粗砂と粘土が互層となって堆積する。6・7層は木枠の外側を埋める土層である。

遺物は陶磁器片・瓦片等ポリ袋で3袋程度が出土している。本土坑の時期は、近世と考えられる。

土坑201 (図191・201)

AW03-51区とAW03-52区にまたがる地点にある。溝26の南側で東1.2mには土坑200が位置する。7層上面で検出した。検出レベルは標高3.3m、底面のレベルは2.65mを測る。

平面の形状は隅丸長方形を呈し、長辺2.26m、短辺0.95mを測る。深さ50cmが残存する。断面形は逆台形を呈する。埋土は暗黄灰色~青灰色粘質土である。

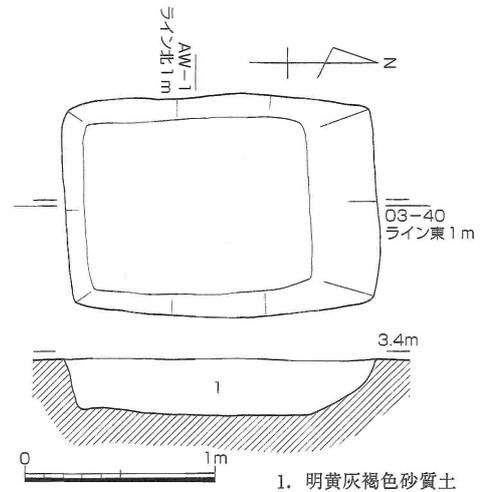
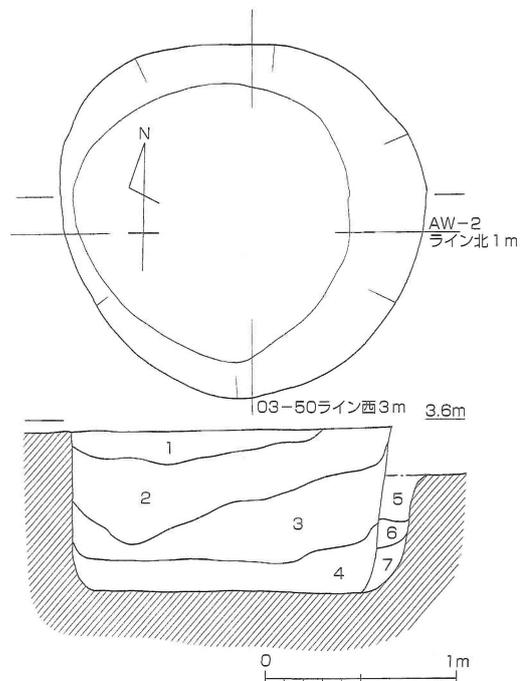


図198 土坑198 (縮尺1/40)



- 1. 黄灰色土
- 2. 黒灰色粘質土
- 3. 暗青灰色粘質土
- 4. 暗灰色粘質土
- 5. 緑灰色砂質土
- 6. 暗緑灰色砂質土
- 7. 淡灰白色砂質土

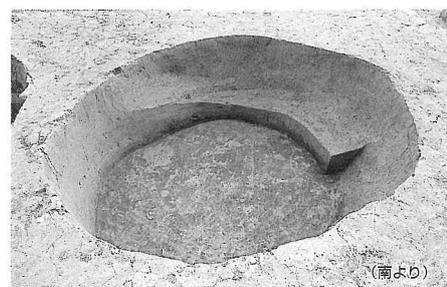


図199 土坑199 (縮尺1/40)

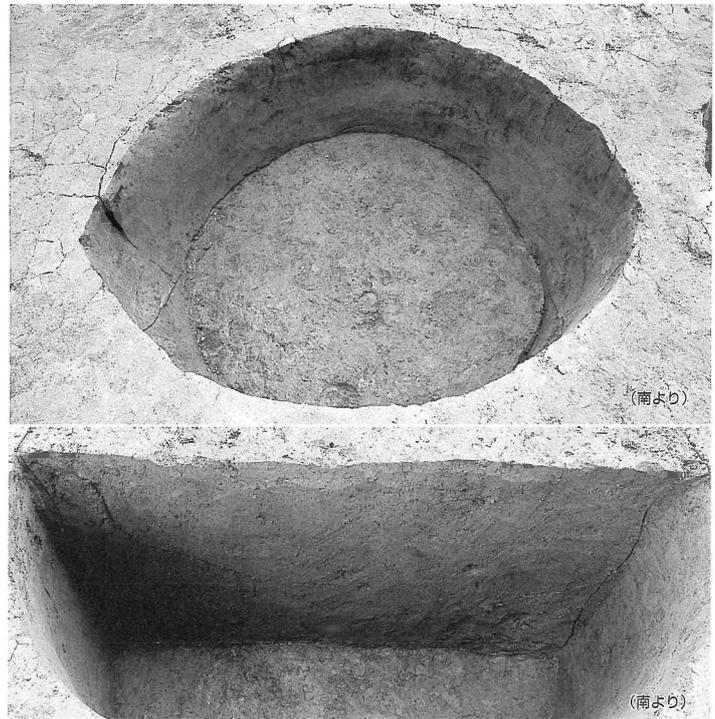
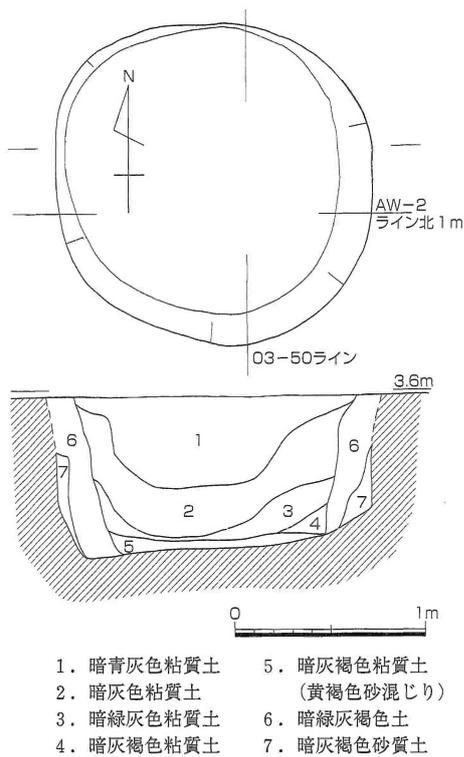


図200 土坑200 (縮尺1/40)

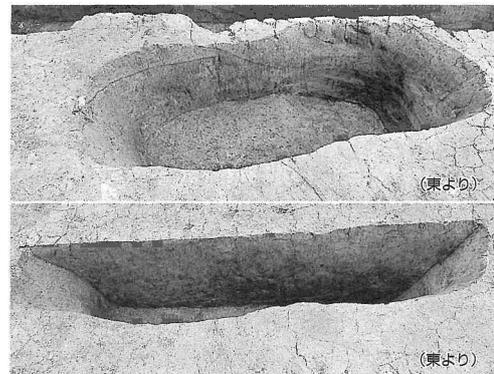
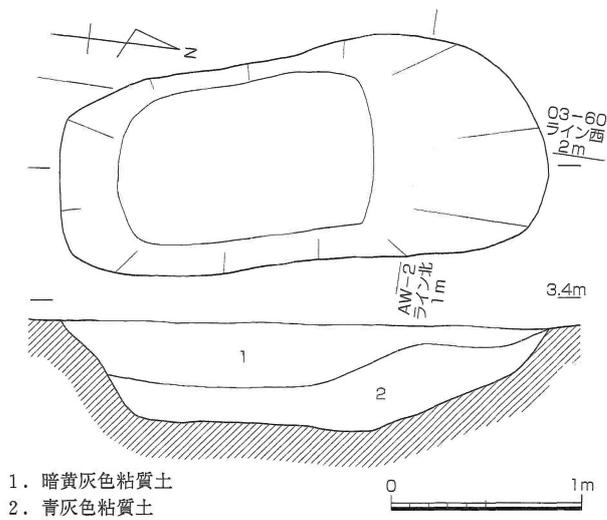


図201 土坑201 (縮尺1/40)

出土遺物は認められなかった。7層の検出であるが、底面のレベルや埋土が他の土坑と共通することから、本土坑の時期は、近世と考えられる。

b. 溝

溝26 (図191・202~204)

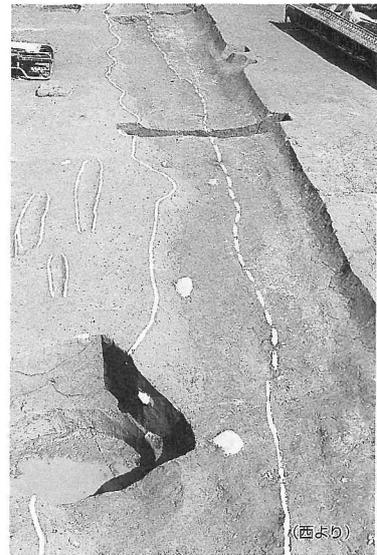
5層上面で検出した。検出レベルは標高3.4mを測る。aa' (東壁) 断面の観察により、本来は3層上面の遺構と判断した。AW-2ラインの北約2mの位置を東西に走行する。近代の溝 (溝27) がほぼ同じ位置に重複する

ため、本溝の南側の肩の上半はかなり破壊されている。

溝の残存幅は60cm、深さは30cm前後である。底面のレベルは標高3.35mである。

溝26からは、コンテナ1/2箱程の遺物の出土があった。瓦片、陶磁器片、土器片が認められ、時期としては16世紀末～19世紀代のものまで、幅があるが、主体となるのは、17世紀後半～18世紀にかけての時期である。図203に掲載したもののうち1は関西系播り鉢の口縁部片、2は備前焼盤の口縁部片である。3は中国産青花碗の高台部片である。明の景德鎮窯のもので、16世紀中葉に比定される。4・5は肥前磁器染付である。4は筒茶碗、5は碗である。いずれも17世紀代のものである。

石器は5点出土した(図204)。石核(S323)はサヌカイト製で、板状の素材の周縁から薄い小剥片を剥離する。下縁には両面調整も認められる。砥石は4点が出土した(S324～327)。いずれも砂岩製であるが形状は多



溝26

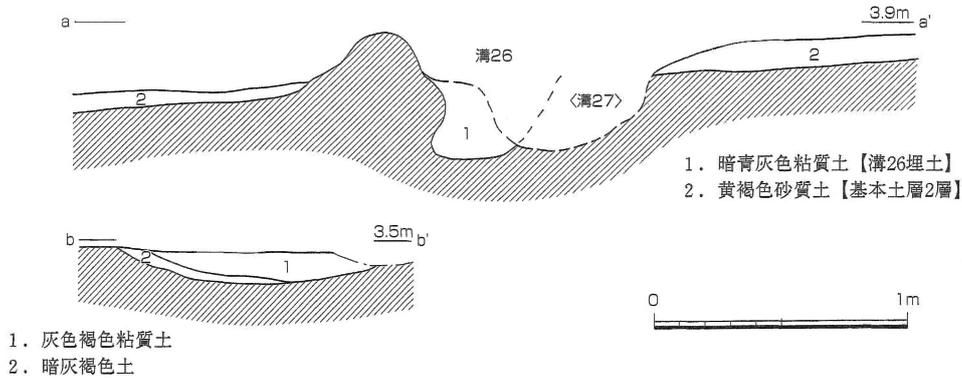
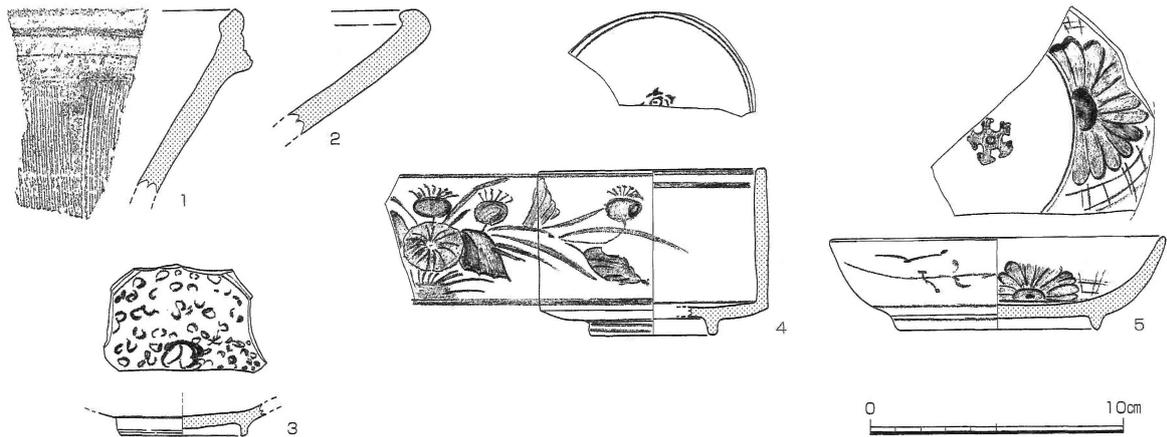
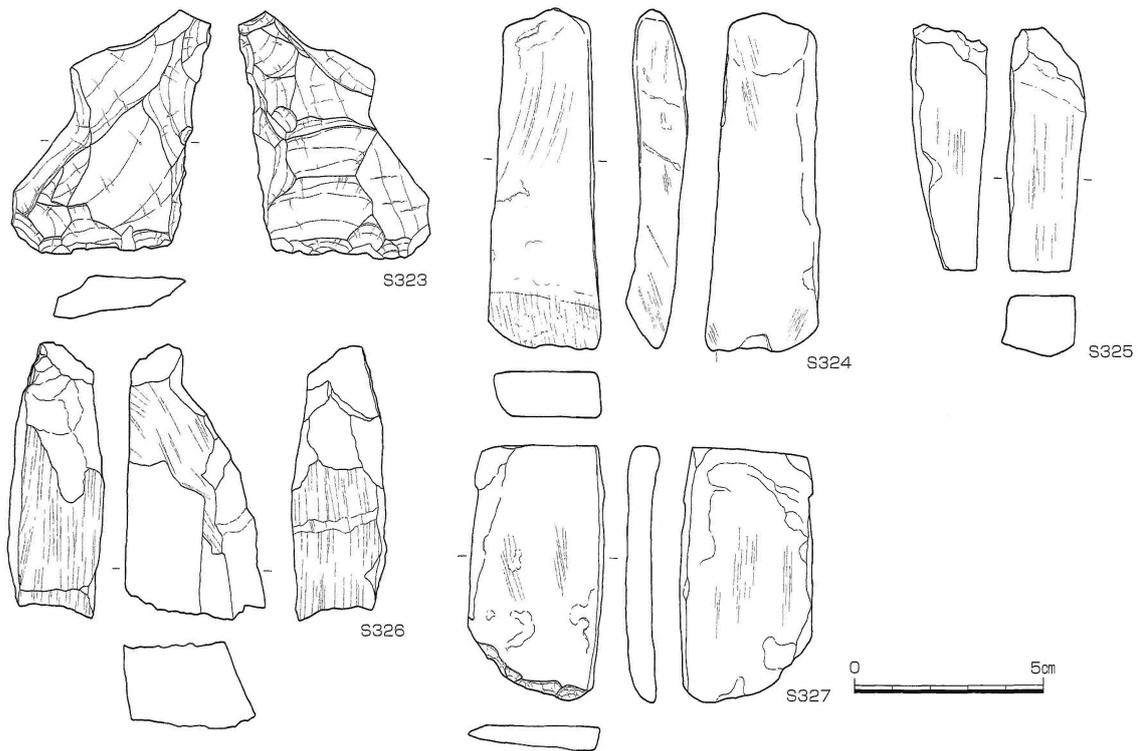


図202 溝26 (縮尺1/30)



番号	器種	法量(cm)			形態・手法ほか	色調	胎土
		口径	底径	器高			
1	関西系・播り鉢	—	—	—	堺産? 糸線の単位は不明	暗紫褐、胎:灰	堅緻
2	備前焼・盤	—	—	—	回転横ナデ	暗茶褐～暗紫褐、胎:茶褐	堅緻
3	中国製染付・碗	—	5.0	—	明染付、景德鎮窯。施釉丁寧。	釉:透明、胎:灰白	精緻
4	肥前磁器・筒茶碗	9.0	5.0	6.7	具須	釉:透明、胎:白	精緻
5	肥前磁器・碗	13.2	8.0	3.7	具須	釉:透明、胎:白	精緻

図203 溝26出土遺物1 (縮尺1/3)



番号	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石材	特徴
S323	石核	6.50	5.10	1.21	39.8	サヌカイト	側縁から小剥片を剥離。
S324	砥石	8.00	3.00	1.33	60.8	泥岩	板状。表裏面が使用により摩滅し湾曲した形状。持ち砥石か？
S325	砥石	6.45	2.05	2.00	38.7	泥岩(シルト岩)	上部欠損。角錐状。主面と側面に使用による線状痕。
S326	砥石	7.25	3.72	2.30	82.9	泥岩	剥落が著しい。各面に使用による線状痕が確認できる。
S327	砥石	6.80	3.50	0.75	28.8	泥岩	板状。表裏面が使用により摩滅。持ち砥石か？

図204 溝26出土遺物 2 石器 (縮尺1/2)

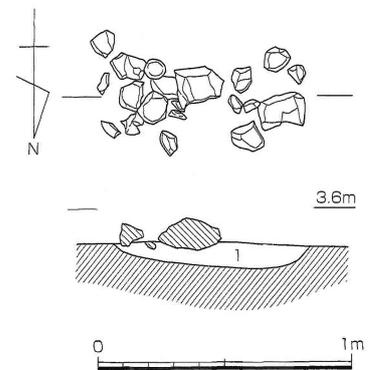
様である。摩滅が著しい。形状や出土状況から近世のものと考えられる。

本溝はその大半が溝27と重複しており、遺物の取り上げに混同がある可能性も否めないが、ほぼ16世紀末頃から使用され、19世紀代まで継続する溝である。本溝は中世末段階の溝25が掘削された位置をほぼ踏襲していることから、やはり「坪境の溝」にあたるものと考えられる。

なお、面的に確認することはできなかったが、東壁断面観察(図202aa断面)では本溝の両脇に畦畔が存在していたことがわかる。

c. 集石遺構

AW02-71区において集石を検出した(図205)。底面のレベルは標高3.45mであり、東壁で確認される3層対応畦畔のライン上で畦畔盛り土内に入る高さである。東西1m、南北0.5mの範囲に、深さ10cm程の溝状のくぼみがあり、人頭大~拳大の石が15個検出された。配置には規則性は認められず、出土遺物は石に混じって須恵質土器の甕片が1点出土したのみである。集石の性格・用途については判断する材料に乏しく不明であるが、溝状のくぼみがある点は第27次調査地点でみられた畦畔の下部構造と共通する。



1. 灰茶褐色砂質土

図205 集石遺構 (縮尺1/30)

d. 柱穴列 (図191)

調査区南半、5層上面において、柱穴列を確認した。検出レベルは標高3.7m、底面レベルは標高3.65m前後である。南北方向の2列(柱穴列2・3)と、東西方向の1列(柱穴列4)が確認できた。南北方向の柱穴列2としては、02-80ラインの3m東に柱穴5基を確認した。柱穴列3としては02-80ライン上に位置し、合計14基の柱穴を検出している。柱穴列4はAW-0ラインの北1mに位置し、13基の柱穴を検出している。柱穴列2~4の状況は同じである。柱穴はいずれも直径15~20cmで、深さ10~20cm程度が残る。ほぼ70cm前後で等間隔に並ぶが、一部では間隔が飛んでいる。

これらの柱穴については、「柵列」あるいは「道路」といった機能が想定される。道路と考えた場合、柱穴列2・3についてはその間の3mの部分が道路にあたる可能性がある。また柱穴列4については対になる列は確認されていない。

2. 近代

近代の遺構は第22次調査地点で検出した溝1条(溝27)である。第17次調査地点では、ほぼ全域において、南北方向の畝を確認している(図206上)。

溝27 (図206~208)

溝27は、近世の溝26の南側に重複する東西方向の溝である。3層上面で検出された。検出レベルは標高3.75~3.8mで、断面観察では3.8~4.0mに復元される。底面のレベルは3.35~3.4mである。幅0.7~1.0m、検出面からの深さ20~30cmを測る。埋土は暗青灰色粘質土であるが、最終的には造成土で埋められており、陸軍による造成の直前まで機能していたことが窺える。断面からは2回の使用面がうかがえ、旧段階の



南北方向の畝

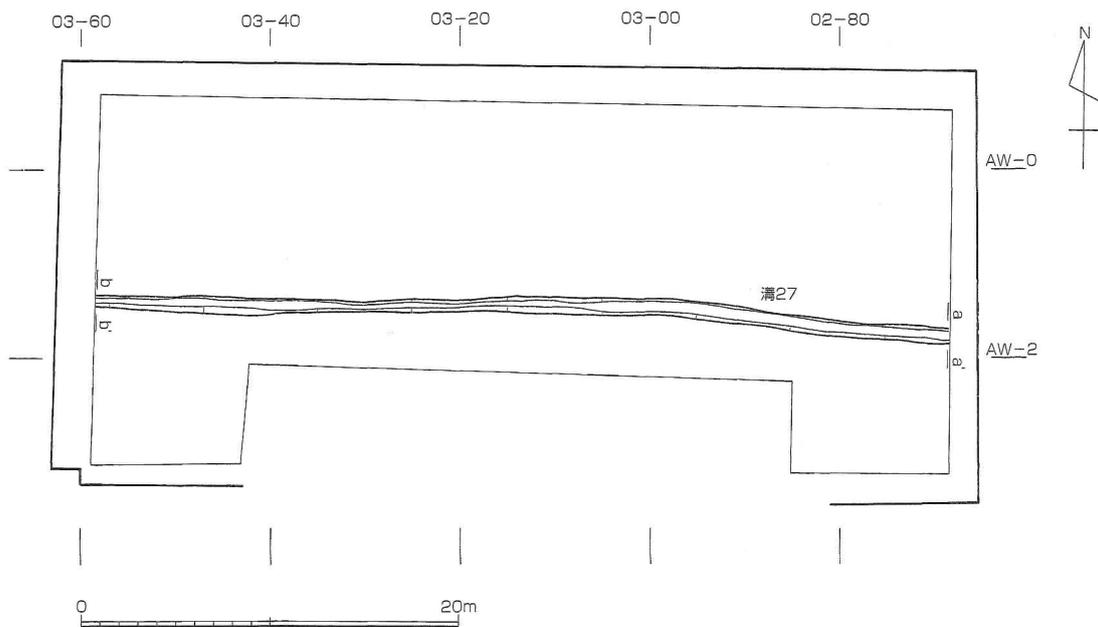


図206 近代遺構平面図 (縮尺1/30)

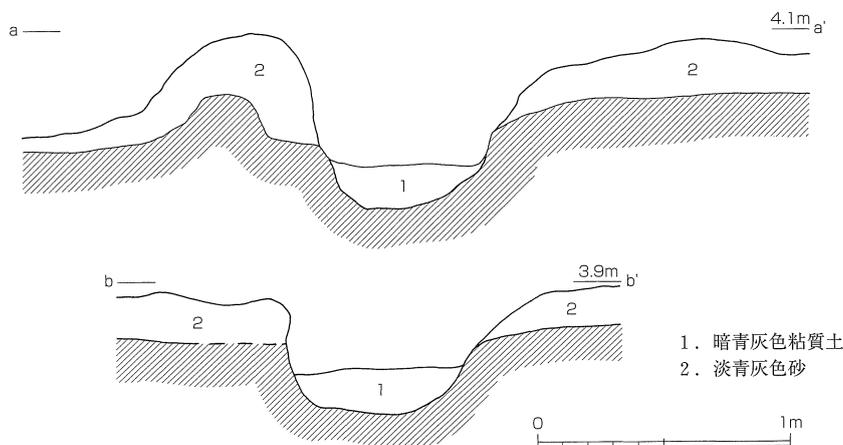
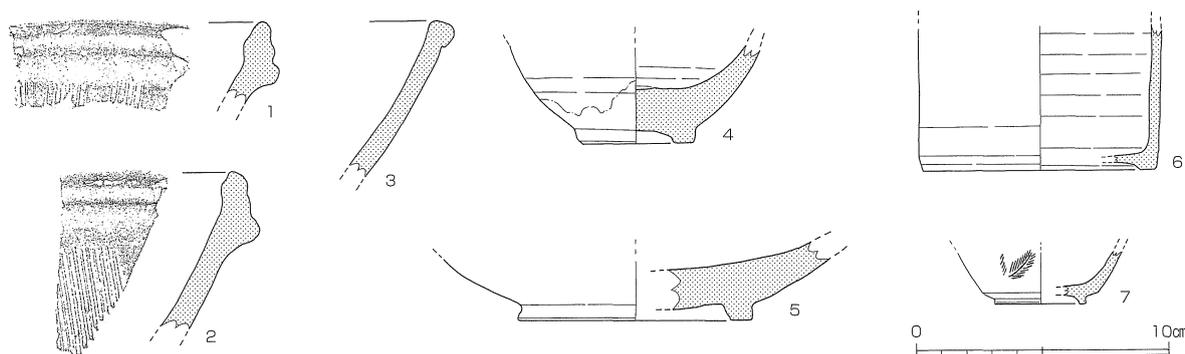


図207 溝27 (縮尺1/3)



番号	器種	法量 (cm)			形態・手法ほか	色調	胎土
		口径	底径	器高			
1	備前焼・播り鉢	—	—	—	6条一組の条線	暗茶/淡紫灰茶	細砂
2	備前焼・播り鉢	—	—	—	条線の単位は不明	暗紫褐/淡茶褐	微砂
3	肥前陶器・鉢	—	—	—	口縁部は玉縁状。	釉：淡茶～暗茶、胎：暗灰	微砂、精緻
4	肥前陶器・碗	—	4.6	(3.9)	唐津。高台部は一部露胎。底部完存。	釉：淡茶褐～淡灰、胎：灰	精緻
5	肥前陶器・鉢	—	9.2	(3.1)	唐津。見込みは露胎。高台部1/3残。	釉：淡茶～淡褐白、胎：灰	精緻
6	京焼系陶器	—	9.2	(5.7)	信楽。高台内部は露胎。1/3残	暗茶褐	微砂
7	肥前磁器・ぐい呑	—	3.6	(2.0)	高台部1/6残。	釉：白灰、胎：灰	精緻

図208 溝27出土遺物 (縮尺1/30)

底面が標高3.4m前後、造成土で埋設する直前までの底面は標高3.6m前後である。

出土遺物はコンテナ (約28リットル) 1箱で、陶磁器・瓦片等274点が出土している。時期としては17世紀初頭～明治時代までのものが含まれる。主体となるのは18・19世紀代であるが、染付類の中にはコバルト染料を用いるものや型紙焼きのもの (図版21) が含まれている。これらは明治期に入ってから技法である。図208には7点を掲載した。1・2は備前焼播り鉢、3は肥前陶器鉢の口縁部片である。17世紀代のものである。4・5は肥前陶器である。4は唐津焼の碗高台部片、5は唐津焼の鉢高台部片である。6は京焼系陶器である信楽焼の胴部～底部片である。4～6は17世紀後半～18世紀のものである。7は肥前磁器のぐい呑み底部片である。18世紀～19世紀のものともみられる。遺物からも溝27の時期としては1906～1907年の造成によって埋没したという点と合致する。

平面的には、造成土除去の際に削平され、不明であるが、溝26と同様、溝27の両側には畦畔の高まりが断面観察で確認される (図207)。

第9節 包含層出土遺物

(1) 陶磁器 (図209 図版21)

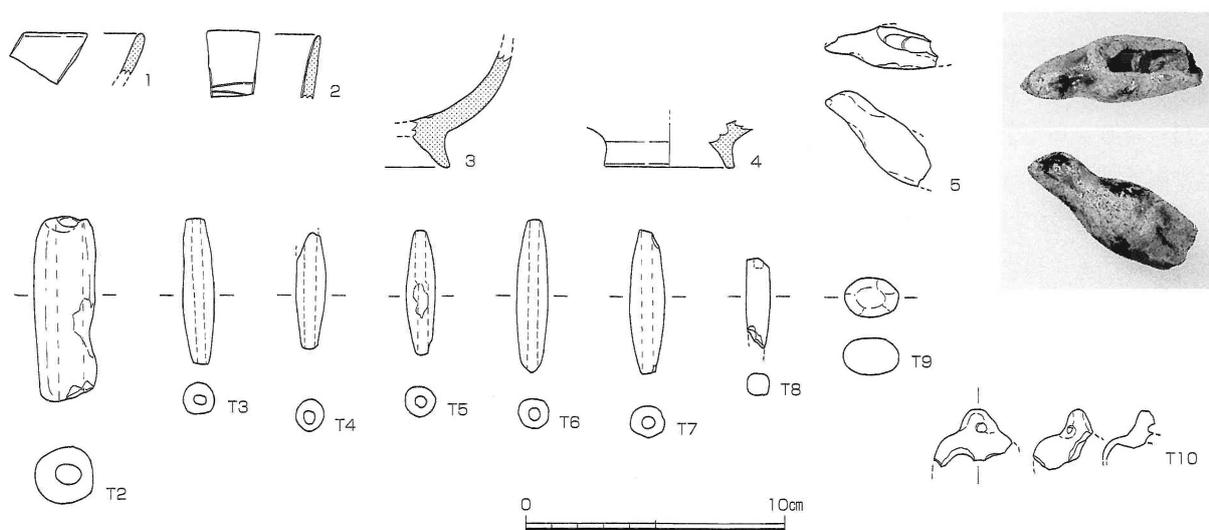
5点を図示した。1・2は青磁碗の口縁部片である。3・4は白磁碗の高台部である。3は白磁碗Ⅳ類、4は白磁碗Ⅴ類である。1～4は13世紀代のもと考えられる。5は三彩の破片である。鳥形を呈している中空のものであり、水注等の装飾の一部ではないかと考えられる。欠損のため頭部のつくりが判然としないが、あまり丁寧なつくりとは言えない。頭部～背部にかけて三彩釉が施されている。

(2) 土製品 (図209 図版21)

土錘7点、土玉1点、土鈴1点を図示した。土錘はT2一点が大型のものである。T3～T7は長さ・径が近似している。T8は土錘の未製品と考えられ、孔は未貫通のままである。

T9は玉状に加工した土製品である。球体ではなく、面をつくりだしており、ややいびつな楕円形状である。用途は不明である。

T10は土鈴の一部である。溝21からも類似品1点が出土している (図197T1)。上部につまみ部分があり、体部は中空となる形状であろう。つまみ部分の穿孔は未貫通である。



番号	器種	法量 (cm)		形態・手法ほか	色調	胎土	調査次	層位
		底径	器高					
1	青磁・碗	—	—	施釉は均質、丁寧だが薄い	釉：淡緑灰、胎：淡灰	精緻	17	5～7層
2	青磁・碗	—	—	龍泉窯Ⅳ系、施釉は丁寧。内面に文様あり	釉：オリブ灰、胎：淡灰	精緻	17	8層
3	白磁・碗	—	(4.5)	白磁碗・類。施釉は丁寧、厚め。見込みの一部は露胎	釉：透明、胎：白	微砂混じる	22	5～6層
4	白磁・碗	5.0	(1.9)	白磁Ⅴ類。施釉は丁寧、厚め。見込みは露胎	釉：透明、胎：白	精緻	17	側溝
5	三彩・水注?	—	—	鳥形。中空。頭部～背にかけて施釉	釉：黄緑～暗黄、胎：灰褐	精緻	17	側溝

番号	器種	法量 (cm)			形態・手法ほか	色調 (外/内)	胎土	出土地区	層位
		長さ	幅	厚さ					
T2	土錘	7.2	2.3	—	孔径0.9cm、重量40.9g。丁寧なナデ、一部欠損	淡黄橙	微砂	17	
T3	土錘	5.7	1.3	—	孔径0.3cm、重量7.3g。丁寧なナデ	淡橙	微粗	22	7層
T4	土錘	4.5	1.3	—	孔径0.5cm、重量4.8g。丁寧なナデ	淡茶褐	微砂	17	5～7層
T5	土錘	4.8	1.2	—	孔径0.4cm、重量4.5g。丁寧なナデ、穿孔は途中でずれがある。	橙	微砂	17	2～14層
T6	土錘	5.9	1.1	—	孔径0.3cm、重量6.3g。丁寧なナデ	淡橙	微砂	22	5層
T7	土錘	5.6	1.2	—	孔径0.4cm、重量7.8g。丁寧なナデ	淡橙	微砂	17	
T8	土錘	3.3	0.9	—	孔径0.3cm、重量2.9g。未製品。孔は未貫通。ナデ	淡橙	微砂	17	
T9	土玉	1.9	1.5	1.3	やや面取りしたように面をつくっている。ナデ。重量4.4g	黄灰	微砂	17	2～4層
T10	土鈴	2.0	2.8	1.4	全体にナデ。やや焼成が甘い。つまみ部の穿孔は未貫通	淡褐/淡褐白	微砂	22	3・4層

図209 包含層出土陶磁器・土製品 (縮尺1/3)

(3) 石器 (図210~213 図版22・24・25~28)

弥生~近代の包含層出土石器を調査地点毎に掲載した。また、縄文の包含層から出土した石器についても、13~16層のいずれに属するか不明なものはここに掲載した。観察表には出土層位を記している。以下に器種毎に記述する。

a. 第17次調査地点出土石器 (図210~212 図版22・25~28)

石鏃 15点出土した (S328~342)。全てサヌカイト製である。凹基式7点 (S328~333、S335)、平基式4点 (S334、S337~339)、未成品3点 (S340~342) である。凹基式は、長さ、長幅比、脚部の形状などで多様である。S333は厚みを持つ大型品で両側縁が中ほどで屈曲する特徴を示す。平基式も形態が多様である。S337は平面正三角形の小型品で、周縁に細かい両面調整を施す。S338は厚みを持つ大型品で、両側縁が中ほどで屈曲し、平面が五角形状を呈する。S341は未成品で、素材面を多く残し、周縁に両面調整を行うが、平面は不定形である。

石錐 3点出土した (S343~345)。いずれもサヌカイト製である。S343は自然面を大きく残す横長剥片の両側縁に交互に片面調整を行い整形し、錐部分をつくり出している。握り部分は扁平である。先端は使用による摩滅部分が若干観察できる。S344は細長の縦長剥片を素材とし、両側縁に片面調整を行うが右側縁は錐部分周辺のみ調整である。錐部分先端は両面から細かく調整する。S345は小型品で細長小剥片の両側縁を調整し、錐部分をつくり出している。

石鏃 2点出土した (S346、347)。S346は、サヌカイト製の破片で下端に調整が施され、摩滅部分と擦痕が明瞭に観察できる。S347は玄武岩質凝灰岩製で、表面の一部に摩滅部分と擦痕が明瞭に観察できる。いずれも使用時に欠損した破片の可能性はある。

スクレイパー 2点出土した (S348、349)。S348は細粒砂岩製で、扁平な素材を利用し、その下縁に浅い角度で粗く調整を施し、弧状の刃部をつくり出している。S349はサヌカイト製で、一部に自然面が残る。石理にそって剥離した薄い剥片を利用し、その下縁に細かい片面調整を施し、緩い弧状の刃部をつくり出している。ただ、刃部は下縁全体にわたるのではなく、左端には大きな剥離が行なわれている。上縁の一部にも調整を行う。

楔形石器 8点出土した (S350~359)。いずれも上下縁に階段状のつぶれた剥離を有する。S353は相対する上下縁がほぼ併行し、右側面に剪断面を有する。S357も自然面を多く残すが、上下縁に階段状剥離が観察でき、右側面に剪断面を有する。

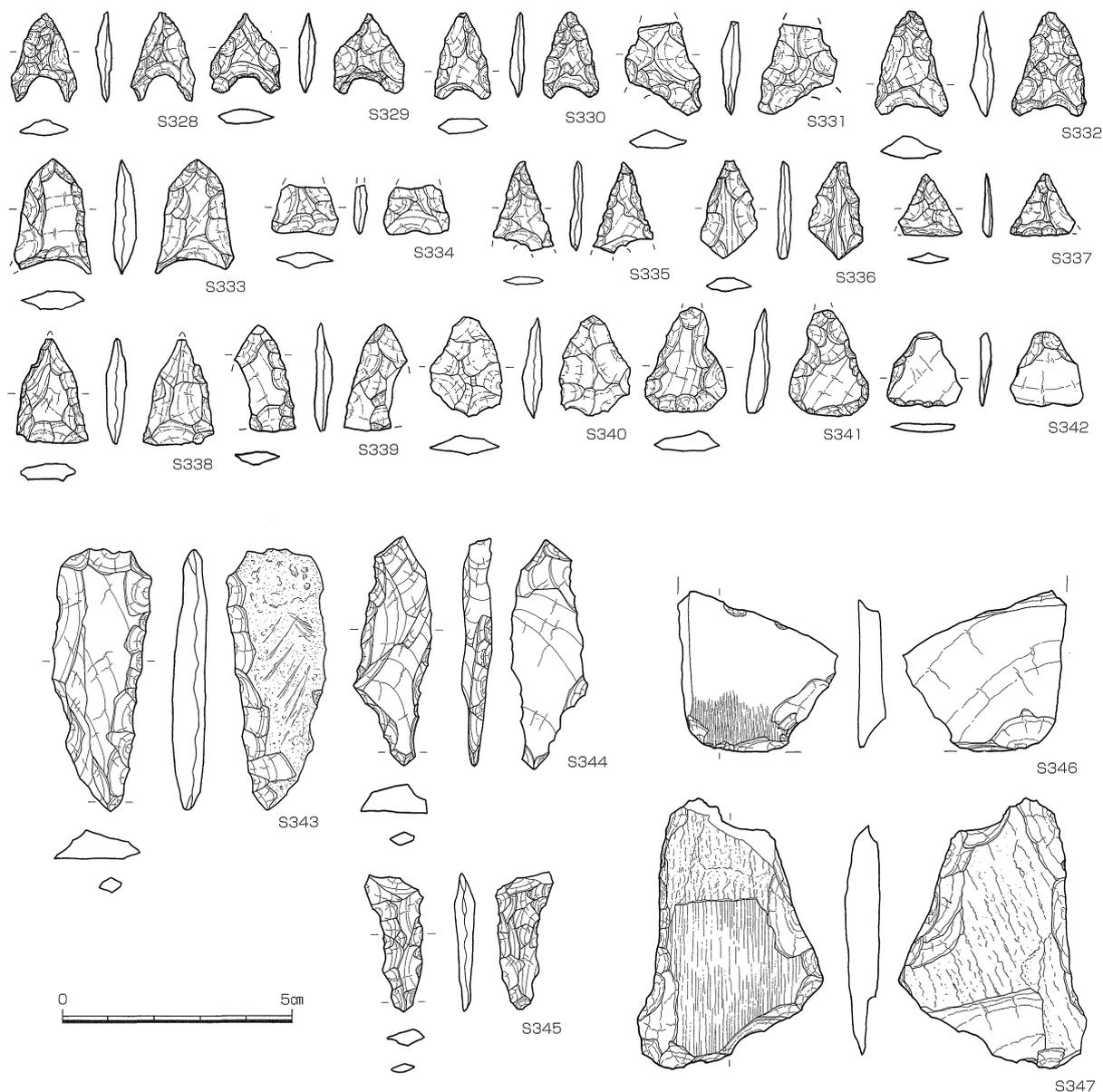
石核 3点出土した (S358~360)。いずれもサヌカイト製である。S359は拳大の原礫を素材としたもので、上面に打面を形成して小剥片を剥離している。下面には剪断面が確認できる。石錐などに用いる厚みのある細長の剥片を剥離していた可能性もあるが、自然面が多く残っており、石核として使い込まれたものではない。S360は角柱状の原形であったと思われるが、打面から細長の小剥片を剥離している。また、打面を転位して、側縁からの剥離も試みている。S358も小剥片を剥離した石核と考えられるが、2カ所の折れ面が認められ、剥片剥離後に分割された可能性が高い。

磨製石斧 乳棒状石斧の基部片1点が出土した。S361は閃緑岩製で基部先端が尖る。全体的に丁寧に研磨されており、表面に敲打痕はあまり観察されない。柄との結合部位付近で欠損している。

磨石 1点出土した。S362は流紋岩の円礫を用いており、両面に敲打痕と線状痕が確認できる。

石棒? 1点出土した。S370は玄武岩質緑色片岩製で、表面に面取りを試みたような加工痕を観察できる。15層で出土したS79と同様に遺跡付近で採取できる石材ではない。

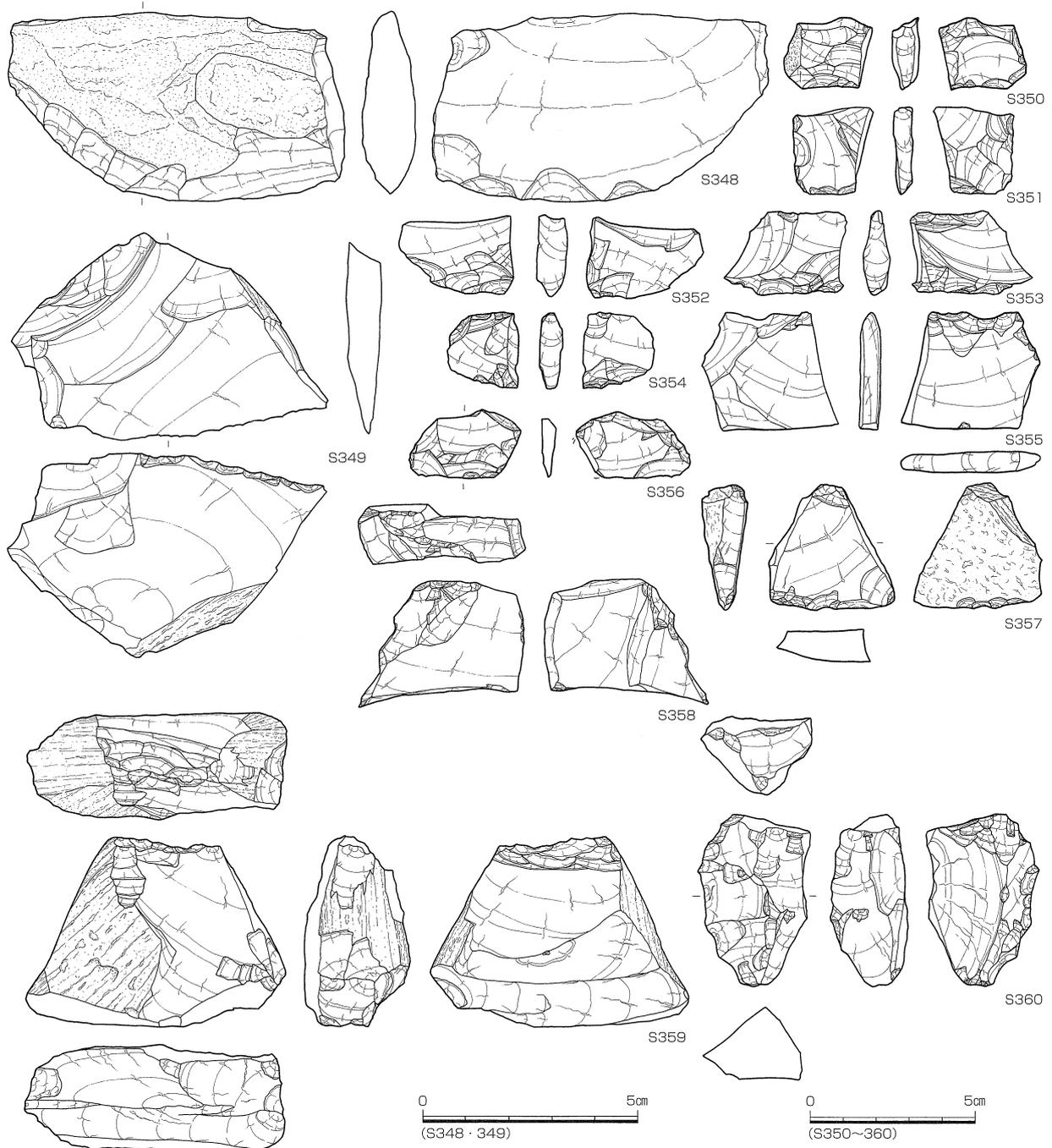
石錘 7点出土した (S363~369)。円礫の両端を打ち欠いたものが主であるが、S369は擦り切りによって両端に溝をつくり出している。S363、S368は大型品で扁平な礫の短軸両端を打ち欠いているのが特徴である。



番号	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石材	特徴	調査次-区	層位
S328	石鏃	1.95	1.40	0.35	0.6	サヌカイト	凹基式。挟り部は明瞭。脚部は尖る。	17	12・13層
S329	石鏃	1.72	(1.51)	0.34	0.7	サヌカイト	凹基式。挟り部は明瞭。脚部はやや尖る。	17-3	12・13層
S330	石鏃	1.28	1.23	0.35	0.7	サヌカイト	凹基式。挟り部は明瞭。脚部はやや尖る。	17-1	12・13層
S331	石鏃	(2.00)	(1.60)	0.40	(0.9)	サヌカイト	凹基式。脚部を一部欠損。脚部は幅広。	17-6	12層
S332	石鏃	2.27	1.56	0.48	1.1	サヌカイト	凹基式。挟り部は明瞭。脚部は尖る。	17-2	13~15層
S333	石鏃	(2.50)	(1.70)	0.50	(1.9)	サヌカイト	凹基式。挟り部は幅広。脚部は尖る。五角形鏃。	17-4	12・13層
S334	石鏃	(1.10)	1.40	0.30	(0.5)	サヌカイト	平基式。先端部欠損。	17	12層
S335	石鏃	(1.90)	(1.30)	0.20	(0.5)	サヌカイト	凹基式。脚部を欠損。	17	11層
S336	石鏃	(2.15)	(1.20)	(0.30)	(0.6)	サヌカイト	先端のみ残存。	17-2	12・13層
S337	石鏃	1.39	(1.26)	1.90	(0.3)	サヌカイト	平基式。小型品。	17-4	12・13層
S338	石鏃	(2.30)	1.60	0.40	1.08	サヌカイト	平基式。大型で厚い。五角形鏃。	17-6	12・13層
S339	石鏃	2.40	(1.30)	(0.30)	(0.8)	サヌカイト	平基式。一部欠損。	17-1	12・13層
S340	石鏃未成品	2.21	1.57	0.41	1.1	サヌカイト	周縁からの粗い調整。	17-6	12層
S341	石鏃未成品	(2.84)	1.75	0.44	1.6	サヌカイト	周縁からの調整。素材面を多く残す。	17-2	12・13層
S342	石鏃未成品	1.65	1.60	0.25	0.5	サヌカイト	素材面が多く残り、下縁部に片面調整。	17-4	11・12層
S343	石鏃	5.80	2.20	0.75	8.6	サヌカイト	自然面を大きく残す。両側縁に片面調整。	17-5	13・14層?
S344	石鏃	6.00	1.65	0.64	5.4	サヌカイト	両側縁を片面調整。	17-2	13層?
S345	石鏃	(3.00)	(1.25)	0.45	(1.2)	サヌカイト	小型品。両側縁を細かく調整。	17-4	13層?
S346	石鏃片	(3.55)	(3.50)	0.60	(7.4)	サヌカイト	刃部下端が摩滅し、擦痕が観察できる。	17-4	12・13層
S347	石鏃片	(5.95)	4.05	0.75	(21.7)	玄武岩質凝灰岩	表面の一部に摩滅範囲と擦痕が観察できる。	17-6	13層?

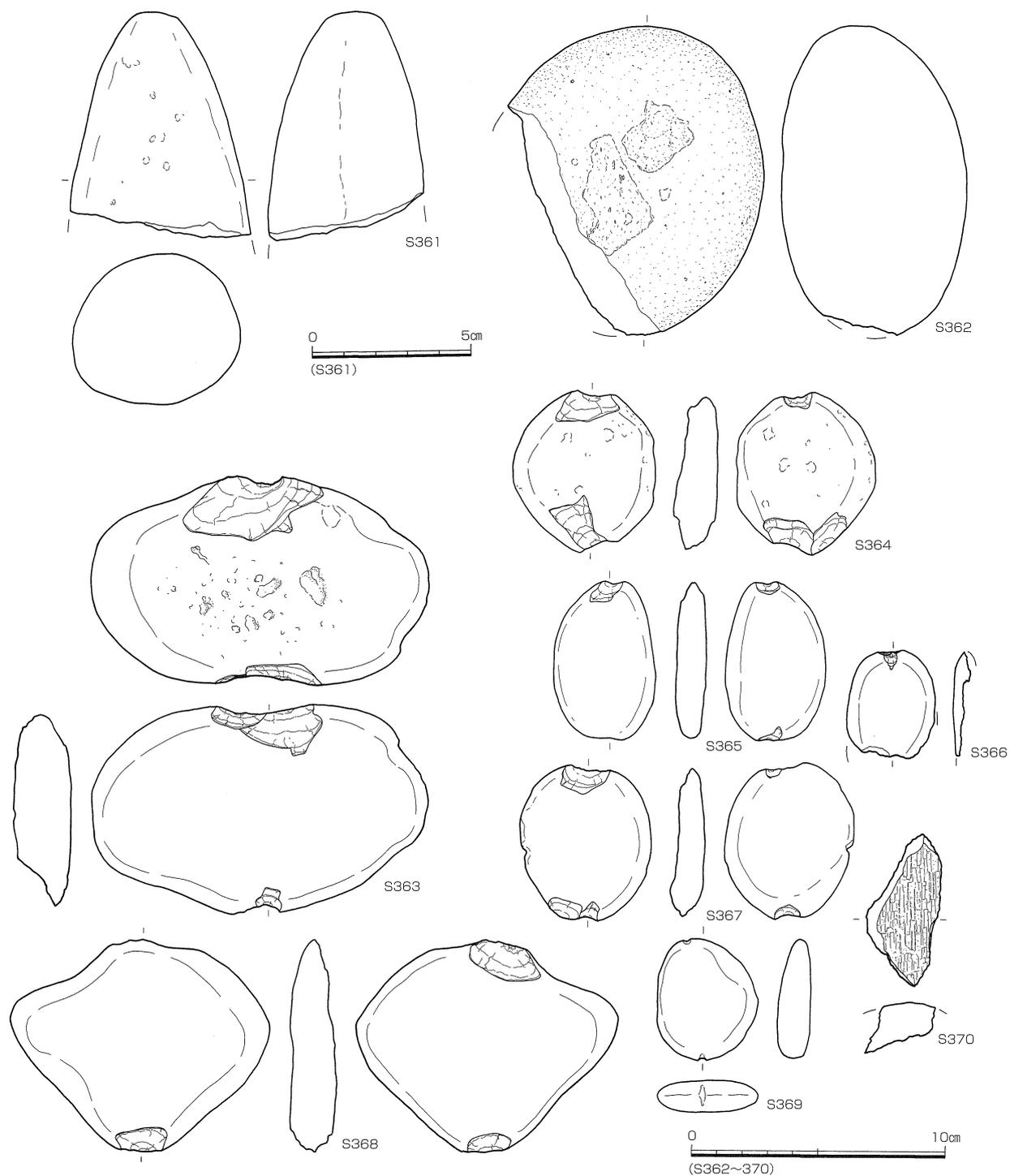
図210 包含層出土石器1 (縮尺2/3)

調査の記録



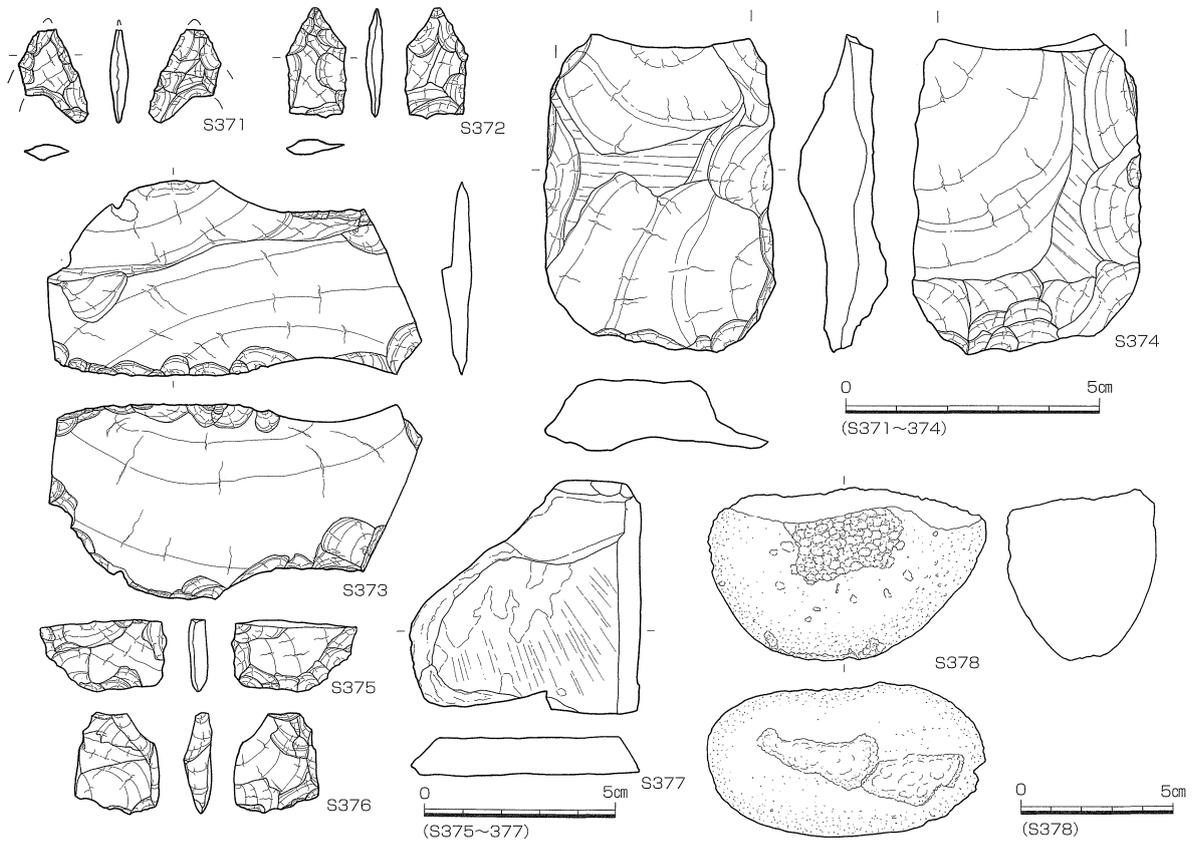
番号	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石材	特徴	調査次-区	層位
S348	スクレイパー	4.30	7.60	1.20	65.1	細粒砂岩	扁平な素材の下端に粗い片面調整。	17-5	11・12層
S349	スクレイパー	4.70	7.10	0.80	26.6	サヌカイト	下縁に細かい片面調整。上縁の一部にも調整。	17	15層?
S350	楔形石器	2.20	2.70	0.88	6.0	サヌカイト	自然面を残す。下端に階段状の剥離。	17-2	側溝
S351	楔形石器	2.70	2.40	0.70	5.2	サヌカイト	下端に階段状剥離。	17-4	11~13層
S352	楔形石器	2.05	3.40	0.60	4.2	サヌカイト	上下端に階段状の剥離。	17-2	12層
S353	楔形石器	2.55	3.70	0.80	5.0	サヌカイト	上下端に階段状の剥離。	17-5	13層?
S354	楔形石器	2.35	2.10	0.70	3.3	サヌカイト	上下端に階段状の剥離。	17-6	12・13層
S355	楔形石器	3.60	4.20	0.65	11.9	サヌカイト	上端に階段状の剥離。	17-2	9層
S356	楔形石器	2.50	3.50	0.90	7.9	サヌカイト	下端に階段状のつぶれた剥離。	17-5・6	13・14層?
S357	楔形石器	3.85	3.82	1.28	16.4	サヌカイト	自然面を多く残す。左側面に剪断面。	17-5	11・12層
S358	石核	5.03	2.85	1.75	36.7	サヌカイト	二側面に折れ面。	17-1	12・13層
S359	石核	5.90	7.82	3.20	170.3	サヌカイト	拳大の礫を素材として使用。下面に剪断面。	17-3	側溝
S360	石核	5.30	3.45	2.40	41.3	サヌカイト	角柱状の素材。打面を転位しつつ、小剥片を剥離。	17-5	11・12層

図211 包含層出土石器2 (縮尺2/3・1/2)



番号	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石材	特徴	調査次-区	層位
S361	磨製石斧	(5.40)	(4.20)	(3.70)	(106.4)	閃緑岩	乳棒状石斧の基部のみ残存。	17-2	側溝
S362	磨石	(10.10)	(12.40)	7.25	1214.9	流紋岩	円礫の両面に敲打痕、線状痕。	17-2	側溝
S363	石錘	8.40	13.30	2.35	392.7	流紋岩質凝灰岩	大型品。扁平な礫の短軸両端に打ち欠き。	17	15層?
S364	石錘	6.50	5.50	1.70	79.5	流紋岩	円礫の上下端3ヶ所に打ち欠き。	17-7	12層
S365	石錘	6.40	4.00	1.20	47.5	流紋岩質凝灰岩	円礫の上下端に打ち欠き。	17-4	側溝
S366	石錘	(4.33)	(3.45)	(0.65)	13.0	流紋岩	1/2程度残存。上下端に打ち欠き。	17-5	13・14層?
S367	石錘	6.30	5.20	1.40	58.5	石英安山岩質凝灰岩	円礫の上下端に打ち欠き。	17-4	側溝
S368	石錘	8.50	10.20	1.74	201.3	閃緑岩	大型品。扁平な礫の上下端に打ち欠き。	17	15層?
S369	石錘	4.90	4.00	1.32	39.5	流紋岩	小型品。上下端にわずかに溝を確認できる。	17-7	12層
S370	石棒?	(6.10)	(2.95)	(2.05)	32.3	緑色片岩	表面に加工痕。	17-1	12・13層

図212 包含層出土石器3 (縮尺2/3、2/5)



番号	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石材	特徴	調査次-区	層位
S371	石鏃	(1.85)	(1.40)	0.32	(0.6)	サヌカイト	凹基式。挟りは明瞭。脚部は幅広。	22	—
S372	石鏃	2.20	1.20	0.30	0.8	サヌカイト	平基式。長幅比は大きい。五角形鏃。	22	—
S373	スクレイパー	3.84	7.30	0.67	21.6	サヌカイト	横長剥片を素材。鋭利な刃部。	22-3・4	—
S374	石鏃	(6.30)	4.60	(1.45)	(43.6)	細粒砂岩	基部欠損。周辺に粗い調整。	22	—
S375	楔形石器	1.90	3.30	0.50	4.1	サヌカイト	下端に階段状の剥離。	22	—
S376	楔形石器	2.70	2.20	0.70	4.7	サヌカイト	上下端につぶれた階段状の剥離。	22	—
S377	砥石	6.20	6.00	1.00	52.0	泥岩	表面全体に研磨による線状痕。	22	—
S378	叩石	9.15	(5.75)	4.90	(320.0)	花崗岩	下部に明瞭な敲打痕。	22-3・4	—

図213 包含層出土石器4 (縮尺2/3・1/2・2/5)

b. 第22次調査地点出土石器 (図213 図版22・24)

石鏃 2点出土した (S371、372)。いずれもサヌカイト製である。S371は凹基式で、脚部端は幅広である。S372は平基式で両側縁が中ほどで屈曲し、平面が五角形状を呈する。

スクレイパー 1点出土した。S373はサヌカイト製で、薄い横長剥片の下縁に両面調整を施し刃部をつくり出すが、その調整は粗い。左右側縁には折れ面が認められる。

石鏃 1点出土した。S374は細粒砂岩製で基部を欠損する。素材に周縁から比較的広い剥離を施し、厚みを一定にしようと試みているが、中央部に素材面が残ってしまっており、結果的に凹凸をもつ不定形な側面形になっている。右側縁から下縁にかけて粗く両面調整を施し、弧状の刃部をつくり出す。

楔形石器 2点出土した (S375、376)。いずれもサヌカイト製で、上下辺に相対するつぶれた階段状の剥離が認められる。また、S376は右側面に剪断面が観察できる。

砥石 1点出土した。S377は泥岩製で、表裏面に研磨による擦痕が確認できる。

叩石 1点出土した。S378は花崗岩の円礫の側縁部に明瞭な敲打痕が残る。また、片面にも敲打痕が残るため、凹石としても利用されたと考えられる。

第4章 考 察

1. 津島岡大遺跡第17・22次調査出土縄文土器の型式学的検討

はじめに

津島岡大遺跡の所在する中部瀬戸内北岸の地域は、貝塚等から出土した縄文土器を中心に古くから型式学的な検討がなされ、縄文時代の土器編年の一端を担ってきた地域である。しかし、型式設定の基準となった資料が不明瞭なことや、層位的に良好な状態に恵まれる資料が少ないなどの問題のため、その内容や、編年的な位置づけをめぐる議論は現在も続いている⁽¹⁾。

ところで、津島岡大遺跡第17・22次調査地点では、縄文時代中期末～後期に属する遺構が多数検出され、これらの遺構や、包含層から多量の縄文土器が出土していることは事実報告として記載した。これらの縄文土器は質、量ともに優れた内容をもつものであり、今後、西日本の縄文時代後期の土器研究に寄与することが予測される。しかし、残念ながらこれらの土器群も層位的には良好な出土状況にはなかった。そこで小論では型式学的方法によって本調査地点出土土器群についての検討をすることとしたい。

(1) 津島岡大遺跡第17・22次調査出土土器の概要

1) 出土縄文土器と既存の型式との対応

まず出土した土器群を既存の型式を参照して分類することにする⁽²⁾。それは本調査地点から出土した土器群を既存の型式の指標に照らし合わせたところ、それぞれに複雑な特徴を有してはいるが、ほぼ既存の型式内容に沿ったものであったからである。その結果、これらには縄文時代中期後半の里木Ⅱ式から後期中葉の「津島岡大遺跡後期第Ⅳ群」までの型式のものが認められた。

さて、出土した土器群を各型式の内容に照らし合わせたもの内訳を示しておきたい⁽³⁾。里木Ⅱ式⁽⁴⁾（1点）、矢部奥田式⁽⁵⁾に相当する一群（42点）、中津式⁽⁶⁾（10点）、福田KⅡ式⁽⁷⁾（213点）、縁帯文土器の成立段階⁽⁸⁾にあたるもの（77点）、津雲A式⁽⁹⁾（45点）、彦崎KⅠ式⁽¹⁰⁾（6点）、「津島岡大遺跡後期第Ⅳ群」⁽¹¹⁾（7点）、加曽利B式の影響を受けたとみられる土器⁽¹²⁾（1点）となる。このうち、出土量が多い福田KⅡ式については、磨消縄文帯を構成する沈線束の本数を指標に古相（2本の沈線束によって文様帯が構成されるもの、139点）／新相（3本の沈線束によって文様帯が構成されるもの、74点）とした。ここで分類した資料については、表7において事実記載掲載資料番号と所属する型式との対応関係を示した。

このように、既存の型式を参考に津島岡大遺跡第17・22次調査地点出土土器群を分類したところ、その主体をなすのは福田KⅡ式であり、縁帯文土器の成立段階に相当するものが約2割、津雲A式に該当するものが約1割で、これらを合わせると出土土器群の約8割を占めていることが明らかとなった。また、矢部奥田式に相当する中期末の一群は全体の約1割を占めるが、それに後続する後期初頭の中津式の出土は僅少であり、本調査地点出土土器群の中で主体的な位置を占める福田KⅡ式との間には隔たりを生じることになる。そこで小論では、これら中期末に相当する一群については検討の対象とせず、福田KⅡ式以降に位置づけられる縄文時代後期の土器群を対象に検討を加えていくこととしたい。なお、今回の出土資料では後期中葉に位置づけられる「津島岡大遺跡後期第Ⅳ群」に相当する資料の出土も少量であった。しかし、これについては、本調査地点の南東約200mに位置する津島岡大遺跡第5次調査地点においてこの段階の土器群が層位的にまとまって出土しており、これを参照することによって補うこととしたい。

表7 型式分類と事実報告掲載資料との対応

型式	該当資料番号	() 内は点数
里木Ⅱ	図111-348	(1)
矢部奥田 相当	図31-1~9、図33-1~8、図59-35、図68-157,158,166、図76-2、図89-1~9、図92-47~50、図101-204,205、図105-268、図114-386~389	(42)
中津	図65-113~115、図91-36、図92-51~53、図98-154,155、図114-390	(10)
福田KⅡ (古相)	図21-1~3、図22-11,12、図24-23,24、図25-1~4、図27-8~14,19,25、図31-11、図35-1~6、図45-1,4,5、図49-1,2、図57-1~4、図58-25、図59-27,28,36~38,43、図61-58,59,61、図62-73,83、図63-91,92,99,100、図65-116~124、図68-159~161,164、図89-10~14、図91-37、図92-54~67、70~72、図96-124,126、図98-156~164,167、図101-206~209,211,212、図106-271~289、図112-350~352,359、図114-391~399	(139)
福田KⅡ (新相)	図16-12~14、図21-5~7、図25-5、図27-16~18,20、図45-2,3、図49-3,4,6,7、図58-12,13、図59-39、図61-67,68、図62-82,85、図64-108,109、図65-125,127、図68-163,165、図89-15~19、図93-68,69,73~79、図94-93、図98-169~176、図101-210,213,214、図107-290~300、図112-354,355,360、図114-400~402、図117-421	(74)
縁帯文成立 段階	図15-1、図16-4,7,9,15、図21-9、図22-14、図24-25、図27-21~24、図35-7~9、図53-1、図57-5,6、図59-40,41、図63-97、図65-128,129、図68-155,156、図89-20,23,25、図91-41、図93-81,82、図94-83~92,94、図99-178,180~188、図101-215,216、図108-301~317、図112-353,365,366、図115-403~405	(77)
津雲A	図17-17、図18-3、図21-10、図31-10、図49-8、図55-1、図58-18,19、図59-31~33、図65-130~133、図76-3、図89-22、図94-95-99、図100-189~203、図101-217、図109-318~321、図115-406~408	(45)
彦崎KⅠ	図59-44、図64-104,105、図94-100,101、図96-131	(6)
「第Ⅳ群」	図53-7、図58-20,21,26、図94-102、図109-325,326	(7)
加曾利B?	図109-328	(1)

2) 縄文土器の器種 (図214)

本調査地点で出土した縄文土器の器種は、ほとんどが深鉢、鉢、浅鉢で、これに少量の壺や注口土器をともなって構成されるものであった。このうち、深鉢、鉢、浅鉢、壺については、器形によってそれぞれをいくつかの種類に分類し、深鉢については文様の位置によってさらに細分した。それぞれの分類の基準を以下に記しておきたい。

深 鉢 深鉢A類：頸部がくびれ、胴部にふくらみを有するもの。文様の有無や文様帯の位置で6類に細分する。

深鉢A1類：口縁部文様帯を有するもの。波状口縁と平縁のものがある。

深鉢A2類：口縁部文様帯を有さないもの。

深鉢A3類：頸部が無文帯として独立し、口縁部文様帯と胴部文様帯が分離しているもの。口縁部の形状には、突起を有するもの、振幅の小さい波状口縁のもの、平縁のものがある。

深鉢A4類：胴部文様帯をほとんど有さず、口縁部文様帯のみのもの。

深鉢A5類：胴部に縄文が施文され、口縁部内面に沈線による内文を描くものや、口縁部に狭い縄文帯を配するものがある。

深鉢A6類：文様を有さないもの。長頸のものと短頸のものがある。

深鉢B類：底部から口縁部までにくびれを有さず、直線的に開くもの。

鉢 鉢A類：底部から口縁部までくびれを有さず、直線的に開いて、植木鉢状の器形を有するもの。

鉢B類：頸部がくびれ、胴部にふくらみを有するもの。有文と無文がある。